
愛する人の死・・・そして不良へ

飛亜乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛する人の死・・・そして不良へ

【Nコード】

N2741M

【作者名】

飛亜乃

【あらすじ】

組織の戦いでたった一人の愛していた人、『蘭』が死んだ。大切な人を失ったことでコナンは変革した。

しかし、コナンにはもう立ち直る気力は残っていなかった。残せない、理由があった。それは、大切な人の死との重なりとは、重すぎるもので・・・。

近づく死。支えてくれる人々。そのたびに流す涙。シリアス系名探偵コナン、です。

1 ・変革（前書き）

初めてかく小説ですが、結構かくの大好きなんで、頑張ります。いろいろアドバイス、大歓迎です。い

1・変革

．．．．．蘭が、死んだ。

たった一人の愛する人が、俺の前から、いなくなった。

どうして、どうして、どうして、どうして．．．．っ

ー俺の、せいだ。

俺は、嘆いた、嘆き、悲しみ、叫んだ、そして．．．俺は、変革した。

かつてない、冷酷な、．．．．誰も寄せ付けないような人間へ。

- - - - -

蘭が死んで、2週間。

俺の目は濁りきり、何も、希望の光を映していなかった。

ーガラガラっ．．．

1年B組の教室の扉が開かれる。

コナンが独特のどす黒いオーラを放って入ってきたため

クラスメートは怖気づいて、コナンから離れる。

「おい灰原」

近くにいた灰原に声をかける。

「何？」

どこか毒舌な、でも優しげに哀は答える。

いや、優しげ……ではなく憐れんでいるのだ。
哀れで、悲しげでならないコナンを。

「俺、学校もうやめっから」

『 - え？ 』

聞き返したのは灰原じゃない。

歩美だった。

「こなんくん、 - やめちゃうの？」

涙を浮かべながら、問う歩美にコナンは冷たい投げかける。

「 - そうだけど？」

「なんでだよ」

元太だ。

1 変革（後書き）

さて、このあとのコナンは！？

2・過去（前書き）

ポイントいただけて嬉しいです。

感想も、できればいただきたいです。

では、続きどうぞ。

2・過去

「わかったことっ、又カシテンじゃねえよ!!!」

コナンはかつてない鋭い眼差しで目の前の少年、元太と光彦を睨みあげ、怒鳴り声をあげた。

「・・・悲しいのは俺だけじゃねえダと？ふざけんな・・・蘭はっ、俺にとつてっ・・・そんな軽くっ・・・死んだ、とか認められる存在じゃねえンダよ・・・ゲホッつ蘭は・・・俺の・・・」

そこでコナンは口をつぐむ。そして、腰の横で拳を、強く、強く、握りしめた。

「江戸川、くん・・・」

コナンは顔をあげて、灰原を濁りきった目で見据える。

もうかつてのような、輝きは少しもない。

「灰原まで・・・くだらねえ同情なんか、しやがって・・・ゴホッ
ゴホッ」

コナンはランドセルを蹴飛ばして、教室を出て行った。

コナンがでていき、残ったのは、コナンが蹴飛ばしたランドセルの中身と、クラスの中の気まずい雰囲気

だった。

――教室を出たコナンは屋上にいた。

壁にもたれかかり、しゃがみ込み、腕を横にだらんと下げたまま、顔を俯かせていた。

――蘭が死んだのは、俺の、せいだ。

2週間前・・・

俺は長い間、待ちわびていた組織の壊滅にたくさんの人の力を借りながらも成功した。

だけど、その代償は、あまりにも、あまりにも・・・大きすぎた。

あれは、一度、キック力増強シューズで、蹴ったサッカーボールで倒したはずのジンが、まだ倒れてい

なかった。そして、ジンが俺に向かって拳銃を向けた。

それに感ずいた俺は銃弾を避けようとした。確かに、避けようとした。そして、避けれるはずだった。

なのにあのとき、俺に襲ったのは、原因不明の動悸。心臓が悲鳴をあげた。

そして、足がすくみ、倒れこんでしまった。

”しまったっ・・・”

俺は覚悟をし、目を瞑る。

バキューン・・・

銃声がした。しかし、痛みを感じなかった。

代わりに目の前で、2つのどさつと音がした。一人は、FBIにやられたジン。

そこに横たわっていたのは、・・・蘭だった。

「蘭!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「コナン・・・君、ううん・・・新一」

俺は目を見開いた。

「蘭・・・お前・・・」

「わか・・・ってた。コナンくんは・・・新一、だって、こと・・・。だ・・・って。そ、っくりだもん、」

蘭は、涙をながした。

俺は、もう隠す必要がないと、ふんで、答えた。

「ごめんな・・・ごめん・・・ずっと、黙っちまって・・・おめえを、巻き込みたくなかったんだ。」

結局、巻き込む形になっちまったけど・・・っ」

「いいの・・・ッ。ゲホッ」

蘭は血を吐く。

「蘭!!--!!」

「新一は、ちゃんと、そばにいてくれ、たまん、ね」

「え・・・?」

「コナン、君に、なつてからも・・・ちゃんと。そばに、いてくれて、た。」

「っ・・・でも。俺は結局無力でっ・・・お前を、守りきれなか
ー」

「そんな、こと、ない」

「新一、は、・・・ちゃんと、守ってくれ・・・てたよ、私、結局
新一、に、いろ、いろ、もらって・・・ばかりだった・・・ね。
ごめん・・・ね」

「何、言ってるんだよ。俺のが、お前にいろいろ、もらってた」

「そう、言ってくれて、ありが、とう。でも、私、新一が、そば、
に、いてくれた、から、幸、せだった、よ」

そうだった蘭の目は弱弱しくも、偽りのない光を宿らせていた。

「蘭……」

「しん、一は？」

「え？」

「新一、は、幸せ、だった？」

「ああ……、幸せだったよ。蘭……好きだ。だから……
・なあっ、生きろよ。頼むから……、生きて、くれ」

「あり、がとう……本当に、私、幸せ、ものだ、ね……
でも、ごめん、ね」

コナンは感じてしまった。その蘭のごめんねの意味を。

そのごめんね、は、生きろの、返事だということを。

「蘭……蘭……」

「しん、いち、私も、新一のこと、大、好き、だった、よ」

そうだった蘭の顔は、すごく優しくで柔らかい笑顔だった。

そして、一筋の涙を流しながら、ゆっくりと、そのまぶたは、おろ
されていった。

蘭の命の幕ともに……。

「蘭っ、おいっ、起きろよ蘭！らあああああん！！！！！！」

廃棄ビルの中に俺の声は、ただ、むなしく、響き渡っていた。

過去？（前書き）

ちよつと受験生っていうのもあつて投稿は稀ですが、よろしく願
いします。

過去？

「気づいたら俺は病院のベッドの上に横たわっていた。

「新一！」

目がかすむ中、必死にこらし、目の前の人物を確認する。

「博……土？」

「よかった！なかなかこっちに来てから、目を覚まさなかったんじゃないぞ」

そんなにたつたのか。

あれ……なんか……そういえば

「蘭……は？」

そういうと博士の体はびくつと震えた。そして顔を俯かせた。

「残念じゃが……蘭君は……もう」

「……ちくしょう……」

あのと、蘭の死を目の当たりにしたのに、改めて思い知らされると、それを否定したくなる自分がいた。

「新一、君。自分を責めたらいかんぞ。」

博士の慰めの言葉も今の俺には、全然伝わらなかった。

だって、だって、言い訳したって蘭は、戻ってきてくれない。

「蘭君の、御通夜には、出るじやろう？お葬式にも……」

「……………」

答えられなかった。怖かったから。

受け入れられる気がしないから。

「出てあげなさい。蘭君にしてあげられる、最後の優しさじゃろ」

最後の、か。

「ああ……………」

―そして翌日

御通夜に出たメンツは、俺、博士、灰原、おっちゃん、妃弁護士と蘭の母だった。

「蘭……………」

おっちゃんも妃さんも、ひどく悲しげにあった。

俺は、どうしても、そんなふたりと目を合わせることができなかった。

そんなおっちゃんが、話しかけてきたのは、お葬式の埋葬を行う前だった。

「コナン……」

俺は足を止めるが、どうしても振り向くことができないでいた。

「こっちを向け」

「……ごめんなさい」

何か、責められる前に、先に、口を開いた。今の俺に、おっちゃんの罵声をあびる覚悟もあつたけど、

そんなおっちゃんの気持ちを受け止められる、覚悟はもってなかった。

「謝るな。お前は悪くない。」

俺は目を見開いた。

「でもっ」

俺が悪いのに。なんで、責めないんだ。

「きつと蘭はお前を責めることを望んでないと思ってな」

「！」

俺はこのとき、おっちゃんがすごいと思った。

おっちゃんがどれだけ、蘭を大切だと思ってきたか知っている。

そんな娘を亡くしても、ちゃんと考えて結論に持っていけることがすごいと感じた。

「どうして……」

それでも、それでも、悪いのは、確実の俺だった。

だから、蘭が死んだのに。

「コナン君……最後に、蘭の顔、ちゃんと見てあげて。最後に、ちゃんと御別れをしてあげてほしいの」

「わかり、ました……」

これが、最後にできる、蘭の両親にできる、報いだった。

そして、重い足を、蘭が眠る場所へと、いった。

「蘭……」

いざ、蘭の眠る顔を見ると、目をそむけなくなった。

「ごめんな……俺」

「工藤……」

声の方向に顔をあげると、そこには、西の名探偵こと服部平次が立っていた。

「服部……か。和葉ちゃんは」

「あつちや……相当落ち込んでなあ」

「そう、か……」

「でも、工藤も、つらくてしょうも……ないやろ」

「……」

服部の言葉を見無視し、出口へと歩く

「おおおい工藤っ……」

こいつは優しいけど、直球だ。

だから、つらくてしょうがない、これは少し傷ついた。

「つらいどころじゃねえよ」

そうぼそっとつぶやくと、ただただ何の未来も感じない未知を歩きだしていった。

過去？病（前書き）

さあ暗い道を歩き出したコナンです。
しかし、ここからまた！

過去？病

―「新一」

「！」

ふりむいたそこには博士がいた。

「病院へ戻ろうか」

病院か……でも戻って何になるんだよ。

どうせ待ってるのはどうしようもなく襲いかかる喪失感。

それだけじゃないか。

でも、なんだかんだで博士に迷惑をかけたくなかった。

だから、病院へと、戻って行った。

―病院

博士は、あまりにも新一^{コナン}が元気がないために、心配をしていた。

蘭くんが死んだショックから、新一が立ち直ることができなかった
ら……

新一は一体どうなってしまっくんじやろうか。

暗闇の中に入ってしまったとき、手を差し伸べてあげることができ
るんじゃないか。

ショックなのは、自分だっで一緒だった。あんな幼いころから見て
きた蘭君が死んでしまったんだから。

だけど、それ以上に、きっと新一はショックだったのだろう。常に
蘭君を気にかけていた新一は、蘭君

を失ってしまったそのときに、新一の悲しみは、わしにも想像で
きないものな気がする。

そんな自分でわからない深い悲しみを背負った少年を相手に、自分
は、何かできるのか。

悩んでばかりでしかいられない、自分が、嫌だった。

ーガラガラ

病室のドアが開いた。

「阿笠さん・・・ですね。ちょっとコナン君のことでお話したいこ
とがございます。」

話したいこと？

コナンはゆっくりとドアのほうに顔を向ける。

「阿笠さん。少しお時間いただけますか」

「は、はい。」

なんだか胸騒ぎがした。少し、医師の顔が、曇っていたから。

「あ。じゃあ・・・しん、コナン君。少し、病室をあけるが大丈夫じゃない？」

「ああ・・・平気だよ」

あまりにも、力のない声に、博士は顔を悲しみで曇らせた。

・・・ガラガラ

「あの・・・お話をとは？」

「ああ・・・ちよつと診察室のほうでお話したいとおもいます」

「え？あの・・・なんか変なものでも。。。。」

「・・・とにかくいらしてください」

博士の中の焦りは絶頂に達していた。

そして、診察室の中に入ると、レントゲン、X線検査の写真が貼られていた。

「あの・・・」

「お座りください」

「はあ」

そして座った瞬間、医師の顔が影を増すとともに、よどんだ空気が流れた。

「落ち着いて・・・聞いていただきたい」

「なんだっていうんです」

「この、検査の結果、見てください、ここに、白い塊みтайのがあるでしょう？まあ、ここは骨なんですが、これ。これです」

指でトントンとその差す部分をたたく。

「わかりますか？」

まさか、これは。

「これは・・・」

次の一言で博士の目の前は、真っ暗になった。

博士が医師とともに出て行ってしまった後、なんとなく、トイレに行きたくなったので、ベッドから降

り、部屋を出て、廊下を歩いていた。

そうして、なんとなくぼーっと歩いているうちに、どこを歩いているのかよくわからなくなってしまった。

た。

しかし、その薄暗い廊下の中で、かすかに声が聞こえてくるのがわかった。

この声は、……博士？

そうして声が聞こえてくるところ、ある一つの目立たない診察室の前にコナンはもたれかかりながら立

っていた。

そこから、聞こえてきたこと。それは……とても、残酷で。

今の俺には、つらすぎる、事実だった。

「彼は、……コナン君は、心臓病です」

そこから俺の中で、
何かが狂い始めた。

過去？病（後書き）

なんか下手ですみません。

暗闇（前書き）

第五話です。

これからまだまだ長くなりそうですが、よろしくお願いします。

暗闇

「彼は・・・コナン君は、心臓病です。」

シンゾウビヨウ・・・？

「コナン君が、心臓病・・・？」

「そうです・・・。心臓病を外科手術で治すためには、「一度動きを止めなければならぬ」ことに等しく、患部を治せたとしても心臓が再活動する保証そのものがないのです・・・。おまけに今、コナン君の体はまだ幼い発達期。それに・・・。」

「それに・・・？なんですか」

「進行が、早いんですよ・・・。」

「え？・・・それは一般的より、ということですか？」

「ええ。いつからなっていたまでなのかはいまいちわからないところが多いんですが。」

どういうことじゃろうか。まさか、アポトキシン4869の作用？それで、新一の体内の機能が狂ってしまったのか？でも・・・なんで新一が・・・。

「阿笠さん？・・・大丈夫ですか？」

「え？あ、はい」

「・・・それで、このコナン君の進行具合などから結論を言ってみようと・・・本当に申し訳ないのですが、もうコナン君に・・・手の施しようがないんです・・・」

「え・・・」

「申し訳・・・」

「それは、治せないってことなんですか！もうコナン君はっ、治らないということなんですか！」

「残念、ながら・・・」

「そん、な・・・それで・・・あとどれくらい、コナン君は・・・」

もう博士の声は涙ぐんでいた。

「長くて・・・1年の・・・命です」

ーその会話を、コナンは廊下で聞いていた。

手の施しようがない、残念ながら、長くて1年の命・・・ああ、そういうことね。

俺、死ぬのか。

心臓病で、死ぬのか。

あと、1年で。ああ、長くて1年だったっけ。ってことは、もっと早く死ぬこともあるわけだ。

・・・・・・・・・・なんかもう、何もかも、どうでもいいな。

もう、蘭がいない世界で、生きる意味もそうなかったわけだし。

もう、どうでもいい。

もうコナンの目には、暗闇しか、写っていなかった。

その翌日、コナンは一時退院ということになり、学校へは行った。

しかし、もうそんな学校も、だるい、という印象しかなかったから、やめることにしたのだ。

―そして現在

コナンは帝丹小学校の屋上にいる。

「こんなこと、思い出して、何になるんだかな」

自分で、過去を思い出し、再び絶望を実感した自分に、思わず苦笑する。

なんで、こつなつちまつたんだろつな。

―そう考えた自分に舌打ちする。

くだらねえ。こんなこと考えたって意味ねえじゃねえか。

そつだ、くだらない。

もつ、俺には、すべてがくだらないと思うほどの無氣力が据わつて
るんだろつな。

自覚できる程の。バカみたいな、考えをふけらせて、俺は、ゆつ
くとゆつくりと、太陽の光が当たる

屋上から目をそむけるように、下への階段を下りて行つた。

思わぬ訪問者（前書き）

なかなか書くのむずかしいです・・・。

でもがんばりますw

思わぬ訪問者

あれから、また2か月の日がたった。

あの学校に行くのをやめた日からは、工藤邸に住み込み、すべてを閉じた。

何度が、博士や灰原がインターホンを押し、様子を窺おうと来たのだろうが、コナンはそれも無視をした。

多分、心配とか、そんなんをしているんだろう。

灰原も、知ってるのかな。俺の病気のこと。

・・・どうでもいいか。そんなことを考えたって意味なんてないんだから。

でも、本当に、うざったいな。

なんで、そんなもつ、こんな周りとの関係を遮断した奴に、いつまでも関わろうとするのか。

ほっといてくれればいいのに。

そんなことを考えていくと、頭がどんどんきしむように痛くなっていく。

「-つ・・・」

やっべ・・・・・・・・・・。

ズキンズキンズキンズキンズキン・・・・・・・・

徐々にひどくなっていく頭痛に耐え切れず、ソファーにもたれかかり、頭を抱え込む。

「ーゲホッ。ゴホゴホッ・・・・・・・・」

あれから、ろくに食べていない。おまけに、寝てもいない。

薬だって、服用していない。

だって、いくら悩んだって、さまよったって、生きる意味が、そのための確かな意味が、全然見つから

ないんだから。

そんなときだった。

ーピンポーン・・・・・・・・

「おい工藤—————!!おるか————!!?おるやろ————!!?」

は……つとり？

「おるやろー！ー！？おるんなら開けえやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

うるさい。

「おいコラ工藤！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！開ける言ってるやろー！ー！ー！」

ハアとため息を付き、重く痛みのある頭を抱え、服部の声を無視して、2階にあがろうとする。

「なんやっ！ー！ー！何が何でも開けない気が！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！工藤！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！よしっ。工藤っお前がそない気でいるんやったら、こっちもこっちでやったるで！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

掠れつつある、馬鹿でかい声で、叫び続ける。かと思えば、ドアをガンガンと、大きな音を立てながら、無理やりにも開けそうとでもしているのだろうか。

とにかく今すぐ壊れそうなほど思い切り、蹴破ろうとしているのだ。

こんな真冬に、ドアを壊されでもしたら、北風が舞い込んでくるだろう。同時に、服部という、うるさ

い迷惑人とともに。

「オラー工藤！ー！ー！ー！ー！ー！ー！このドア、ほんまに蹴破ってもええんやな！ー！ー！？工藤おまえが開けないんやったら、このドア遠慮なく蹴

破らせてもらっで――！！！！！！」

そういうとピタと静かになったと思えば

「ウォー——————ラアアアアアアアアアア！！！」

と叫び声をあげて突っ込んでくるような気配がうかがえた。

本気で、さすがにやばいと感じたコナンは、声をあげた。

「わあつたから、黙れ!!!!」

はあ、はあ、はあ……精一杯の声を張り上げたので息があがる。

そうして、ためらいつつもドアを開ける。

しかし、ものすごく陰い形相で服部を睨みあげながら。

「よお、工藤。やあつと開けてくれよつたなあ！」

満面の笑顔で話す服部を一瞥し、即座に扉を閉める。

しかし、閉まらない。その妨げになったもの。服部の足だ。

服部は足をドアの間に、挟み、閉めるのを妨害したのだ。

「やあつと開けてくれたんやからなあ？閉めさせるわけにはいかへんで？」

「寒いだろうが。外」

「おつ ミ中入れてくれるっちゅーわけやなっ！？」

「は？……何言つてやがんだてめえ。人ん家のドア壊そうとした奴なんか、中に入れるわけねえだろ」

そして即刻閉める。

「あっコラ、おい！！！！工藤っ！！！！お前っなんちゅうこと！！！！！！」

「あーっっつるせえんだよ！！！！！！いいから帰れ！！！！ゴホッ
ゲホゲホッ」

叫びすぎて器官が詰まる。

「なっ、工藤おまえ風邪ひいとるんちゃうんか！！！！なら尚更や
っあけるやあああっっ！！！！」

「お前が近くにいとると余計、ひどくなる。」

そういうと、またソファーのほうに歩き、そのうえに寝転がる。

そのあとも、服部の叫び声は、長々とつないでいたが、静かになっ

たので、さすがにあきらめたのだと思っていた。

ーしかし、この男は、服部は・・・この先も、これから、最後まで、俺の支えとなってくれ、バネと

なってくれたやつになるとは、わかっていなかった。

思わぬ訪問者（後書き）

なんか区切り悪いですね。

ごめんなさい。

心配（前書き）

なんか書き方いまいちわかりません。

誰か教えてくださいといいたのですが・・・。

心配

もう、静かだ。

さっきまでの、うるさい叫び声も何も聞こえない。

やっと落ち着いたところで、コナンはトイレへ行き、戻ってきた。

そして、元いたソファーに戻ろうとして、目を見開いた。

「はっ……服部!？」

「よおー工藤 ミ」

「なっ、なんでてめえっ、中に入ってるんだよ!!!」

「なんでって、きまつてるやろ? 阿笠のじいさんとこ行って、事情話してなあ、この家の合鍵もらってきたんや ミ」

「なっ……てめえっふざけんな! 完璧不法侵入だぞっ」

「ああ? ええやろ、こんくらい。それにしゃーないやろ? お前が開けてくれへんかったんやから」

へラつとしながら、ベラベラと、この家に勝手に入ってきた理由を語る服部をコナンは一瞥する。

「最悪……」

そうつぶやくと、足の方をかねて、2階に上がろうと足を踏み出した時だった。

ガシッと、肩を掴まれた。

「！」

「お前、いつまで逃げるんや。」

唐突に、今までとは打って変わって、低いトーンで語りかけてくる服部に、不快感を覚える。

逃げてる、だと？

「どういう意味だ……」

「そのまんまや」

そのまま？逃げてる？何から？俺は、何かから逃げてるのか？

……違う。

逃げてるんじゃない。俺は、逃げてなんてない。

だって、何も知らないのは、目の前にしゃがみ込んでいる服部。

「お前、しっかり食べたりにしてないんとちゃうか」

「はー？」

「顔色悪いし、なんか、痩せた……やろ？お前、あの日から、ろくに食べてもないんちゃうか」

「……まだ、2か月しか、経ってないんだから、当たり前、だろ」

「お前、なんでこんな時まで、一人なんや？」

そついう服部は、一息つき、またしゃべり始める。

「-。お前、……工藤、あの姉ちゃんのお葬式から、この家出てないんやろ？阿笠のじいさんから、聞いたんや。あと、あの小っこい姉ちゃんからもな。お前、学校やめる言うたんやて？なんでや？学校には、あのチビたちとか、仲間おるやろ。なんで、そいつらとも関わるのやめたんや。心配してくれていたやろ。俺だって、同じなんやで。工藤が、あのことで、ショックで、堕ちてまうって思ってたけど、それならそれで、なんで、相談とかしてくれないんや。俺だって、心配なんや。こう親友が、沈んでるとな、心底心配なんや。-一人で、抱え込むなや」

どうしてだよ。なんで、こんな俺みたい人間にいつまでも関わろうとするんだ。

親友？そんなこと言ったって、ろくに関わってないじゃねえか。あつてまだ何年も経ってないじゃねえか。

そんな人間に、なんで、そこまで心配するんだよ。

わかんねえよ……………。

それに……………

「おまえ……………は、何も知らないから」

「え？」

「何も、俺のこと、わかってないだろ。」

「つ……そうかもしれへん。でもつ、だから余計に心配なんやろ！お前のこと、全部全部わかってたら、どうすればいいかもつ全部わかるかもしれへんつ。でもなあつ、何も知らへんから、知りたいと思うし心配なんや！」

だめだ。だめなんだよ、服部。

お前、優しすぎるよ。

だから、余計にこんな真実を、話すわけにはいかないんだ。

―あれ？待てよ。

ってことは、博士は、まだ話してないのか。こいつにも。

なんか、博士にも無駄な心配かけちまってるな。

これ以上、無駄に、他人にまで、心配かけるわけにはいかない。

「……もういいよ、服部」

「え？」

「こんな、他人のことで、そんなくだらないほど、熱くなって心配なんてするな。」

「何言ってるんやつ、そんなわけいくか・・・」うるさい

服部の言葉を、遮る。

もう、これ以上、こいつにしゃべらせたくなかった。

優しすぎて、純粋なこいつの言葉をこれ以上聞くのは、耐えられない、そう思った。

「もう・・・帰れよ」

「工藤・・・」

「頼むから・・・」

もう苦しくて、耐え切れなくて、今までたまった悲壮感で、コナンの、新一の心はあふれ、限界を超えていた。

それだったからかもしれない。

気づくと頬を涙が伝っていた。

涙

「く・・・・・・・・どう?」

服部は心底驚いていた。目の前で、ライバルであり、親友である姿は違えど、工藤新一が、涙を流して泣いているのだ。

それも、何も声も出さず、ただただ涙を流している。

「え・・・・・・・・なん・・・・・・・・で・・・・・・・・俺・・・・・・・・」

やっと自分が泣いていることを自覚したのか、あわてて、そっぽを向く。

やっぱ、つらかったんや・・・・こいつは、何もかも一人で背負うから。

「わりい・・・・・・・・俺・・・・・・・・」

止められないんだろうか、涙が流れ続けているのがわかる。

「工藤・・・・・・・・やっぱ、お前、無茶しすぎなんや・・・・もう、ここまで一人で抱え込んで、泣く事まで、我慢すんなや。俺の前やつてん、泣きづらいかもしれへんけどな。工藤・・・・・・・・俺は、お前に、俺と2人の時まで、すべて我慢してほしいとは思わへんで」

「やめろよ・・・・・・・・」

少し、涙ぐんだ低い声で、コナンは口を開く。

「もうこれ以上、何も言うな。……お前の言葉聞いてると、すごくつらい……」

「……すまへん。わかったわ……俺、自分勝手すぎたな、いきなりやったし。俺、1度帰るわ」

そう言って服部は、足を玄関のほうに、むけ、コナンに背を向けた。

「でも工藤、飯、ちゃんと食うんやぞ。今度来た時、またやつれたら、無理矢理でも口おしこむで」

そういつて、ニカッと笑うと、玄関から出て行った。

それを見ると、コナンはしゃがみ込み、心臓を抑えた。

「ちくしょうっ……」

ガチャ

「あら。西の色黒名探偵さん」

「おお姉ちゃん」

「ずいぶん、早かったわね。最初ずいぶん、大声出してたけど」

「あ、ああ……なかなか工藤が中入れてくれへんくてな」

「え？まさかしやべりもしなかったんじや……」

「あ、いや。中へは何とか入ったし、少しは、しゃべったけどな……」

そういうと、服部は顔を曇らせる。

「何か、あった？」

「……何かあった、とかゆう以前にな、あいつ、ほとんど口にも入れてへんで。絶対」

「え？」

「痩せてたんや。おまけに目の色も、濁ってて……すごく辛そう
でなあ」

「そうだったの……」

「それに……あいつ、自分をもろ責めてるで」

「自分を……。それは、きっと蘭さんのことよね」

「そうやろな……。あいつ、もう完全に自分の周りに、壁作って
まってる」

「受け付けないのね。」

「そつなんや、なんか、情けないなあ。俺……」

「あなたまで気に病む必要ないわ。てゆうかあなたまでそんな状態になったら迷惑よ」

きりっと言い放つ。

「きついなあ……姉ちゃん。」

「悪い?……仕方ないのよ。それに、彼が自分を恨んでしまうのは、状況的にも仕方なかったのかもしれない」

仕方ないなんて言葉でさらっと、言う灰原に服部は、不快感を覚える

「仕方ないって、それじゃあ工藤はあのままでええゆうんか!？」

「そんなこと言ってないわよ。……ただね、ちょっと気がかりなことがあるの」

「気がかりなこと……?」

「実はね、彼が退院してからの博士の様子もおかしいのよ」

「おかしいて……どんな風にや？」

「なんてゆうか、何か隠してるみたいな、そんな感じがするのよ」

隠してる？

「え、隠すて、……何を一体」

「それ、私も気になって、博士に何度か聞いてみたんだけど、はぐ

らかしてばかり」

「なんや、引つかかるな」

「ええ。」

服部は一度考え込むような、そぶりを見せた後に、また顎をあげる

「ちよお俺もしつこく聞いてみるわ。」

といって、奥の部屋へと消えていった。

「やっぱり、心配なのね。」

灰原はそういつて、少しさめてしまったコーヒーを口に入れた。

「キィ・・・」

信じられない

ーキィ ガチャン

「嘘……やろ」

ーあのと、服部は、博士の部屋に入りこんだ。

そして、なんか隠してるんじゃないか、と問い詰めた。

むろん、博士は本当のことをまったく言おうとしなかった。

しかし、それにしびれを切らした服部は、博士の胸倉をつかんだ。

そのとき、博士の白衣の懷から、一枚の紙がひらりと落ちたのだ。

それを博士は血相を変えて急いで拾おうとするが、その前に服部が、バツと拾い上げる。

そして、その紙を見て、服部は言葉を失った。

そのあと、博士はもう何もかもあきらめたかのように、すべてを語り始めた。

白衣の中に入れていたのは、灰原に探されても、常に、身につけているから、絶対に見つからないと思ったかららしい。

そしてすべてを聞き終え、服部は部屋を出ていた。

まだまともにしゃべれる状態でもなかった。

「工藤が……心臓病？……んな、まさか……噓やろ」
ずるずるとドアにもたれかかりながら、片手で顔を抑える。

「信じられへん……信じられへんで、あの……工藤が？」

そんな……

信じられないという気持ちとともに、もうひとつ湧き出た不安。

それじゃああいつ、今頃は……？

こんな心境的にも大きすぎるダメージ、それを請け負ったうえでの、
心臓病。

そんなものを抱え込んで。

体に影響が出ないわけがない。

「やばいやろ！！」

そう叫ぶと、阿笠邸をかけ出て、工藤邸に向かう。

出る際に、灰原の声が聞こえたけれど、気にもかかれなかった。

そして、工藤邸の玄関を勢いよく開ける。

そして、服部の目に飛び込んできたものを見て、服部は目を見開く。

「工藤――！――！」

信じられない(後書き)

短くなってすみません。

新一とコナンの心（前書き）

アドバイスしてくれた方、ありがとうございます。

うまく表現できるかわかりませんが、その心の移り変わりをこの話では、表現していこうかと思っています。
なので長文予定です。

新一とコナンの心

「工藤——————!!!!!!」

コナンは、リビングの冷たい床で横たわっていた。

あわてて駆け寄り、息を確認する。

「あかんっ、こいつ意識飛ばしとるっ……はよ救急車呼ばな!」

携帯をジャケットからとり、必死に119を押す。

たった3つの番号なのに、人間は、必死になって混乱すると、小さな作業もできなくなるものなのか。

そつして震える手で受話器を握りなおすと、コールの鳴る電話から相手の声が聞こえ出すのをひたすら

待った。

「なんやねんっ、なんではよ出んのやっ、おいこら……はい。こちら救急センターです。どうされましたか?」

あっ、工藤がつ、いや子供が1人倒れてんのやっ……しっ心臓病でっ、頼むからはよ来てくれやっ」

『わかりました。すぐ救急車で向かいますので、場所を、もしくは住所を教えてください』

「えっとっ……米花町の工藤邸わかるかっ!?住所はっ……」

米花町なんやつ、2つ2丁目の22番地やつ」

「わかりました。すぐに向かいますので、落ち着いてくださいっ」

ガチャ……向こうの受話器が切れる。

「工藤っしっかりせえっ！目え開けるやつ！！工藤！工藤！」

どうしたものか。西の名探偵は、普段は冷静沈着？ともいえる態度で事件を解決していく高校生探偵を

しっかり努めているというのに、親友と扱っているライバルがこうも命の危機に陥ると、冷静さはもと

い思考外。あせる気持ちで脳内は埋め尽くされる。これが、大切なものを失うそうになる人間の精神状

態なのだ。

―その後、コナンは駆け付けた救急車により至急搬送され、それに乗り合わせた服部はずっと呼びかけ

を続けていた。

博士と事情を説明された灰原は、博士のビートルで搬送先の米花総合病院へ向かった。

米花総合病院に到着後、コナンはすぐさま緊急治療室に運び込まれた。

その間、博士も服部も、あせりをかくせないままずっとそわそわしていた。

唯一冷静だった灰原も、時間がたつにつれ、コナンが心臓病だという事実を受け入れ始め、内心はあせ

りや不安であふれて来ていた。

3時間後・・・コナンは緊急治療室から出てきた。それは、酸素マスクをつけた状態で。

「工藤！」

「せつ・・・先生、しつ、コナン君の容態は・・・」

「・・・お話しましょう。こちらへ・・・ああ、君らは」

「行くに決まってるやろ。もう全部知ってるんや」

「私もよ」

そういった2人の目は断固たるものでゆるがない眼差しを輝かせていた。

「わかりました。その代り・・・それなりの覚悟は必ずしておいてください」

そういった医師の声色のトーンはその覚悟が並大抵のことではないことを告げていた。

「……………医師の言葉を聞いてから、何時間が経っただろうか。」

服部、博士、灰原、この3人の顔に、明るさは映っていない。

博士は、どうしても落ち着けない状態が続いていたために、冷静のかけらが残っている灰原に一端自宅

へと連れて帰られた。

服部は、1人、コナンの病室にいた。

なんでや工藤。おまえが抱え込んでいたってゆうのは、心臓病つちゅー、一人で背負うには重すぎる事

実やったんか。だったら、尚更、なんで相談してくれなかったんや……………そんなことなら尚更。

「俺じゃ……………全然頼りないっちゅう……………そういうことかいな」

「そうじゃない」

突然帰ってきた返事に、服部は目を見開いて顔をあげる。

「くっ……………工藤！おまえっ大丈夫なんかつ」

むくりと体を起こすところこちらを見据えてきた。

「なあんか結局おめーにまで関わらせちまったみたいだな」

「工藤……そっそんなん気にすんなや」

「……服部」

そう言つて、どこか冷やかな目でこちらにわずかに顔を向かせてきたと思うと、ふいに笑みをこぼした。

でもそれは、服部や大勢の人が知るあの明るい自信じみた笑みではなく、すべてを、何もかも諦めたかのようなそんな冷たい笑み。

「く……どう?」

そんな笑みに服部は、こめかみから冷や汗と呼ぶにふさわしいものを流す。

「服部。……しつこいお前に頼み事してやるよ」

「えっ?」

「聞く?」

もう笑みは消えていたが、冷やかな目は消えない。

片方の膝を曲げその上に頭を乗せこちらを向いてくる。

月光で照らされたその顔は、冷たい冷酷な顔そのものだった。

「じゃっ、じゃあ聞かせてもらおうやないかつ！どんとこいやっ！」

そういつて自分の胸板をどんとたたく。

「ふうん……そ。じゃあ言わせてもらっけど」

「おっおっ」

「お前の頭から、この俺、工藤新一、そして江戸川コナンを、消してくれ」

「-は？」

「聞こえなかったか？お前の頭からこの俺の存在を消せって言ってるんだ」

「なに言ってるんやお前……そんなことできるわけあらへんやろっ……だいたいそんなこと簡単に言うてお前はなんや！？なんでそんなこと簡単に言うんや！おまえっわかってないんトちゃうんか！？お前が俺にとってどんだけ重い存在かわかってないんやろ！？だからそんなこと言えるんや！」

「……かもな。でもそれでなんの関係があるんだよ。俺はお前のこと別にわかりたいと思わない。だって結局わかったところで全部無駄になるだろうが。……蘭が……蘭が死んだあと、立

ち直れないって本気で思った。けどな、博士やみんな、お前とかももちろんそう。そんな奴らと過ごしていけばいつか、俺は、立ち直って強く生きていく日が、見えるのかなって思ったんだ。だけど、そのときに聞いちまった、死の宣告。そんなときだな、俺の中で、なんだかな・・・よくわかんねえけど、何かがブチっと切れて、すべてが壊れていくような音を聞いたんだ。もう1番大切なものも手の届かないところに逝って、それでもって自分自身の命も長くない。そう理解できた時、もう意思を持ってすぐ理由が見つからなくなっちゃまって自分でもどうしていいか、さっぱり、わからなくなっちゃったんだ・・・だから、何かにすがりついて頼ることも、力や助けを求めることも、必要ないじゃねえかって・・・そう、思って・・・」

気づくとまた、一筋の涙が、頬を伝っていた。

とめどめなく流れるその涙は、今のコナンの心情を物語っていた。

「でも気づいたら、そんな状況が苦しくて仕方なくなってた・・・そうなんやろ？」

頷く。

「それに・・・怖くなってたっ・・・情けねえけどっ、自分に起っていた、すべての事実が、怖くなってっ・・・」

コナンは、右手で額を抑え、嗚咽をこらえながら、涙を流していた。

服部は、そんな姿を見せる親友に戸惑いはしたが、一方で安堵感を覚えていた。

工藤が、やっと自分に本音をさらしてくれたと、やっと心の扉を開いてくれたという安堵感を。

服部は、コナンが頭を片手で頭を抱え涙を流すベッドへ腰かけ、自らの手で、コナンの頭を撫でてい

た。それはどこかガサツで不器用だったけれど、優しさがちゃんとこめられていた。

新一とコナンの心（後書き）

長くなりました！すみません。

逃げることと立ち向かうことと生きる意味（前書き）

ちよつと前回の話を読み返してみたんですけど、ちよつと行構成がやばいですよね。ちよつと気をつけてみないと・・・（＾|＾；）

逃げることに立ち向かうことゝ生きる意味ゝ

服部は、軽く赤面になりながらも、コナンの頭を撫で続けながら言う。

「当然やる・・・そんな重い事実を背負ってなんかしたら、それ・・・辛くなって当たり前や。だからもっと、頼ってくれたらよかったんや。どれだけお前の力になれるか分からへんけどな・・・でも、少しはお前だって楽になれるて思うで？」

「っ最初・・・お前の優しさがうつと嬉しいだけ、って思ってたけど、同時に・・・怖かったのかもしれないな。お前みたいに馬鹿でやさしいやつは、また、最後に傷つけることになっちゃうから・・・さ。なんか、ほんと・・・悪かった、な」

「あほかお前は。悪かったとか、そんなん謝る必要なんてないんやで。だって、工藤、俺はお前のこと親友やて思うてるからな」

「・・・そっか」

そのとき、こぼした笑みは、とても優しげな笑みだった。

でも、どこかさみしそうで。

「なあ服部・・・お前もし、さ、和葉ちゃん失ったら、どう思う？」

「かつ和葉！？なっなんでそこに和葉出てくんねん」

「・・・わかりやすいねお前。好きなんだろ？」

「すっ・・・好きでそんなわけ・・・」

「お前俺にあんなガーガーとかっこいいこと言っというて、和葉ちゃんには言えねえのかよ」

「うっさいわっ・・・しょうもないやろ！て・・・お前、なんでこんな話逸らしてんねや」

「お前のせいだよ」

「へっえ？ア・・・そういやなんか違いよったような」

「ハア・・・だから、和葉ちゃん失ったらどう思っつて聞いたんだろ？」

「あっ・・・せっせやったな。俺には・・・よくそういうのわからへんねや・・・。いつも一緒にいすぎて逆にようわからなくなるとうか・・・」

「・・・だよな。でも、いつも一緒にいたはずのやつが、急に消えちまうんだ。はつきりいつて、つらいなんてもんじゃない・・・ぜ？」

顔は笑ってはいるが、目も表情もさみしさがあふれているのがまるわかりだ。

「無理せんくてええって・・・言ってるやないか。なあ工藤・・・」

おまえんちで、お前に“逃げるんか”って言うてもうたやる……
・？」

「……ああ」

「あれなあ、言った後ちよつと後悔したんや。確かにお前は傍から見たら、現実逃避している、そう見えたかもしれないけどな……？でも違ったな。工藤は、何も逃げてなかったんや。たった1人で背負いこんで、事実も辛さも、苦しさも全部自分の中だけに閉じ込めて、わかりにくいけど、ものすごい葛藤してたんやな……」

「葛藤、か……でも、それでも俺はお前の言うとおり逃げてたのかもしれない。自分だけの中にすべて閉じ込めることで、もうそのまま誰にも侵食されず、侵されず、そのままの状態で、立ち向かうことなんかせずに、自分はそのいろんな事実から、逃げてたんだな……立ち向かうてき、口だけじゃ簡単に言えることだけど、事実……そんなうまくはいかねえよな。」

「……せやな。」

「でもさ、俺、お前のおかげでもあるけど、なんかわかってきた気がする。」

「え？わかってきたて？」

「自分の、生きる意味」

生きる意味……。聞いた瞬間、服部は、心底うれしくなった。

「そおか、ハハッ。そおか！よかったで……。生きる意味、見つ

けられて」

「ああ・・・俺は、自分のせいで犠牲になっちまった蘭のためにも、俺のこと考えてくれたお前やみんなのためにも、いくらこの先、短い命だとわかっていても、それなりに生きてくべきかなって・・・さ」

「そうやで！おまえは生きるべき人間なんやからな。そういうこと、わかることができたお前は、すごい奴と思うで。さっすが、俺の親友やな！」

生きる意味。それは、ごく普通の人間には、当たり前にあるものな
のかもしれない。でも、1度失われれば、なかなか、見つけること
ができなくなる。

だけどそれを見つけて、また1歩踏み出すことは、並大抵のことじ
やない。

想像を絶するほど、大変で、大変でたまらないもの。

だけど、それをようやく成し遂げ、希望を見つけた工藤新一、江戸
川コナン。

だから、だからこそ、服部は、言えなかった。

コナンに、新一に。

あの医師から、告げられた驚愕な事実を。

暗闇で埋め尽くされた、真実を。

逃げることと立ち向かうことと生きる意味（後書き）

ちょっと、何か・・・と思われるかたばしばしコメントください。

参考にさせていただきます。

辛辣な事実（前書き）

この話では、服部が、「驚愕の真実」と言っていた中身を紹介していききたいと思います。

また、こんな素人の小説を、読み続けてくださるとありがたいです。

辛辣な事実

「服部は、思い出していた。コナンの手術が終わったあの後、医師に連れられた診察室で告げられた最低最悪、驚愕すぎる事実を。」

「どうぞ、お座りください」

「あ、はい」

博士が答える

「先ほど、覚悟を、と申し上げましたよね。」

「え、ええ」

「彼の心臓病、以前申し上げた時よりも、また、進行が進行が早くなっているのです」

「・・・・・・なんやて？」

「彼、この2カ月どんな生活をさせていたのですか？」

「え？」

そんなことを問われても、2ヶ月間ふさぎこんでいたコナンの生活など知っていない。

「ろくに、栄養も摂取できていない。体重も減っている。検査の結果、睡眠不足も発覚し、どれも心臓に悪影響を与えるものばかりだ。」

「それは……」

「とにかくです。今はまだいいのかもしれませんが、この先心臓病の発作が現れてくるでしょう。」

「発作というと、胸の……苦しみとかよね？」

「ん？ああ、そうだ」

「激しい運動をすることだつてできなくなる。それくらいご存じでしょう？そんな厳しい状況の中で栄養もまともに取らせない生活をさせていたら、余命が短くなることだつてあるんです」

「……余命が……」

「そうです。だから、しっかり世話、保護をしてあげてください。今後時がたてばたつほど、どうゆうふうな生活に切り替えるか、選択しなければならなくなりますし」

「……そうですよね」

「しっかり、守ってあげてください。だつて彼は、小学生でしょう」

小学生。

確かに傍から見たらそうなのかもしれない。でも中身は高校生。だからといって、背負うものは大きすぎたろう。

だが、考えてみれば、病氣と闘っていくのは、小学生の体だ。辛いものになるだろう。

そんなコナンの支えになれるように全力をささげようと思った。

「……り？つとり！服部！！！」

「へっ、あつすまん」

「大丈夫かよ」

「ああ、平気や平気」

「あんま無理すんなよ、お前まで。」

「わかつとるわい！工藤もな」

「……ああ」

「なあ工藤？」

「ん？」

「頑張ろうな」

頑張ろうな。工藤。病気なんかには負けるんじゃないぞ。
絶対に……

辛辣な事実（後書き）

あんま今回は長くならなかったですね。
すみません。

時間（前書き）

ちよつと毎回毎回サブタイトルなやみます。

タイトルセンスないなあって思う人、言ってくれてかまいません。

あと、すみません・・・

ではまあとりあえずどうぞ

時間

「頑張ろうな」

そう言った日から早2週間が過ぎていた。

あれからというものの、コナンは一切工藤邸に1人でいさせてもらえなかった。

博士と哀がそれを許さなかったからだ。

博士は、コナンが少し立ち直ったのを見て喜んでいたが、それを機に、もう一切、無茶を許させるような状況を作らなかった。

医者に言われてから、責任感をより感じるようになったのだ。

その後もコナン、いや、新一の両親にもコナンが心臓病ということ連絡した。

有希子は絶句していた。優作も悲しい驚きを隠せないでいたが、すぐにこっちへ戻ってくるといったのだが、それはコナンが断った。

おそらく、あまり心配してくれる人がたくさんいても、疲れるからだろう。

哀はというと、何より怒っていた。コナンに。

「馬鹿じゃないの！そんな状態で抱え込むことしかしなかったのよ

「！」

と。その後も延々と1時間くらいの説教をコナンは受けていた。

「仕方ねえだろ・・・」と口答えもしたのだがあっけなく制され、コナンに反抗する余地はなかった。

説教が終わった後、案の定コナンはぐったりしてへこんでいた。

服部はそんなコナンをみて、苦笑しつつも同情していた。

間違いなく心臓病に影響はあっただろう。

だけどそのあと、コナンは微笑んでいた。疲労感があったかもしれないが、それでもみんなの優しさを感じていたその顔は、すごく優しかった。

「そして現在。

「バフッ

「工藤君!？」

「!?!?なんだようっせえ・・・つか、なんで横になっただけで叫ぶんだよ」

「倒れたかと思ったわ」

「失敬な。」

「紛らわしいで」

「おめえも思っただのかよ」

「ああ。思っただわ。」

「まじむかつく」

拗ねたようにそっぽを向く。その姿は、まるで本当の小学生だ。

「まあまあそんな拗ねんなや工藤」

「拗ねてねえよ」

「そつよ工藤君？あなたまるで本当の子供だわ」

「灰原てめえ……」

服部も哀もからかい状態だ。

くすくすと笑い続ける。

「おめえらマジうぜえ」

そついつてまた横になり、テレビをつける。

しばらく3人の間には沈黙がつづく。

「あ」

そんな中口を開いたのはコナンだ。

「灰原あ。俺も明日から学校行くわ」

「は？本気？」

「本気に決まってるんだろ。飽きたんだよね。毎日毎日暇な生活」

「お、おい、工藤ちょお待てや。大丈夫なんか？？」

「ああ？大丈夫に決まってるんだろ。いいだろ灰原？」

「いいとは言えないわね」

「なんでだよ」

「学校に行ったら、吉田さんたちだっている。あんな教室の出ていきかたしたあなたを心配するわ。そうやって質問攻めにされたりするだろうし……」

「だからなんだよ？関係ねえよ。俺が行きたいから行くだけ。それだけなんだから」

「……あなた学校いったら無理すること多くなるだろうし。私的には反対ね」

「悪いけど灰原。俺、最初から反対されても行くつもりだったから。だから明日から普通に行く」

「でも「うつせえなあ」

哀の言葉を制す

「いいだろうが。何やったって。自分の体なんだから自分でなんとかできるさ。それに・・・俺はおめえらと違って、時間ねえんだから」

「時間ねえんだから」

この言葉を言われて、哀も服部も何も言えなくなってしまった。

言ったコナン自身もどこかさびしい顔をする。

・ガチャ

「帰ったぞー・・・ってどうしたんじゃ？」

買い物から帰った博士は、このうちの中の重い空気に、疑問をもつ。

「あんま俺を縛るなよ」

な、と小さく言い、コナンは偽りの笑みを浮かべた。

時間（後書き）

受験生なんでこれからも更新遅くなりますが勘弁してやってください。

（なんだそら）

― 嫌な夢 ― 再登校

「コナン君」

「よお。」

「大丈夫なんですか？」

「ああ。この前は悪かったな……」

「そんなこと気にすんなよ。コナン」

「それより、大丈夫ですか？」

「大丈夫って何がだよ。」

「何がって。……心臓病なんでしょ？コナン君」

「は？」

「なんで知ってるかって聞きたいの？そんなの当たり前でしょ？」

「当たり前……？」

「そうだぜ。蘭御姉さん死んで、心臓病だったら、落ち込むの仕方ないよな」

「そんなはつきり言ったらいけませんよ。元太君。コナン君傷つくでしょう？」

「そうよそうよ」

くすくすと三人は笑う。

「おま・・・えら?」

「ねえ、コナン君。コナン君、あとどれくらいで死ぬの?」

「は・・・何言つて。」

「心配しなくてもいいですよ。ちゃんと、お墓参り行ってあげますから」

「そうそう。だからとつとと逝けよ。コナン」

「そうよ。どうせ私たちにはわからない問題なんですよ?だったら、永遠に一人でいたら?」

「そうですよ。自分で抱え込んで一生終えたらいいじゃないですか。どうせ1人のほうが、幸せなんでしょ?」

「それに、コナン君。あなたが死んだところで別に大して気にもならないんだよ?」

「お前なんて最初からいなくてもよかったんだよ」
「いなくてもよかったんだよ
必要ないんだよ」

だからとつとと逝っちゃってくださいよ

「おまえ・・・・・・・・らどうし・・・・・・・・て」

3人が感情のない目でコナンの方向へ迫ってくる。

「バイバイ」

ーうわぁあつつ！！！！！！

「ハアツハアツ　ハアツハアツ・・・・・・・・ゆ・・・・・・・・夢？」

カチ　カチ　カチ　と大時計が針を打っている。

カチつと部屋の電気がつく。

「く、工藤！？どないした！？」

どうやら近くのソファで寝ていた服部を起こしてしまったようだ。

息を荒らしている、コナンの顔色を窺いながら心配そうな顔をしてくる。

「ハア　ハア・・・・・・・・わりい、起しちまって」

「んなこと気にすんなや。平気か？えらい汗かいてるで。水、飲むか？」

「頼む・・・・・・・・」

服部はキッチンまで行き、水道水をコップに注ぎ、コナンに渡す。

「ほら」

「サンキュ……」

「ほんまどないした？顔色ごっつ悪いで？」

「いや……平気……変な夢、見ちまっただけ」

「変な夢？」

「ああ……ちょっと、ある意味、気味悪かったただけだから。大丈夫……」

「？……今日行くんやろ学校。。行けるんか？」

「あ、ああ……」

時計をふとみると、もう5時を回っていた。

「もう、こんな時間か」

「ああ。そのまま起きとるか？それか、もうひと眠りするか？」

「いや。起きてるよ……寝れそうもねえから」

「聞くで？」

「えー？」

「変な夢やったんなら、他のやつに話したほうが少しは気い楽になる思っけどな」

「うん．．．．．なんか3人が出てきた」

「3人？」

「元太と、歩美と、光彦」

「ああ。あのチビたちが」

「うんそう．．．．．なんかあいつらがいて、俺、また再登校する夢だったんだけど」

「再登校？なんや現実的な夢見はったな」

「ああ．．．．．それで、あいつらが俺の心臓病のことを知ってる夢で．．．」

「うん」

「そしたら、あいつらが．．．」

「コナン君、あとどれくらいで死ぬの？」

「あとどれくらいで死ぬの？って．．．」

「ちゃんと、お墓参り行ってあげますから、」

「お墓参り行ってやるからって……」

「だからとつとと逝けよ。コナン」

「とつとと逝けよって……」

「永遠に一人でいたら？」

「永遠に一人でいけば？って……」

「自分で抱え込んで一生終えたらいいじゃないですか。」

「自分で抱え込んで一生終えたらいいだろうって……」

「あなたが死んだところで別に大して気にもならないんだよ？」

「俺が死んだところで別に大して気にもならないんだって……」

「お前なんて最初からいなくてもよかったんだよ」

「俺なんて最初からいなくてもよかったんだって……」

「バイバイ」

「バイ……バイって」

コナンの体はガクガク震えていた

「工藤っ？工藤！しっかりせえ！大丈夫や、それ夢なんやろ？」

「コナンの肩をもち、説得する。」

「ゆ・・・・・・・・め」

夢？ああそうだ・・・・・・・・これ現実じゃないのか・・・・・・・・

「わり・・・・・・・・い、服部」

「いや、俺こそすまん・・・・・・・・変に思い出させてしもたみたいで」

「いい・・・・・・・・気にすんな。ただ・・・・・・・・やな夢だったな・・・・・・・・」

「そうみたいやな・・・・・・・・今のきいてわかったわ」

「そつか・・・・・・・・。なんか、ああゆう夢見ると実感わいちまうな」

「え？」

「でも、少し楽になったかもしんね。・・・・・・・・おまえのおかげ。ありがとう。まじで」

「お、おう。かまへんで、これくらい。でも、工藤。ホンマ今日大丈夫か？」

「ああ。大丈夫。心配すんな」

「そうか。ならええけど。」

フ、と得意げに笑った。

「あれから約2時間

「本当に行くの？工藤君。」

「ああ。行くよ」

「そう・・・じゃ、私先に行くわよ？あなたが多少入りやすい状況くらいにはしておいてあげる。」

「え・・・？」

「だから。あんな状況で終わつたまま、今日行くんだから。いろいろ入りにくい状況下でしょ？だから、少し補助してあげようって言つてんのよ」

ふいつとそっぽを向く。灰原に頼は多少赤くなっていた。

「じゃ、行くから。」

玄関のドアに手をかける。

「灰原！」

コナンは灰原を呼びとめる。

「なによ」

「サンキューな」

笑みをこぼしながら言う、コナンをみて、灰原はまた頬を紅に染める。

「わかったんなら、登校時間ぎりぎりに来なさいよ」

「ああ。わかった」

ボタンと、足早に去って行った。

「あんの姉ちゃんも素直じゃないなあ」

「昔からだろ？」

「せっかく美人なのに、もったいないんじゃないか？」

「素直すぎても、あいづらしくないと思うんだけど。」

「ま、それ想像したらちよおたまげるけどなあ。」

「だろ？」

―そして再登校の1歩が幕をあけた

大切な友達（前書き）

久々の投稿です

遅れてしまつてすみませんでした。

ちよつと夏休みは受験生にとって頑張りどころですからねえ（笑）

あーあ。もう夏休みは終わっちゃいます。

まあそんなことを忘れるために小説をどぞw

大切な友達

ーガラガラ

『コナン（君）！！』

3人が駆け寄ってくる。

「大丈夫！？哀ちゃんから聞いたよ！しばらく体調悪かったんだよね」

「この前は、すみませんでした。コナン君。僕たち、コナンくんの気持ちよく考えもせずにあんなこと言っちゃって」

「ごめんなコナン。」

「いや、俺のほうこそ悪かったな。自分の身勝手さで、おめーらに迷惑かけちゃって」

「んなこと気にすんなよっ！コナンらしくないぜ！」

「そーですよ！コナン君がまた自信満々に笑ったり、いろいろ教えてくれたりしてもらうことができればそれでいいんですよ！」

「そうそう！みんなコナン君好きだもん！それに、私たち大切な友達だもんね！だよね？」

『おう！（はい！）』

「おめえら……」

嬉しかった。自分の周りにはこんなにも温かい奴らがいてくれたことが。

この瞬間、俺は誓った。俺の人生が終わるそのときまで、俺はこいつらのことを大切にすると。

「おめえら、サンキューな」

優しい笑みでコナンは言った。

「よかったじゃない。こんなイイ子たちが友達で」

耳元でぼそつと灰原が言い放つ。

「ああ。」

そのあとも、この日は楽しく会話したりしていた。今まで退屈だと感じていた授業も、なんだか新鮮に感じられた。

ーキーンコーンカーンコーン カーンコーンキーンコーン

放課後のチャイムが一日の終わりをつけた

「コナン君かーえろ！」

「おう」

― 帰路の途中

歩美、元太、光彦の3人は仮面ライダーの話や学校の授業の話で盛り上がっていた。

しかし、それを少し離れて聞いていた灰原はコナンの異変に気づく。

「ちょっとどうしたの！？ 顔色悪いわよ」

「え？ ああ平気だつて。久しぶりにいろんなやつとしゃべったりして疲れただけ」

そういつて作り笑いを浮かべるが、そんなのは哀にはお見通しで。

「・・・ま、いいけど？ どうせあなたが今住んでるのは阿笠邸。いや・でも聞き出してあげるから。本当のこと」

そういうと冷たく笑う。それを見たコナンは顔をしかめて

「こえーよ・・・」

「じゃ。コナン君、哀ちゃん、また明日ね！」

「おお。じゃあな」

「さよなら」

「無理しちゃだめですよ。」

「無理するなら飯食えよ、コナン！じゃあな！」

「おめえじゃねえし。ま、じゃあな！」

御笑いコンビのような言い方で、別れを告げた。

「あの子たちにまであんなこと言われちゃ平成のホームズもおしま
いね」

「おしまい言うなよ。おめー素直じゃねえよなあ本当に」

「何かいった？」

その目線に勝るものなし。

「なんでもありません。（なんでこんなコエーんだよ）」

「悪い??」

なんで聞こえてんの!?

「だって顔に出てるものあなた」

「お前はテレパシー使えんのかよ」

「あなたに対してはね」

そういつてクスクス笑った。

そんな灰原をみて、コナンは、ふとおもった。

今はみんなこんな普通に接してくれるけど、俺の症状が悪化して元太達にも病気のことが知られるようになったら、どうなるのだろうか。

ーとつとと逝けよ。

悪夢がよみがえる。そんな嫌な映像を自分で振り切る。

ありえねえって。あんなこと。

・・・でも今と同じ態度では接してくれなくなるよな。目の前に寝たきりのやつとかいたら。

無駄に気い使ったりしてくれんのかな。できれば、そんなこと願ひ下げだ。

ただでさえ優しい心を持ったあいづらに、さらに追い打ちをかけるように心配させたりすることなんてできないんだから。

だったら自分でいけるとこまで踏ん張ってみるしかないか。

よし！と新たに自分自身にまた、決意を刻み込んだ。

大切な友達（後書き）

なんかまたびみよーナ・・・

もうでも許してやってください（弱り切ってる。

それでは次はしゃきつとできるようガンバリマス
ミ

迫る時間と症状悪化（前書き）

余命宣告から、いよいよ3か月を迎えます。

久々の投稿になりました。テストも終わったので、とりあえずは一定のペースで書いていけるかな？と思いますのでよろしくお願いします。

迫る時間と症状悪化

学校に登校するようになってから、1か月がたった今。

コナンの体は、心臓病によって、徐々に少しずつ、しかし確実に、蝕まれていった。

ードックン

「・・・っ!!」

またかよ。

ずるずると、部屋の壁にもたれかかりながらしゃがみ込む。

最近学校から帰ってくると必ず1度は起こる発作。

この病気にこの発作がつきものなのは知っていたけど、思っていたよりもずつとずつときつい。

胸のわしずかみにするように、服の上から手を抑えつける。

「ゲホッ・・・」

こめかみから嫌な汗が垂れていく。

これからしばらくこの発作が続いていき、そして、これよりも頻繁に起こっていくのか。

そう思うと、思わず哀しい苦笑がこぼれてしまう。

―しばらくして発作が落ち着いてくると、ズボンのポケットの中の携帯のバイブが鳴っているのに気づいた。

「はいもしもし」

「おお工藤か！」

―服部だ。俺が学校に行くようになってから、服部も一端大阪に戻ることにしたのだ。

まあ当然だろう。服部だって学校に行かなければ留年になりかねないし。

また電話するで！、と明るく帰ってくるまでは、結構だったが。

なんにせよ、その電話がしつこいのだ。

必ず１日に１回は、かけてくるのだ。これもこれでそれなりに疲れるのだが。

「んだよ」

「んだよじゃないやろ？相っ変わらずそっけないのぉ」

「ほっとけ」

「まあまあ工藤はん！そんな怒りなはんや　ミ」

「おめー、いつも元気だよな」

「そろそーやで！工藤と電話してるんやからな！」

「あ、そう……そりやどうも。でも毎日毎日かけてこなくていい」

そしたら電話の向こうでガンという低い声が聞こえた。

「そりゃないで工藤おおおお!!!」

「うっせえよ」

耳にキーンと響く。

「用ないなら切つていいか？」

「おいおい待て待て待て――――！！！！！！！！今日は伝えよ思
たことがあつたんやわ」

「それなら早く言えよ」

・・・・ちよつと中断。あとで編集します・

じれったいな。そう思ったが、一応言わないでおいた。きつとあとで面倒なことにあとでなりそうだから。

「俺またそっち行くわ。週末。」

「え？来るのか」

「おお。だからちゃんと家にいとけよ」

「わかった。あーあのさ……」

ちよつと気になっていたことを口にしてみる。

「なんや？」

「和葉ちゃん、大丈夫か？」

「え、ああ……今は大丈夫や」

それを聞いてほつとする。けどなんだか妙に服部の声がそわそわしてることに気づく。

「何？」

「え、や……。俺が励ましたたら、元氣とりもどしたわ」

「どうやって？」

「へー！？？」

ニヤリ、とコナンは笑って、これは面白そうだと話題を変えてみる。

「だからあ、和葉ちゃんをどうやって励ましたんだって聞いてんだよ」

「べつ、別にそんなこと教えんかてっええやろが！！！！／／／」

ああ。真っ赤になっちゃって。やっぱりこいつ、からかいがいのある奴かもなあ！。

「なんだよ服部。俺が珍しく頼みごとしてんだぜ？普通聞くだろ」
すると「それもそやなあ・・・」と生まじめな声で考え込む。

「な？服部。俺とお前って「し・ん・ゆ・う」だろ？」

「・・・分かたわ」

ぷはっ、と思わず吹き出してしまう。こいつってやつは、ちょっと引っかければ、すぐ口を滑らせる。
秘密事はできないようなタイプだよな、と思う。

「なっ、何吹き出してんねん」

「や、別に。いいから、話せよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・んや」

「あ？何？聞こえナイ・・・・・・・・」

「抱きしめったったんや！！！！／／／／／」

俺は携帯を耳につけたまま、しばらく停止してしまった。

「まじで？」

「まじや」

「お前が？」

「せや」

「和葉ちゃんを？」

「せや！！！！／／／」

「ぶつ。アハハハッ／／／あのお前がねえっ！ははははは」

さつきより何倍も豪快に吹き出し、大笑いをする。

「なつ、こらっ工藤っ／／／お前失礼やぞっ、そこ大笑いするとこちやうやる！！！！」

「あはははははは、わりっ、ぶはははは／／／」

どうも笑いが止まらないらしい。
でも、平次はそんなとき、ふ、と気がついた。

工藤がこんな大笑いするなんて、どれだけぶりだろうか、と。

「おい工藤」

「ははは　あ？　ぶつ。あはははは」

いやいや、でもこれはちよつと大笑いしすぎとちやうか？

それでも、

「お前、久しぶりにそんな笑ったやろ」

「えっ？ははっ そういや・・・そうだったな」

自分との会話で、新一がこんなに大笑いしてくれることが、すごく、幸せだと感じた。

「なんか・・・笑いすぎて腹いてえよ」
まだ小刻みに笑っているのが分かる。

「せやかて、お前笑いすぎちゃうかあああ？」

「かもな。・・・わり」

「思えば、こうやって大笑いするのも、あと何回なんだろうか。」

自分自身、幸せだと、楽しいと、そう思える日は、残りの限られた時間の中でどれほどなのか。

「なあ、服部」

「なんや？」

この声も、あとどれくらい聞けるのか。

あと、どれくらい、俺の心臓は生きてる証を刻むのだろうか。

「今日は、切るぞ」

「また急やな。まあええわ。ほんじゃちゃんと週末家におれよ?」

「わかってるよ。何度も言うなっつの」

あと、何度、服部の、みんなの顔を見れるのか。

みんなに、-「ありがとう」-そう言わなければならなくなる日まであと何日なのか。

「さよかwじゃあまたな」

「ああ。じゃな」

-ピッ

会話終了のボタンを押したとき、俺はまた、迫る時間を、実感したような気がした。

「

迫る時間と症状悪化（後書き）

なんか、中途半端に2回でわけてしまってますみません（・・・；）

今後気をつけます。

温かい手（前書き）

さて、投稿します。

異常に眠いんですが、なぜか。

まあ話矛盾しちゃったなら、ごめんなさい。

温かい手

ごろっ……ごろっ。

さつきからコナンは、ソファアの狭い間を転がっている。

今にも寝てしまいそうな目で。

「工藤君？」

その声に動きを止め、顔を上に見あげると、灰原の顔があった。

「あん？」

「何やってるのあなた。それ小一時間やってんじゃない。」

「え？」

そんなにごろごろしてたとは自分でも気付かなかった。最近時間の感覚が狂ったような気がする。

ゆっくり体を起こす。

「ごろごろしてるのはいいけど。寝たいならベッド行きなさいよベツト」

「ん……。でも今日服部来るし起きてねえと。」

「ああ。大阪探偵さん？そういうえばそんなこと言ってたわね。」

「ああ。」

「何時頃来るのよ」

「聞いてねー」

「はあ？それくらい聞いときなさいよ」

「いいじゃねえか。あいついつもアポなしでくるんだからそれに比べりゃあ」

「まあそうだけどね……あなた大丈夫？」

「ん。何が」

「顔色。悪いんだけど？」

そう。今日のコナンの顔はあまり体調良さげなものとは言えない。

「平気だっつの、1週間の疲れってやつだろ」

「あんたの平気って信用ならないのよね」

「てめ。それひでえよ」

ー本当は疲れだけではなかったが。

毎日毎日襲う発作が耐えかねなくて、疲労感が半端ないのだ。

発作が毎日来てるなんてこと。もちろん誰にも言っていない。

「なあ灰原あ」

「何よ」

「コーヒー」

そういつて手を差し出す

「作れって？」

「そゆこと。」

「ミルクとか入れられないわよ。いいわね？」

「いいよ。俺どうせブラック派だしー」

「何がだしいーよ。まったく」

「んな怒んなって。おめーぜってえ怒んねえほうがいいぜ」

「それ。あなたが原因なんだけど？」

「え？俺？」

「当たり前でしょ。」

当たり前って……。ちょっと傷つくんだけど。

ーピンポーン・・・

「あ」

「来たようね」

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピン

「うるせえっ！ー！ー！ー」

そう言つて、ドアを思い切り引き開けると、服部のスネを力いっばい蹴った。

「イ~~~~~~~~！ー！ー！ー！ー！ー！ー！何すんねん！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー」

「何すんねんじゃねえっ！ー！うっせえんだよこの馬鹿！ー！」

「だからて、弁慶の泣き所を思い切りけることないやろ！ー！ー！ー！ひっどいやっちな！ー！」

「何でてめえはもつと普通に登場できねえんだよ！ー！ー！」

「普通やろ！ー！ー！ー！」

「普通じゃねえっ（怒！ー！」

スパーンッ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「っ！！！！てーなっ！！！！何しやがる灰原！」

スリッパを片手に持った灰原が顔に恐ろしい影を作り、仁王立ちしていた。

「うっさいわよあんたたち！中入るなら入んなさい！近所迷惑よ！」

あまりにも冷たく威厳のある灰原の発言に、2人はおとなしく従った。

ーガシャンっ

「ほらコーヒー！西の色黒さんも飲みなさい！私は地下にこもるから邪魔しないでね。もしなんかあったときだけ来て。それ以外は来ないですよ」

「へいへい……怖えって……」

「何？」

「なんでもないです」

「工藤負け負けやな」

「ほっとけ」

灰原はすたすたと地下への階段へ行ってしまった。

置いてつてくれたコーヒーを飲みながら、コナンは冷静を戻す。

「うまい。」

「ホンマやな。」

あいつコーヒー作るのうめえんだよな、と呟き再びコーヒーを口に流し込む。

そういうと、服部とコナンはテレビのほうに向きなおり、しばらくぼーっとし、沈黙を続けていた。

「なあ工藤」

「ん？」

「最近体の調子はどや。」

「どうってこともないけど」

「さよか。ならよかったわ。飯はちゃんと食っとるか。1日3回朝昼晩」

「食わされてるよ」

「ちゃんと寝れとるか？」

「寝てますよ。っておめえは俺の親かよ。」

「ちゃうけど……心配やろ。おまえいつも無茶するせいで」

「……別にそんな心配するようなことねえよ。くだらねえこと
考えんなっつの」

「工藤……」

それからまたしばらく沈黙が続いていたが、それを破ったのは服部の驚声だった。

コナンがいきなり服部の手を握ったからだ。

「!?!?!?!?!?工藤!?!」

「あつたけえな」

「……え?」

「おめえの手。すんげえあつたかい」

温かい。まだまだ寒いといえるこの季節。12月下旬。それなのに
こいつの手は、こんなにも温かい。

いや、体温とかの問題じゃねえか。こいつの心があつたかいから、
だから手にもこんな温かさをとることができる。

「……そ、そりゃ、この部屋暖房効いとるし」

「そついう意味じゃねえよ」

「へ?そついう意味じゃないてどういう」その証拠に」

コナンは服部の目を見ず、言い放つ。

「俺の手は、冷てえじゃねえか」

「そんなことないで？ちゃんと温まってるし、寒いなら暖房の温度上げるなり……」

そういう意味じゃねえんだよ、服部。

俺は、お前と違って、心なんて、全然温かくない。

……俺の心は、冷てえんだよ。

表だけで、きっとその表皮が剥がれてしまえば、きっとまた、自律できなくなる。

立ち直れなくなる。

だから、俺は表の皮を、必死に、取り立ててんだ。

だけど、以前はなかった。表なんて、明るさを交えた表面は。

きっとそれを作ってくれたのは、おめえや仲間たちなんだ。

この、温かさがなかったら、きっと俺はこうして、みんなの前で笑顔をふるまうことも、何もできないまま終わっていた。

だから、だから。

「失いたくない」

俺は、弱り切らないためにも、この手を、この手の温かさを忘れるわけにいかないんだ。

服部はそんなコナンの心情を察してなのか、コナンの手を顔は、テレビのほうを見ながらも、握り返してきた。

まるで、コナンの心を守るように。安心させるように。

？大丈夫だから？ーそう言い聞かせるように。

コナンは一瞬目を見開き、服部のほうを見たが、すぐ穏やかな、優しい目をして服部の手を見つめていた。

温かい手（後書き）

長くなりました。

何かご指摘ありましたらバンバンお願いします！

情けない（前書き）

もう毎回のことですが、サブタイトルのセンスのなさには自分で泣けます。

ま、その分、御話頑張るので、見守ってやってください。

情けない

「な、服部。今日泊まるのか」

「おお。そうさせてもらうつもりや。いつもいつも電話やからなるべくそばにおらんな」

「。。マジ過保護だよな。お前。」

「なんや嫌なんか」

「別に。。。。よく飽きねえなと思って。俺ばっかかまって疲れねえの？」

ふ、と内心で思っていたことを口にしてみる。

「は？自分何言つとんねん。あほちゃうか」

さらつと侮辱の言葉を口にする服部に腹を立てる。

「んだとてめえ」

「疲れるわけあらへんやろ。俺、工藤といんのおもろーで、楽しい思ってるで」

そう照れるような言葉を笑顔でいう服部をみて、コナンは苦笑をもらす。

「。。。優しすぎだよ。おめーは」

そう言うコナンに対して今度は服部が目をパチクリさせる。

「なんや自分。今日はえらく素直やないか。いつもツレナイ態度しとるのに」

「そうか」？

だって仕方ないだろう。今の俺にはそんな余裕ねんだからさ。

こいつがいる間、発作が来ないことを願いたいけど。

でも発作の前に、厄介なことありそうだな。

―体が異様に重すぎる。

じっとしてると余計に……。

「おい工藤？」

「何」

「どないした……？」

「ああ？どうもしない。何度も言っけどいちいち心配なんてすんじやねえよ」

うぜえから、と吐き捨てるように言ったコナンに対して、やっぱりツレナイやつちゃな、と思う服部。

「服部」

「なんや？」

「どっか行こうぜー」

「・・・」

「なんで沈黙するんだよ・・・」

「せ、せやかて自分。外出たらあのちっこい姉ちゃんが」

「確かに。怒つかもな」

頭を掻きながら、苦笑する。

「でもいいよ。行こうぜ。書置きでもしときや問題ねえだろ」

「けど」

「責任は俺が全部とるからよ。少し外に出るくらいしねえと息苦しくて仕方ねえ」

「・・・まあ少しならええか」

観念した服部は軽く息をつき、コナンの提案を承諾する。

「サンキュ」

こっそりと家を出たコナンと服部は、コンビニに来ていた。

「なんや自分。外てコンビニかいな」

「別に。目的ないけど歩いてたらあつたから入った」

「・・・むちゃくちゃな」

「悪いか・・・よ クラッ」

激しい立ちくらみをおこし、商品の棚に体をぶつけ、いくつかの商品が落ちてくる。

そのまま、コナンは膝についてしゃがみこんだ。

「くっ、工藤!？」

「わ、わりい。ちょっとつかっただけだから・・・」

店員が大丈夫ですか?、と声をかけながら商品を棚に戻していく。

「あ、すみません・・・」

いいですよ、と若い女性の店員は笑顔でコナンに返した。いい人柄なのだろう。

ありがとう、と返すコナンを服部は見ていた。

今の、つかかったんじゃないやろ、絶対。

だってその証拠に顔色えらく悪いやないか……。

「どないしてそない無茶すんのや」

そう工藤に言い放つと、工藤は、微笑んでいた。

優しい目で、それも穏やかな。

「..∩..」

そう言った瞬間だった。コナンの体はゆっくりと、コンビニの冷たい地面に、倒れていった。

近くにいた店員は悲鳴をあげる。

「きゅっ 救急車だ！」

近くにいた男性が叫ぶ。

「おい工藤っ！工藤！！しつかりせえっ！！！！工藤！！！！！！！！！！」

ピーポーピーポーピーポー……

病院に運ばれたコナンは、集中治療室に運ばれた。そこまで命に別状がなかったものの、すぐ治療が必要とくだされる状況下であつた

ために、これから1週間入院することになってしまった。

今は、病棟に入って、コナンは麻酔を効かせてあるので眠っていた。そのベッドの傍らにある椅子に座り、灰原たちに連絡を入れた服部は思いつめていた。

「俺のせいや……………」

俺がしっかりせんかったから、もっと早く工藤の容態の悪さに気づいていたら。

こんなことにはならなかったかもしれないかったのに。

情けなさすぎやろ。

こんな傍におるくせに。何もできないんか俺は。

ただあいつに余計に気遣わせとっただけやないか。

すまん、すまん……………すまん工藤……………

服部は灰原たちが来るまでの間も、来た後も、心の中でコナンに謝り続けていた。

情けない（後書き）

倒れてしまいました、コナン君。

ちよつと作者でありながらも、こういう作品をかくのはたびたびきついです。でも、読んでくださる皆さんのためにも頑張ります。

名探偵の怒り（前書き）

2日連続です。

眠いw

でも頑張って書きます。

小説に関してこうしたほうが面白いかも！というご意見ありました
らぜひぜひよろしくお願いします。

名探偵の怒り

「何やってるのよあなたはっ!!」

一つの個室の病室に響いたのは灰原の怒声だった。

「……すまへん。」

「そんな言葉で許されることじゃないでしょう!？」

勝手に、外に出て行っただから、倒れたのだと。灰原はそれで怒っているのだ。

「わかつとるっ……。俺がもうちょい早う工藤の異変に気づいたら、こんなことにならんかったこともよく分かつとる!!」

「なら、どうして外に出たりしたの。しかもこんな寒いときに!どうせ、工藤君から頼まれたからなんでしょうけど、彼、病氣なんだから、どんな願望でも、断るのが当然でしょう!」

「……っ」

「これで、工藤君の余命が、縮むようなことがあったら、あなたどう責任取るつもりなの!？」

「……っこれ、哀くんっ!!」

辛辣な言葉を発する哀を、博士は止めにかかる。

「いいんや……。ホンマのことやから」

「は、服部君」

そういつつも、平次は、拳を硬く握りしめていた。

静まった病室の中、コナンは目を開けて、すべてを聞いていた。

最初の哀の怒声で目が覚めたのだ。

すべてを聞いたコナンは、悲しかった。そして何より、怒っていた。

「……やがって」

そうばそつといったコナンの声を3人は聞き逃さなかった。

「工藤君？起きて……」「ふざけやがってっ！！！！」

『！？』

コナンは、寝ていた体を起こし、俯いていた。

「どう責任取るつもりだと？余命が縮むようなことがあったらだと？本当のことだからだと！？」

怒り叫ぶコナンに3人は、啞然としていた。

「おめえらはやっぱり、俺を病人としてしか扱ってないんじゃないかねえか！！」

ふざけんなよ！！！！と再び叫ぶ。

やっぱり聞かれてしまっていたのか、と顔をしかめながら3人は思う。

自分を哀れに思われていることで怒っているのだろう。誰もがそう思っていた。

ーだが。

「なんでおめえらが、俺のことでそんな自分のことを責めたりしてんだよ！！そんなふざけた真似してんじゃねえよ！！！！」

「-え？」

自分を哀れに思ったから、怒っているのではないのか。

コナンは、自分のせいで、他人が責めあっていることに、怒っているのか。

なぜ？

「服部に無理言って提案して承諾させたのは俺だ！服部てめえなんで自分のせいになろうとしてんだよ！そんな俺がム力ついて、怒るだけだってわかんなかったのか！！！！」

「くど・・・」

「親友とかなんとか言ってたくせに、全然俺のこと分かってねえ！！てめえっ、何のために、俺んどこ来てた！？・・・せっかくっ、

嬉しかったんだぞ！！！！本当はおめえのことうつとうしいとか思いつつも、毎日毎日電話かけてきたことも、会いに来てくれたのも、おめえ自身の好奇心じゃなくて、結局俺が死ぬような病氣抱えてっから、心配してとか・・・・そんな動機だったんだろうっ！！！！」

いきなり叫んだせいで、心臓に負担がかかり、心臓をおさえながら、息を荒らす。

それでも服部を、睨みつけていた。

「ハッ ハアッハアッ・・・俺は、ハアッハアッ おめえが俺だけのためにっ・・・毎日学校だつてあるはずなのに、そんな疲れも何もないことにして、ハアッハアッ会いに来てくれたりしてたつて・・・何も、嬉しくなんかねえんだよっ・・・ハアッハアッ。俺だつて、探偵だぞ・・・なめんなよ。」

なめんなよ、そういつたコナンの口調は、すべてを貫くようなそんな鋭さを持っていた。

「工藤君・・・・・・・・」

「新一・・・・・・・・」

最初は呆然としていたが、コナンが心臓を抑えたまま、息を整えようとしているばかりか、徐々にその息が荒くなり、座り俯いたまま、心臓を右手で抑え、左手でシーツを硬く握りしめ、大量の汗を流していることに、一同は気づく。

そして、平次がナースコールを押そうとした。

でもそれはできなかった。

コナンが、その手を、止めていたから。

「おい工藤！早う呼ばへんと！！！」

「うるせえ。ハアッハアッ・・・呼ぶんじゃねえよ」

「そんなわけいかへん！！！工藤さつきお前が怒りよったことよう分かったわ！！！けどなあっ！！決して俺は、お前のためだけにお前に会いに行ってるんじゃないでっ。」

「お前の態度はそっ・・・ハアッハアッそういうことを示しているようなもんだろっ！」

「俺のためやつ！！！俺はなあ、お前のために。なんて理由で、お前とずうといたいなんて思うような甘いやつやないで！俺のためやつ。そのことよう頭に叩きこんどけや！！！」

「・・・ハアッハアッハアッハアッ」

腕をつかんでいたコナンの手が離れた。

それと同時に服部の指はナースコールの、ボタンを押していた。

座っていたコナンの体は、ベッド上に倒れこんだ。

「工藤っ！！！！」

しばらくして、担当医や看護師などが駆け付け、緊急手当をしたのであった。

あれから何時間経っただろう。

わからない。だけど、もう外は日が暮れている。

「ねえ……」

か細い声に服部が振り向くと、哀が立っていた。

「なんや。」

「その……さつきは悪かったわね。さすがに、言い過ぎたわ。」

「いや、別にええで。事実やし。でも……」

「え？」

「工藤が、あんな怒りはとは思わへんかったわ」

「……そうね。」

「本当に、甘い奴は、あいつやで」

「あなたも、十分よ」

「あいつ、なんやえらい変わったな。ちょお前までは、引きこもっているような奴やったのに」

「でも今回は、頑張りすぎてる。」

「中間うちゅうもんを知らんのやろか」

「そうなんじゃない？でも、1番の問題は、彼が、自分自信が無茶をして、体に大きな負担をかけていることに気づかない、ってことね」

「それ……ただの無茶体質やないか」

「ええ……呆れちゃうわ。」

ため息をつきながら言う。

「だーから、守りたくなるんやけどな……」

「分かってないのよ。彼にはね」

「せやな……でもそれは仕方ないことかもしれへんなあ」

「そうね。彼、ひどく鈍感だから」

クス、と笑う哀をみて、服部もつられて笑っていた。

名探偵の怒り（後書き）

なんか、話の構成ガ・・・w

もしかしたら哀ちゃん、コナン君好きかもですねw

自分がかきながらですが、そう思えてきました。

切ない思い（前書き）

もうサブタイトルは気にしないw
レッツポジティブシンキングで！。

今日は御見舞に工藤両親がきます。
切な目になりそう。です。

切ない思い

「馬鹿だよな……俺」

あいつらに怒り散らして、そのくせに、咳止まらないなんて情けないところを見せて。

だっせえよな。

はあ……、とため息をつく。あいつら啞然としたろうな。

なんだかんだいって迷惑かけてばっかだよなあ。

逆に俺、謝んなきゃいけないよな普通。

結局、俺、自分勝手に。わがままみたいなもんだよな、今日言ったことも。

それだけじゃない。服部にも、灰原にも、くだらない心配かけてるのは俺じゃねえか。

あーあ。本当にやってんだか。

窓から見える月を隠す雲が、まるで俺の今の心情みたいで。

なんとなく、切なくなってしまった。

―朝

部屋に差し込む朝日の光がまぶしくて、目が覚めてしまった。

体を起こすと、昨日起きた発作のせいか、体が少しだるかった。

「ん……」

横に置いてある棚の上をみると、一枚のメモが置いてあった。

―いつのまに？

【工藤君へ

今日は帰るから。また明日来ると思うけど。

大阪の色黒さんも一緒にね。

ちゃんと寝とけよ。】

最後の「ちゃんと寝とけよ」は明らかに服部のかいたものだと分かった。

ふと時計を見ると、10時を回っていたことに目を見張った。

「へ！？もうこんな時間…… - ガラガラッ!!

「新ちゃぁん!!」

「げっ！母さん！？」

「元気が新一。」

「父さんも・・・口スにいたんじゃねえの！？」

「いたけど帰ってきたのよお！新ちゃんが倒れたなんて聞いたからさっ。で・も」

「コナンの頬を両手でぶにと引っ張る。」

「いッ！！」

「この華麗な母親に対して『げっ』なんていう口があるなら大丈夫かしらね？？」

笑っているが笑っていない。

要はかなり怖いのだ。

「いたいいたい まじ痛ひっ」

「なあに？聞こえないわよ新ちゃんっ？ごめんさいワ！？」

「ほへんなはい（ごめんなさい）」

「よろしい 三」

パチン、と音をたて、有希子の手はコナンの頬から離れた。

軽く涙ぐんで頬をさする。

「おいおい有希子、せっかく息子との再会なんだから」

「あーらしいじゃない？ しつけないおさなきゃ。ね？ 新ちゃんもそう思うでしょ？」

「遠慮シトキマス」

「なんでよー」

懐かしい親子の言い合いに優作を頬をゆるめる。

「新一」

「なんだよ」

「最近何してるんだ？」

「何って……別に何も。退屈してるよ」

「退屈だなんて、老けたわねえ」

「うつせえよ」

ぶずつと拗ねたように、そっぱを向く

「なら新一。そろそろ俺の最新作ができるんだ。読むか？」

「-えっ、まじで？超読みてえ」

「なら送ってやろう。だが向こうでの出版で、こっちのはまだ先だ。だから英語版しかないが。」

「いいよそれでも。俺英語はもう慣れてるし。2人の息子だぜ？」

「ふ。そうか。じゃあ送ってやるから。楽しみにしとけよ」

「ああ。期待しとくよ」

そういつて笑みをこぼした。

その後も、話を続け、トイレに行きたくなったので、一人部屋を出た。

「たまには、母さんや父さんと話すのも悪くねえな」

そう言いながら、病室へ戻ろうと扉に手をかけた時だった。

部屋からすすり泣く声が聞こえた。

一瞬部屋を間違えた？と思ったが、これは明らかにさっきまで明るく話していた母の声。

「ぐすつ……どうして？今あんなに元気なのよ？」

「有希子……」

「それなのにつ……あと1年も生きられないなんてっ……」

タチ悪い冗談なんじゃないのッ？」

まただ。

また、俺の病気のせいで、陰で背負う込む人が、できてしまった。

そしてまた聞いてしまった。

俺の前で、俺の余命を。

でもそんなことより、両親に自分たちの生んだ命を、俺自身が心臓病という悪魔によって、終わらしてしまうことに。

すごく胸苦しい気持ちであふれた。

ゆっくり、扉をあける。

2人は目を見開いていた。

「新ちゃん……………」

「…ごめん。」

『え？』

「俺のせいで…………母さんたちに辛い思い…………させてんだろ？だから…………ごめ「新ちゃん！！！」」

有希子はコナンを抱きしめた。

「謝っちゃダメ！つそれに新ちゃんが謝ることないわっ」

「そうだ。お前は悪くないだろう？」

お前は悪くないだろう？ - たった一言の父親の言葉が、どれだけ真摯なものだったか。

なんだか、本当に信用できるような。そんな圧倒感のある言葉。

――ああ、父さんだ。

本当にそう思えるそんな力強さがあった。そして、ひどく安堵感を覚えることができた。

「うん・・・・・・」

ありがとう。

母さん、父さん。

いずれまた、感謝することになるだろうけど。

だけど、俺はこの世を旅立つその日まで。

俺の両親に。俺は一生、感謝の心を持ち続けるよ。

残された命の期間はどうしようもないけれど。

でもその日まで、どうするかは、この命の保持者。「俺」の自由だ。

だったら、この命に支配される側ではなく。この命を支配する側になつてやるうじゃねえか。

だから、

「心配すんなよ。父さん、母さん」

切ない思い（後書き）

新一の両親は人柄いいイメージなんで、こんな感じかな？と。
感想など待っています。

見えない涙（前書き）

もーうちにいるとストレスがとにかく絶えないw
でもまあだから1人の時が一番落ち着きますね。

見えない涙

「ガラガラ

「よおー工藤」

シーン……

「無視かい！」

平次は尽かさず突っ込む。

「いや。わざわざ返すのもどうかと思って」

「なんやとお？」

「うるさいわよ」

呆れながら、灰原が反抗する服部を制する。

「今日、母さんたち来てさ」

「え？そうなんか」

「ああ。」

「そつみたいね。新しい花があるわ」

「うん。なあ。灰原？」

「何よ。」

ゆっくりベッドから上半身を起こす。

「あいつら、元気か？」

「3人のこと？」

「そう」

「元気よ。あなたが学校を休んでることに文句言ってたけど」

「文句う？」

「ええ。早く帰ってこいって」

「！そつか・・・」

ふ、と微笑をこぼす。

「私も同意。早く、学校行けるようになんなさいよ。いちいち病院来るの面倒なんだから」

「んだよその言い方！・・・でも、俺も早くあいつらんとこ元気でいけるようにしねえとな」

「そうよ。・・・みんな待ってるんだからね」

「ーうん。サンキューな」

優しい笑みを哀に見せる。

「／／／。礼を言われることしてないわ。トイレ行ってくるから」

サツと扉側へ体を向け、すたすた出ていく。

「？おっ」

「あんの姉ちゃん、素直やないけど分かりやすいな」

「え？何が」

「何がて自分。ほんま分かってへんのかいな」

「はあ？だから何がだよ」

「おんまえ、探偵として１級品の思考持ちっちょるのに、自分の恋沙汰思考は最低級やないか」

「ああ？？」

ギョっところらを思い切り睨んでくる。

さすがの平次もたじろぐほどだ。

「怖いて、工藤・・・」

「遅くねえか灰原」

「あんの姉ちゃん、トイレやないと思うぞ」

「はあ？じゃあどこだつてんだよ」

「知るかいそんなん」

だつてきつとな工藤

「なんだよそれ」

あの姉ちゃん、きつと。

きつと、お前があんな笑み見せたりするから、こらえられなくなつて、

泣いてんで。

なあ工藤。

分かつとるか？

普段いくらそっけなくても、どうでもいいような態度とつとつても、

お前の見えないところで、お前の迫るくる死に

涙を流したり、苦しんだりするやつは、

ぎょーさんおるんやで。

なあ、服部。知ってつか？

俺だって、みんなが俺のせいで陰で悲しんだりしてることを、分かってる。

だけど、誰も俺の前でそれを見せようとしない。

俺には見えることのない、涙を。

だから俺だって言えねえんだ。

自分の中に感じる

嫌な

違和感を。

見えない涙（後書き）

さあ、なかなか進みませんが。

思ってるよりも。

でもまあ、じっくりやりますよ。

だけど、徐々にコナン君、弱っていきます。

精神的には、強く。しかし、体は……的な。

では。

嫌な違和感（前書き）

今回は灰原sideが後半で多いです。

どうぞ。ご覧になってください。

嫌な違和感

―違和感。

ここ最近、感じてきた嫌な感覚。

何か体がむしばんでるような、そんな感覚。

それはやはり、何かを告げているのだろうか。

あれからまた少し時がたち、とりあえずは退院となった。

そして今、学校にいるわけだ。

小学1年生の算数なんざ聞く意味もないので、
頬杖をついて窓の外をどことなく眺めている。

「工藤くんどうかしたの？」

隣の席の灰原が、俺の呆けた様子を心配？してか、声をかけてくる。

「え？ああ。別に暇なだけだよ」

「そう。まあそれは仕方ないわよ」

「だな。・・・っ」

体に気持ち悪いような違和感を感じて、再び平静を装い、窓のほうに顔を向ける。

心臓病。心臓病は、10秒間ほど止まると、目の前が真っ暗になると気を失う。

そして、3分から5分止まると、脳が止まる。そして、死に至る。

死ぬ、って改めて考えるとどんな感じなんだろうな。

最近、いつになっても、元気だっと思えるときがない。

体が常に、病気にむしばまれているような。そんな感覚に、襲われる。

ーチッ

舌打ちを軽くする。

この病気の怖いところ、といえば、余命はどれだけ下されようと、敵わない牙をむかれたら、歯が立た

ない。一瞬で、終わってしまうこと。

思いつくだけこの恐怖をあげていえば、キリがない。

でも、いや、だから。だから、そんなこと絶対しない。

病気に負けることを受け入れたら、きっとそのときの俺は、もう本当の終わりを告げることになるから。

その時が来るまで俺は、苦しくても戦おう。

戦う決意は、重なっては消え、重なっては消え、を繰り返すだろう。

でもそれなら、何度でもすればいい。

消えたって、衰えたって、何度も何度も重ねることを忘れなければ、きっと大丈夫のはずだから。

一方灰原は、いつまでたっても、窓の外を見続けるコナンを心配げに見ながら、ノートの上でシャーペ

ンを滑らせていた。

退院してから、最近ずっとこうだからだ。話しかけても気がつかないことが多いし、何にせよ、特別何

かをする以外は、ずっと頼杖についてぼーっとするなりなんなりしているのだ。

何か考え込んでいるのか。そんな素振りだけれど、なかなか本人に聞いても答えは出ない。

なぜなら、なかなか思ってることを言わず、はぐらかしたりしてい

るからだ。

本人が隠している限り、こちらからは様子からでしか状況が分からないというのに。

本当に彼の無茶体質なところは、どうねじっても、変わらないのだからうか？

そう思うと、ため息が出る。

「こらっ江戸川君！聞してるの？」

さすがに先生が、コナンがいつまでも窓の外を見ているのに気づいて注意をする。

なのに、ほら。やっぱり気づいてない。

「え・ど・が・わ・くん！？」

ズンズンと、コナンの机の前まで迫る。

それでも、何かを考えているのか。全くというほど、気付かない。

「ちょっと江戸川君！！」

先ほどより一回りほど大きな声で注意する。

「へっわっえ！？」

ようやく気がついたようだ。

「え！？じゃありません！何度呼んだと思ってるんです！？」

「そんなに・・・？」

苦笑いをしながら、冷や汗を流す。

「コナン君、最近ずっとそうでしょう？どこか具合でも悪いの？」

「え。コナン君、まだ体調よくないの？」

歩美が心配した声で割り込んでくる。

「いや、大丈夫。ごめんなさい。先生。」

「なら、いいけど・・・どこか悪かったら我慢しちゃだめよ？」

「はい」

偽りの笑みだ。

最近さすがに何度も見ているから、見慣れてしまった。

彼は、平静を装うために、偽りの表情を病気になってから良くするようになった。

それも、心配の理由の1つだけねど。

でももっとも心配なのは。

ーキンコーンカーンコーン　・・・

「じゃっみんな給食だから、急いでしたくしてねえ！」

「よっつしゃー！やっとな給食だぜ！」

「元太君学校で給食が1番の楽しみだよね！」

「おうよー！」

コナンは、ゆっくり立ち上がりながら軽く心臓を抑えている。

それに驚き、つい声をかけてしまう。

「ちょ、工藤くん」

コナンは下を向きながら、脂汗を額にうかし、歯を食いしばりながら、苦しそくに顔をゆがめている。

しかし、笑っていた。

まるで、？負けるかよ　そう言っているような、そんな笑みで。

これだからあなたは・・・。

ーそう。もっとも心配していること。それは。

本当の本当の限界に達するまで、決して、周りの人間に、辛さを訴えないこと。

こんな莫大なものを、1人で抱え込む意思を変えようとしないうことなのよ。

いつも（前書き）

感想たくさんいただいて、本当に嬉しかったです。

そんな方々の期待にこたえるためにも、日々精進を目指して頑張っています。

いつも

あんな苦しそうな顔をした今日の放課後。

少年探偵団と別れた2人は同じ帰路を歩いていた。

今、コナンはポケットに手を突っこんだまま、無言で歩いている。

今日したあの表情に対して哀はまだコナンに触れていない。

きつと彼は、私が気付いたことには気づいていないだろう。

でも……。このずっと考え耽っているのは言いにくいが、やめてほしい。

「ねえちょっと」

「！なんだ？」

「あたいたい加減一人で考え耽っているのはやめてくれる？」

「え？」

「ここのとこずっとそうじゃないの。」

「あ……わりい」

「一人でそんなことするくらいなら、私とか、誰でもいいけど話し

なさいよ」

「！…サンキュ。」

「じゃあ聞かせてもらっけど…あなた何考えてるの？」

「何って…別に大したことじゃねえけど」

「ふうん？大したことじゃないわりには、先生の呼びかけにも、全然気づかないようだけど」

ジト目で睨む。

「そ、それは……。ハア…。なんだかいろいろ考えんダよ。」

「いろいろ…？」

「ああ。まあそれはいいけど。ちょっと…今週あたり、行つとこかなあ…」

行つとく？

「行かつてどこに…？」

「蘭の、墓…。」

「…えっ？」

「そりゃ・・・まだ受け入れるの、って、ちょっと怖えけど。さ。」
歩みを止める。そしてコナンは空を仰ぐ。

「でも、俺。なんだかんだでもう3カ月以上も、放つちまってたから。でも、蘭の墓に行くことできたらさ。きっと・・・ちゃんと、前向きことできると思って。受け入れてる？つもり？、てゆうのは。なくしたいからさ。それに・・・」

それに、体ができるだけ自由に、奔放に動けるうちに。

あいつのところには、行ってやりたいんだ。

「そつ...。あなた、やっぱり器大きいわよ」

「えッ？」

「別に。でもあなた、その御墓の場所、知っているの？」

「いや。知らないから、おっちゃんに聞くよ」

「そつ。なら分かったら私にも教えてくれる？」

「え」

「私も行きたいのよ。蘭さんには...言い尽くせないほど、感謝していることもあるしね」

軽く赤面になる。

「そ、つか」

コナンは優しく微笑んだ。

一日曜日。

俺と灰原はおっちゃんから御墓の場所を聞いて、朝方から出かけていた。

久しぶりにあったおっちゃんは、意外にもやつれていなかった。

蘭が亡くなってからは、蘭の生きていたころの希望に添えるように、妃瑛理と同棲を再開したようだ。

仲良く暮らしているようだった。

そんな様子を見て、俺は心底安心した。

行く途中で、花束を買って着いてから、その花束をそつと添えた。

「久しぶり、蘭。しばらくこれなくて、ごめんな」

御墓の墓石をそつとなでる。

「俺、お前が死んじやってから、何度も俺のせいだっと思ったよ。でも、今はいろんな奴のおかげでさ、自分ばっか責めることやめたんだ。でも、やっぱ思う。ごめんな……」

「工藤君……」

「だけど、お前のこといつも思うよ。大切なやつだつて。それはずつと変わらないからさ。おっちゃんたちも、今は仲良くやってるぜ。びつくりするくらいに。だから、安心してゆつくり休めよ。俺も、おめえの頑張っから、見守っててくれよ」

そしてジャケットの懷から、一枚の手紙を出し、線香が煙を上げる横に置いた。

「……手紙？」

「ああ。お前もせっかく来たんだから、言いたいこと言ってけば？」

「ええ。そうするわ」

哀が1歩前に出る。

「あなたは、私にとっておねえちゃんみたいだった。だから、あなたが死んじやってから、なんだかすごく辛かった……。工藤君と同じようにね。私、あなたと工藤君を見ると、本当に御似合いだと思つたわ。あなたに対して、なかなかうじうじと気持ちを伝えなかつた工藤君がたまにムカついたけど。」

「……おい」

「でも…うらやましかった。すごくあなたたちが眩しくて。でも。そのおかげで私は本当の暗闇には入らずに済んだかもしれない。だから、感謝しないとね。」

ふ、と哀が珍しい優しげな笑みをこぼす。

「またね。」

そんな灰原を見てコナンは、顔を綻ばせた。

「じゃあな、蘭。また来っから」

そうして、2人は墓を去って行った。

いつも（後書き）

長くなりました。

今回は、コナンが蘭に向けた手紙について語るかと思われます。

手紙〱拝啓 蘭〱（前書き）

さあ2日連続ですw

勉強もせずにパソコンに打ち込む自分にたびたび呆れますが、テストが近くなってくると、本当になかなか投稿できなくなちゃうし。受験までもう刻々迫ってますから。書けるうちに！ってことで。頑張ります。

手紙／＼拝啓 蘭

「工藤君、あの手紙、何書いたの？」

冷たい風が吹き抜ける中、灰原はコナンに問いかける。

「んー…秘密、だな。」

「愛しのラブレターかと思ったのに」

「…あのなあ／＼そんなんじゃないっつもの。」

てゆうより、それだけじゃない。

俺があの手紙につづったのは。

『拝啓 蘭

3か月も、ずっと来てやれなくてごめんな。本当は、もっと早くに来てやりたかった。でも、お前が死んじまったこと、なかなか受け入れなくて。

お前は、俺にとって、なんか傍にいて当たり前って存在だったから。失うことなんて、信じられなかった。

お前が、最後に残してくれた言葉が、どれだけ、嬉しかったか。俺も、早く元の体に戻って、お前に気持ち伝えたかったけど、結局できなかった。

ごめんな。俺、お前に対して謝るくらいしか、今じゃできない。最

初、全て俺のせいだっと思って。

俺がすっかりお前を守ってやれば、こんなことにならなかったのに。それなのに逆に守られて。

何やってんだ俺は、ってずっと思ってた。けど、そんな俺に、服部や灰原とか、いろんな奴に？光？を

もらったんだ。だから、少し、思考変えることができた。

ごめんの他にも、お前に言わなきゃいけないことがあるだろうって。だから、この手紙上で伝えさせてもらうな。

ありがとう。蘭。お前がいてくれて、本当に良かった。

蘭に次に会えるのは、いつだろう。そう考えること、できなかった。

そればかり考えんのかなって思ってたけど、そうはならなかった。

俺、情けねえことに心臓病になっちまったんだ。余命1年って言われてから、もう3カ月たった。

こういう立場になると、時間で本当にすぎるの早いんだな。

そりゃ、最初はいろんなもんが重なって、辛いつて感じないわけじゃないかった。

これ聞いたら、御人良しのお前は、心配すっかな。

それが、今はすげえ心配だけど…心配すんなよ。

俺は、大丈夫だから。今の俺は、前より強くなった。

蘭が死んじまって、無気力で、何もかもあきらめたようになった俺はもう、いないから。

大丈夫。お前にまた会える。そう思ったら、案外辛くもなくなった。生きていたころ、お化けが苦手だった蘭、いろんな奴に優しくかった蘭、帰りが遅かったり、俺が危ないことをすると怒った蘭。

全部が全部、俺の宝物だった。

そんな蘭のためにも、俺、決めたよ。

お前のために今の俺にできること、1つしかない。

俺、生きるから。

お前の分まで頑張って、毎日必死に前向いて、歩いてくから。

だから、見守っててくれるか。

お前がそうしてくれたらきっと、俺はもう暗闇に堕ちたりしねえから。

だから、安心して。

いつか、その時が来るまで。俺、負けないからさ。

いつも、待たせてばかりでごめんな。

でも、それでも、お前が良かったら、また、待っていてくれよな。

―愛してる。

新二
『

手紙〱拝啓 蘭〱（後書き）

ああ、本当に手紙で終わってしまった。

おほほほw（壊れた）。

無茶（前書き）

さて、内容が、…進みません！

でもコナンを、簡単に死なしたくないんです…。

無茶

手紙。蘭読んだかな。

手紙を置いてきてから、もう1週間くらいたった。

なんだか本当に時間が過ぎるのが早すぎる気がする。

気のせいだろうけど、でも、それでも。少し、辛い。

だけど頑張らなきゃいけない。だって、蘭に約束したから。

R R R R R R R R R R R R

携帯の着信が鳴っていることに、気付く。

「はい」

「くつどー」

「何だお前は」

もう少しまともな会話の始め方できないもんかね。

「聞いてな工藤っ！！！！」

「だからなんだよ」

「ほんまもう分からへんのやああー！！」

「はア???」

もう何なんだこいつは。

「聞いてくれやー…」

「?なんだよ。そんな聞いてほしいなら早く言いやがれ」

「それがなあー?」

だらだらとした口調で話した服部の話はこうだった。

今日、俺のところに和葉が2人で行くように服部に約束を取り付けていた。

だが、服部はそれをすっかり忘れていたらしく、それあげく

「なんや、お前行くんかいな」

とあっけらかんとした顔をして言い放ったために、和葉に激怒されたいらしい。

「な?和葉、おかしいやろ!?!」

「いや、それは、お前が確実に悪いと思っぜ」

「なっなんでや!?!」

「普通に考えてそうだろ。和葉ちゃんからしてみれば、約束を忘れられた揚句、お前に毒舌言葉を聞かされて。すげえかわいそうじゃねえか。それで、謝ったのか？」

「謝つとらん…」

「じゃあすぐ行つて来い。」

「は？」

「だーカあら！今すぐ和葉ちゃんに謝ってこいっての。俺説明したんだから自分悪いの分かんだろ」

「う…まあ、それは……」

「なら早く行け。だいたいお前、前抱きしめたって言ってただろうが。んなことして和葉ちゃんに期待させないほうがおかしい。」

「そつそれを言うなや！！！！」

「だったら早く行けって言つてんだろ！この馬鹿！」

ブツッ…

プープープー…

「なつ工藤のやつ切りよつた！！！！」

「何叫んでんの一人で」

「え？」

振り向くとそこには

「かつ和葉！何やってんねん！！！」

「何やってんねんじゃあらへんやろこのドアホ！東京行きの飛行機出てまうよ！！」

「えっそらあかん・・・ってドアホてなんやねん！！！」

「ドアホはドアホやろ！！！！約束も忘れてまうんやから！」

「つつ！！！」

？今すぐ謝ってこいつての？

いつもならまた言い返して喧嘩をするところだが、コナンの言葉が頭をよぎったので罵声を呑み込んだ。

「すつ、すまん…」

「え！？」

和葉も平次が素直に謝るのがありえないと踏んでいたからか、かなり驚いた。

「約束忘れてまって…」

「べっ…別にええけど…どうしたん、いきなり謝りよって…珍しいやん」

「うっうっさいわ!!…／＼／＼はよ行くで!!…!」

顔を真っ赤にして和葉も手を引き、歩きだした。

そのときの、2人の顔はとてつもなく真っ赤だった。

「あいつら、ただ不器用なんだな…。」

携帯を閉じたコナンはぼそつと言言い放った。

「昔は夫婦漫才にしか見えなかったんだけどなあ」

「それはお互い気持ちに気づいてないころだったからでしょ」

その声に振り向くと

「うゝわっ!!!灰原!!!いつの間にいたのかよっ」

「…失礼な言い方ね。お茶頭からかけるわよ」

手にコップを持ってコナンの頭の上に掲げる。

「ばっ、やめろ!熱いだろそれっ!」

「そうだけどな・にか?」

ひそやかに笑っている。が、それはコナンにとって悪魔の笑みに見えた。

はつきり言って怖すぎる。

って、こう思うの何度めだ???

「なんてね、冗談よ。はいお茶」

「……………」

黙って受け取ることしかできなかった。

東の名探偵工藤新一ともあろうものが、この灰原哀にはかなわない。

やっぱり敵わなもんには一生敵わないのか…?

自分で自分に苦笑していると、テレビの番組が俺を釘付けにした。

『最近、心臓病の人など、増加しているようですね。』

『そうなんです。でも最近の医学は進歩していて、大体手術をすれば治癒できることが多いですからね』

『そうですね。今後も、どんどん医学は進歩していきますからね。』

『しかし…世の中、まだまだ医学の届かない領域にあってしまう人たち、など数は少なくともいますからね』

『その人たちにとっても、明るい光の見える医学を創り出してほしいものですよね』

『ええ。残酷な未来なんてものは、なくしたいですね』

「……」

「工藤…君……」

コナンは無意識にチャンネルを変えていた。

そして、一瞬灰原のほうを見て

「何だその顔」

ふは、と吹き出す。

でもそれは、今まで見た中でも、明らかに偽りだって、無理してるって分かる笑みだった。

「ばあか。お前まで気負うなよ。な？」

「…どう、して？」

「え？」

「なんであなたは、そこまで強がるの…？」

「…違うよ灰原」

「え…？」

「違う。強がってねえさ。ただ、怖いって認めたら負けだろうって
思っただ」

「…！」

「それだけだ」

「工藤君…」

本当にあなたって人は…

やっぱり私には無茶するあなたを止める力はないのかしら。

ねえ…工藤君。

あなたを無茶させないためには、そうすることができるのは。

蘭さんしかいないのかもしれないわね。

でも工藤君、無茶するあなたを見ると、涙が、出てくるのよ。

それを、止めるのはどれだけ大変なことか。

…分かる？

無茶（後書き）

ああーまた長ったるく。

ごめんなさい、まとめるの下手で…。

迷惑

俺、いつまで耐えられるのかな。

コチコチと、時計の針の音が良く響く。

今日、あの灰原との空気がきまずくなった心臓病の番組。

あいつ、ふと見たら、目に涙がたまってた。

俺のせいなのは、分かってる。

昼に灰原に向けて行った「強がりじゃない」って言葉は嘘じゃない。

みんな、無茶すんなどが、たびたび言ってくれる。でも。

無茶しないってどういうことなのか分からない。

だって、普通に暮らしていたら、毎日欠かさず来る発作に耐えなければならぬ。

それを一人で耐えることをやめてしまったら、みんなにすごく迷惑をかける。

そう分かっているから、いろいろ我慢したりしているだけだ。

それが、普通なんじゃないのか？

無茶するってどうしてるっていうんだろっか？

ー分からない。

いくら考えても、出てくる答えは同じもの。

助けてくれる人は、確かにたくさんいる。

服部、灰原、博士、父さん、母さん…

俺の周りに支えてくれる人はたくさんいる。

でも、それをあからさまに頼り、迷惑をかけっぱなしにするなんて、絶対できない。

だってそんなの図々しいにも程がある。そう思うじゃないか。

？どう…して、あなたは…？

言われた言葉が頭をよぎる。

灰原は、俺の行動に対して、本当はどのような感情を持っているのか。

灰原だけじゃない。博士も、服部も…みんなだ。

表向き、普通に話してくれたり自然にしてくれてるけれど、本当は胸の内に俺に対して抱いている思いを隠してるんじゃないのか。

いや、隠してるだろう、だけど。きっと、それを誰も教えてくれることはないかもしれない。

「なんでかな」

自分で答えを出すも、やはり疑問を抱いていしまふ。

やっぱり、分からない。

分からねえよ。

時計の指す時針は12時を回っている。

あのあと、結局服部たちは来て、和葉も服部も、阿笠邸に来て、相変わらずのにぎやかさを見せつけ、再び帰って行った。

今日は金曜日だが、明日部活あるから、とのことだった。

「ほんまはいたいんやけど、平次大会近いんや。ごめんな工藤君、堪忍や」

服部の代理に和葉が謝ってきた。もうすでに服部から俺の正体を聞いている和葉は俺のことを工藤君と呼ぶ。

「いいよ、気にしなくて。てゆうか、そんな大変なら来なくても大丈夫なのに」

「いいんよ、あたしも気になっとったし。平次がうちとの約束忘れへんかったら、なんか持つてきてこれたんやけど、時間なくてな？」

何も持ち土産ないねん。」

「全然いいって。俺別にただ家でごろしてるだけだし、そんなもらっても逆に申し訳ねえよ」

「そお？ならいいんやけど。今度来るときは、大阪からなんか持ってくるでな。楽しみにしててや」

「え。ああ、ありがとう」

「どういたしまして！全く、平次も工藤君くらい素直で優しくたらええのに」

「なんやと和葉あ？」

ジト目でにらみながら軽く頬をふくらましている。

「ぶはっ…何服部。おめえまさか、嫉妬してたのか」

「なっ、そんなわけないやろ／／！！！！」

「ぜってーしてる！だって顔真っ赤じゃねえか！www」

「赤ないわーっつ」

「はいはい。良かったな和葉ちゃん、服部嫉妬してくれてるぜ」

「／／／／／」

「工藤、からかうのもええ加減にせえよお」

「はいはい。次来的时候は、なんか持ってこいよな、いつも手ぶらじゃん」

「なつ。和葉にはあんな遠慮してたやないか！」

「和葉ちゃんは申し訳ねえもん。おめえは別に申し訳なくねえし」

「なんちゅーやつちゃ！」

「こついう奴ですー」

そんな2人の言い合いを見て、その場にいた一同は頬を緩めていた。

「なんか…服部とは、いつもふざけてばっかいるよなあ」

それでも結構楽しいけれど。

あんな言い合いできるやつ、服部の他にいない。

良いダチ持ったんだな、俺も。

ずっと、騒ぎてえなあ…。

そんな望みを持ちながら、俺は暗い窓の外を見ていた。

眠れねえし。

ちよつと外出てみつかないかな。でも、寒いかな。

ま、上着羽織ってきや問題ねえだろ。

灰原や博士が起きないように慎重に玄関を開け、外へ出た。

冬の風は、やっぱり上着を着てても寒い。

だけど、俺は家の中には戻らなかった。

なんとなく、懐かしい道を歩いてみたかったから。

まずは家から帝丹高校に向けての、通学路。

蘭によく付き合って歩いた商店街。

中学生の時、蘭と喧嘩をしたが、アメイジング・グレイスを聞いて仲直りした川沿いの道。

毛利探偵事務所までの帰路。

実際の風景は、真つ暗でよく見えなかったけど、でも歩くたびにその頃その頃の光景が目に見えた。

その度にすごい懐かしさで包まれて、その思い出は、とても暖かくて。

気づくと、足を止めて、涙をこぼしていた。

誰も通らない静かな道で、コナンは一人佇んで。

声はあげず。

ただ静かに、透明な雫を純粹な目から、流していた。

もう戻らない道を目の当たりにして。

その思い出の大きさを感じて。

幸せだった時間が、どれだけ、どれだけ自分にとって、大切なものだったのかを、思い知って。

きっと、この道を歩くことはもう2度とない。

だから、コナンは、いや、新一は。

今日というこの日を胸に刻みつけ、一生忘れないことを誓い。

後悔なんて、しないことを。

しないために、するべきことを。

今新たに、知ったのだった。

迷惑（後書き）

さて、なんか涙章です。

やっぱり、作者としてやれることはやりたいんです。

うん。

今後も、応援よろしくお願いします。

思い知ったのち奇襲（前書き）

先に言わせていただきます。サブタイトルの「奇襲」ってゆうのは病気のことです。

意味分かんない、って思われる方おられたかもしれないので、一応言わせていただきました。

思い知ったのち奇襲

ピピピピピピ...

「んー...」

目をこすりながら、体を起こす。

結局昨日は、あれから戻ってきてても、なんとか誰にも気づかれずに家に戻ってこれた。

あの後、もし灰原にばれてでもしたら、多分みっちり説教されていただろう。

まあそうならなかったから、良かったけれど。

…に、しても。

目が重い。

なんだかんだでずいぶん泣いたからな、俺。

腫れてっかなあ…。

ちょっと気になって、洗面所に足を運び鏡を見ると。

「うゝわ。…これ、どう言い訳すっかな」

めちゃくちゃ腫れてる。

てか、予想以上。…最悪だ

リビングに濡れタオルで目を抑えながら行くとすでに灰原が起きていた。

「あら、工藤君おはよ…って、目、どうかしたの？」

「え？や、えつと…目こすりすぎたら、腫れちまったんだよ」

「腫れるほどこするもんじゃないでしょ。目なんて」

「うつせー。そうなっちまったんもんはなっちまったんだよ」

「ふうん。…それはいいけど、朝食の支度するからそこどいてくれる？」

「え？」

「あなたの後ろにキッチンあるでしょ」

「ああ、悪い」

目えこすった？だから腫れた？

嘘ばかり。

泣いたんじゃないの？

たったそれだけの言葉。言えればいいのに。

なんとなく、返ってくる言葉が怖くて。

私は、体はこんなにも健康だというのに。心は、それに反比例して、ずっと弱い。

あれ？そういえば彼。もう洋服だったわね。

いつも着替えるの、そんなに早くないのに。

まさか、夜中にどこかへ行っていた？

そうだとしたら。彼の体は、まず今日は、不調という座に据わっているはずだ。

だって。彼の体の耐性力はもう。低下をとどまることを知らないだろうから。

今日は…、彼の体調に気を配ったほうがいいかもしれないわね。

また、前のように倒れたり、なんてことないことを願いたいけれど…。

キンコーンカーンコーン　カーンコーンキンコーン

なんて、気遣ってるうちに1日が終わってしまった。

彼にも特に異常はなかったし、良かったけれど。

そう思っていたけれど。

なんだか、今日は灰原にずっと視られていた気がする。

俺は、昨日改めて誓った思いを守り続けていた。

心臓が悲鳴を上げているのには、気付かないふりをして。

？弱い俺は、強がる俺で、偽り続ける？

もう、今の俺は、迷惑をかけたくない、周りの人に無駄な心配をかけさせないことしか考えられなくなってきていた…。

もう確実に、病気が、無理をし続ける身体の中でどんどん、侵食していることなんて、分かっていたはずなのに。

…だからか？

だから、病気の牙は、貯めた爆弾を、急に。しかし、まるで俺の体を苦しめ遊ぶかのように少しずつむしばんでいく。

だから…だから…突然負けるのか。

いや、負けない。認めるもんか。

でも…我慢を重ねれば重ねるほど抱え込む爆弾は大きくなっていく。

「ゲホッ…」

やばい。

これは、やばい。

「ゴホゴホッ…。ゲホッ…。」

こいつらから離れないと。

じゃないと…また。

「あ…灰原。わりい。俺小林先生に呼ばれてんだよ、元太たちと先帰っててくれねえ？」

「え、呼ばれてるの？…分かったわ。」

「サンキュ。あいつらにも言っというて！」

「ええ」

そういうと、灰原は元太たちに俺が言ったことを伝え、「ほらいくわよ」と言っ、教室を出て行った。

俺もそのあと教室を出ていて、しかし逆方向に足を運んだ。そして、誰もいない場所に腰をおろす。

「…つくつそ…！」

心臓の激しい動悸がとまらない。

ちくしょう…っ。

額やこめかみからとめどめなく、汗が流れる。

「はい」

ぼやけてきた視界に入った人物。
ハンカチを差し出してくる。

「灰、原……………？」

「馬鹿じゃないの！？苦しかったんなら、初めからそう言いなさいよ…！」

「っ…なん、で、おめ…帰ったんじゃ」

「なんではこっちのセリフよ！何が小林先生に呼び出されてる、よ。嘘ばかり！無茶する嘘なんてついてんじゃないわよっ…！」

「…わりい…………でも、ごめん…灰原、お…れ…、もう周りのやつらに…」

「迷惑や心配をかけたくない、とでもいう気!？」

「え…っ」

「馬鹿なこと考えてるんじゃないわよ! あんたうぬぼれてるんじゃないの!？あなたが思ってるほど、周りの人は迷惑なんて思っていないわよ!…!」

「…灰、原…」

「そんな周りの心配の前に自分の体の心配とかつ、自分の体にかかる迷惑考えなさいよ! ほんつと馬鹿じゃないの!？あなた探偵でしょっ!？もつと考えなさいよ…っ」

荒い息を鎮めながら、手で心臓を抑え、掠れる視界の中で、灰原を見据える。

毒舌な言葉の言いようだけど、でも。少し。

この言葉のおかげで、救われた。

「あ…りがとう、灰原。少し、楽になった」

立ち上がり発作のせいで熱を帯びた手で、前に立っている灰原の頭をポンと叩いた。

「…でも、あんま俺のことで気負うな。お前がそういう風に、か…考えることねえから…」

「っ!…!…」

そんな、弱い体で、どうしてそんなに優しいのよ。

もつと考えなさいよ、か。

これ以上どう考えればいいのか、わかんねえよ。

こんな時、服部だったら、なんて言うかな。

思い知ったのち奇襲（後書き）

眠いっつ。

今日眠くてお昼寝してたら、塾遅れました（苦笑）。

てゆうか、JUJUの歌っていい歌多いですね。

なんかこの話に音楽つけるならそれだなあ、って思いました。

望んでること考えるべきこと（前書き）

さて、昨日は投稿できませんでした。

本日は投稿です、多分明日は、無理です。ごめんなさい。

テストが近くなってしまったので、勉強日和になりそうです

望んでること考えるべきこと

・こんなとき服部だったらなんていうかな。

「なあ、おめーだったらもっと考えろって言われたらどう考える？」

「もっと考えろってどういう風にや？」

今は電話中だ。

「え…だから、今の自分から直すために、もっと考えろって言われたら…」

「……。なんや工藤、それ、あの小っこい姉ちゃんにでも言われたんか」

「えっ」

「図星かつ、図星やな！ふーん…せやなあ、お前まず迷惑とか考えねえほうがええで」

「…っ、それ、あいつにも言われた」

「そーらそうやろ！誰だっと思うで。今のお前見てたらな」

「なんで…？」

「なんでで…うーん…お前、あああ、分かたわ。ええか？よく聞いとけよ！工藤！一回しか言わんからな！」

「お、おお」

「…おまえっ、自覚なさすぎなんや！自分が無茶をしすぎてること
に！！だから、最終的にあのちっこい姉ちゃんにも怒られんやで！
！それに、お前が無理しすぎるせいでのちに起こる大惨事になった
時のほうがっ、俺らみな心配の大きさが大きくなるんやで！！！！だ
っだから、お前が迷惑かける思てることをそう思わんで苦しい時は
苦しい、辛い時は辛い、そう俺にでもあのちっこい姉ちゃんにでも
っ阿笠のじいさんにでもっ、言えばいいんや！！だって、だってや、
工藤…」

「う…ん」

「お前の周りには、お前を支えよう思てる人間がごつついるんやか
ら」

「っ！！！！！！」

「だから、下手な演技してまで…偽るなんてことすんなや…そんな
ことのほうが、誰も望んでないんやで」

ああ…

俺には…

「そっか……。そっかぁ……………っ」

「お、おう」

問いかければ、答えてくれる

こんなにも知りたかった答えを簡単に出示してくれる

そんな、そんな奴がいたんだ…。

コナンは笑っていた。

受話器を耳に押しつけ、壁にもたれかかりながら。

目に、嬉しみの涙をためて。

窓から、夕陽のオレンジの光が、差し込み、コナンの足を照らしていた。

まるで、明るい未来への道筋を描くかのように、その光は綺麗に光っていた。

夜、灰原が台所で野菜を切る音が響いていた。

その顔は、どこか、深刻そうな顔をしている。

そんな顔を見て、コナンは、放課後のことが多分原因だろうと思うと、俺のせい？と思って軽く申し訳なかった。

そう思いながら、ソファアの腰かけに手を組んで両肘をつけながらじっと灰原を見ていた。

「…ちよつとあなた。さつきから何？用があるなら言ってくれない？」

「えっああ、わり…別に…ただ今日のせいで、お前、なんか元気ねえだろ？だから悪かったなと思って」

「別に…謝らなくていいわ。てゆうか、謝ることじゃないでしょ」

「でもお前さつきは怒ってたろ」

「それは、あなたが自分の無茶ぶりを理解してなかったからよ」

「あ…えと、お前、俺にもっと考えろって言っただろ？」

「言っただわね。それが？」

「俺…考えれたよ」

そこで初めて灰原の目が俺の目を捉える。

「服部に電話したらさ…なんか、当たり前のことみたいに教えられた。」

「それで…分かったわけ？」

「…ああ、分かった」

一瞬灰原の目が見開く。

「そう… よかったわ」

「えっ」

灰原は再び野菜を切り始めた。

「あ…それと」

「まだ何かあるの？」

再び顔をあげる

「なんかほんとサンキューな、俺、案外お前に助けられてばっかだな」

「…別にそうでもないと思うけど」

ああ、照れてる。

こいつは素直じゃないけど、根は優しい奴だって改めて思った。

ーガチャ

「ただいま」

博士だ。

「あら、おかえり。まだ夕飯作れてないからちよっと待っていてくれ

ない？」

「ああ、全然大丈夫じゃ」

「今日はどこ行ってたんだ？なんか最近出かけっぱなしじゃねえか？」

「え。ああ別にどこってわけじゃないんじゃない？」

「はあ？なんだよそれ。てかいつも教えてくれないよなー」

「ま、まあいいじゃないか。新一こそ、今日は大丈夫じゃったか」

「え？俺？まあ大丈夫、かな。」

「そうか、ならよかった」

コナンは知らなかった。

博士が、コナンの病気を何とか治せないかと調べ回っていること、そして、担当医に、どうにか少しでも病気の緩和ができないのか、寿命を延ばしたりすることはできないのか、と何度も何度も訪れていること。

そのために、家を毎日夜まであけていることを。

望んでること考えるべきこと（後書き）

また涙、出ちゃいました。：出しちゃいました？か。

服部って地味に好きなんです。なんか隠れ優しい的な感じじゃないですか、

あ。私、関西人じゃないですよ。バリバリ、遠州弁とか使いますもん。

「だら」とか。

「だに」とか。

他の方言の人に向けて、こういう遠州弁使つと「は？」とか言われるみたいです。

普通に（笑）

見つからない（前書き）

えっと今回は珍しく博士登場です。

哀との会話が続くかな？
分らないけど。

ではどうぞ！

見つからない

博士は、研究室の中に入り、ドすつと腰をおろした。

「ふう…」

続いて、哀も部屋の中に入ってきた。

「今日も、行ってきたの？」

「ああ。わしが新一にしてやれることといったら、それくらいしかないからの。」

「でも…博士こそ、あまり無理しちゃだめよ。」

毎日夜まで動き回っている博士の身を思っ、哀は心配している。

「ありがとう哀くん。でも大丈夫じゃ。」

「そう…で、今日はどうだったの？」

そついうと、博士はふつと悲しい顔をした。

「…見つからなかったのね」

「ああ。なんでじゃろう…なんで新一なんじゃろう。この老いぼれのわしが代わりに…」やめて博士

きつと灰原は博士を見据える。

「工藤君はそんなこと言ってたって喜ばない。分かってるでしょ」

「…そうじゃな、すまんかった」

「…でも、やっぱり工藤君ほどの患者となると、…どうにも、ならないのかしら」

「…そうみたいじゃ。どんなに調べても、回っても、どこも無理だの駄目だのと、そんな答えしか返ってこんのじゃ。」

「そう…病氣って理不尽よね、だって工藤君…実年齢でも、高校生じゃないの」

「そうじゃ…わしは、新一には幸せになってほしかったんじゃ」

「同感ね…。だって、彼は、幸せに？なるべき？だったのよ…」

そのあと、二人は、一言も交わさなかった。

どこ行っただんだ？2人とも。

つか博士も変だよな。どこ行っただくらい教えてくれりゃいいのに。

俺に言えないことなのか？

わっかんねえなあ。本当に分からん。つか、分かんねえことだらけじゃね？

まあ、人ならいくらでも分かんねえ事はあるか。

でも

「要は迷惑かけなきゃ…

『お前の周りには、お前を支えよう思てる人間がごっついるんやか
ら』

『だから、下手な演技してまで…偽るなんてことすんなや…そんな
ことのほうが、誰も望んでないんやで』

服部に言われた言葉が頭をよぎる。

「誰も、望んでない…か」

やっぱ、よく分からねえかもしれない。

でも、あいつが言っただから、きっといいんだろな。それで。

――翌朝

自然と目が覚めた。

今日は学校だ。おまけに、体調が普段にくれべていい。

こういう時には楽しんでおくのが得策だよな。

授業中、携帯のバイブが鳴った。

誰だ？こんな時間に…

パカッと携帯を開くと【服部 メール1件受信】とディスプレイに表示されていた。

服部？あいつがメールなんてめずらしいな。

てゆうかあいつ授業中じゃないのかよ、と思いつつメールを開くとそこにあつたのは… -

青空に浮かぶ、虹の写真だった。

「わ…」

ただの写真だけど、なんだかすごく心が打たれた。

光の反射とかで綺麗に見えるってのもあるけど、周りにある雲の隙間から、太陽の光がこぼれていて。

本当に綺麗だった。

その写真の下には

「綺麗やる！これで工藤にも今日は元気与えられたんやないか？？」

と打ちこんであつた。

あいつ…わざわざ、送ってきたのかな。

カチカチと先生にばれない程度に打ち返す。

「おかげさまで。

てゆうか授業中にいいのかよ。

ありがとな」

携帯を閉じ、頼杖をついて、窓の外を見た。

ブーっブーっ…

お？返信来たんか？早いやないか。

今の授業はプレゼンテーションなので、暇だから、カーテンをめくり、窓の外を見たら虹が超綺麗に映っていたので、工藤にも見せて

やろうということ、写メを送ったのだ。

どうせ周りも席離れたりとかやがやしているのではれる心配はない。

「おかげさまで。」

てか授業中にいいのかよ。

ありがとな」

わざわざありがとな、を下にせんくても…。

でも工藤らしくて笑えた。

こいつメールでも礼言つのに照れるんやろか。

そんなところを想像したら、さらに笑いがこみあげて吹き出してしまった。

そんな中で、また返信を返した。

「そらよかったわ。」

ええんやw今暇なやつから。

てか工藤メールでまで、照れるんやなw」

そう送ると、さっきよりさらに早い時間で帰ってきた。

たった一言。

「照れてない。」

と。

そんな力強く否定せんかても…。

けどやっぱ

工藤らしいよな。

見つからない（後書き）

なんか最後よく分からん。って感じになっちゃいました

止まらない時間（前書き）

えっと、少しここからは時が経ちます。

約：えっと、5ヶ月目を迎えます。

みんな切なくなります。多分。

止まらない時間

―もう5カ月。

もう5カ月だ。

余命1年って言われてから5か月たった。

あーあ…

早えなあ…。

「ほんと…早すぎ…」

1年なんて、たった12カ月しかないのに。

あと7カ月もすれば俺は…。

―考えたくもない。

だって。だって、5か月がこんなに早く過ぎちまうんだから。

7か月だって、すぐ終わっちゃう。

たかが1年なんて、思うな。1年も。って思えばいい。

有効に過ごせばいいじゃねえか。

それに。本当に1年で死ぬなんて限らない……そう思いたいのに。

俺の体の中に潜む病はそれを、それを許さない。

なんでだよ……。

そう考えれば考えるほど無駄なだけで。

……駄目だ。

やっぱり1人で考えると、マイナス面の方向に思考が行っちゃまう。

服部にも、1人で抱え込むなって言われたしな。

……電話、すっかなあ。

出っかなあ。

今は、灰原も博士も出かけてる。

灰原は博士と夕飯の買い物行っちゃって言ったし。

時計を見れば、4時54分。

この時間、なーんか嫌いなんだよな。

家に入り込む明かり具合が。

どうも…嫌なんだよな。

苦手つつつか、気に食わないつつつか。

なんて考えてるうちに、俺はいつのまに服部に電話をかけてた。

「おおおおおおおおお！！！！！工藤やないかあ ミちよお
久しぶりちゃうかー！？元氣かー！？！？俺は元氣やで
つつつつつつ」

俺はその一声で、一気に顔をしかめた。

「…」

「あれー？なんや？切れたんかな？いや、切れてへんよな。おいお
い工藤はーん」

「…切っていい？」

なんか十分になってしまった。

「なんやねん！自分からかけてきたんやないかつ」

「そうだけど…こんなうっさいのは望んでないよ」

「相変わらずやなもう工藤はー！。」

「そうそう変わってたまるかつの。お前も相変わらず元気だね」

「そりやそうやー！俺が元気やなかったらおかしいやろ！？」

「……確かにそうだな」

てゆうかそんな服部想像できない。

「まったまにはクールになっちゃるけどな」

「お前はクールとか言わないよ。十分探偵の時も熱い熱血型だろ」

「なんやねんその言い方！。熱血なんはいいことなんやぞー！？分かつとるんかー！俺の魅力…「はいはい。分かったわかった」

「あつこら、人の話はしっかり聞くって小さいころから教えてもらつてるやろ」

「聞いてますよ。分かったから少し黙れって。」

「…」

「……素直だな。」

「自分が言つたんやろー！ー！ー！！！」

「オマエ 中間って言葉知らない？」

「間のことやる？」

「そつだよ。知ってるんじゃないか。ならなんでできねえ。極端にうるさい、極端に黙る。それ超ー面倒くせえんだけど？」

「なななななっ！人のことばっか言っけどな工藤っお前かてっ」俺は中間です」

ガビゴーン！！！！

なんかすごい効果音が電話の向こうで聞こえた気がするけど気のせいかな？

「俺：もしかして工藤より劣るとる？」

「どついつ面で？」

「こついつ面で」

「そりゃそつだろ」

サラッと言いきる。

「俺がお前と同じなわけねえじゃん」

「くっ工藤ひどいでそれは・・・」

てゆうか。

「お前は俺と同じなんかじゃなくていいよ」

「ああ？どついう意味やあー。俺と同じは嫌言つ氣か？？」

「違うっつの。お前は、明るくてそのうるさすぎるくらいでいいんじゃないねえの？」

「・・えっ？」

服部は心底驚いた。

だって新一が服部のことを認めているような発言をしたから。

「俺はそのほうがいい。お前がそれくらい馬鹿みたいに笑ったりしててくれほうが、気に入ってるけどな」

「くど……／＼／」

なんかすごく照れてしまった。

だって、工藤から？気に入ってる？だなんて。

そんなこと言われるなんて……ありえへんで、思ってたから。

あれ？なんか黙り込んだな。変なこと言っただけ。

別に何も言っていないよな？

「おい服部どうかした… ドックン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ボトツ

携帯がカーペットの上に落ちる。

「-つつ…!!!!!!!!!!」

苦しい。

痛い。

そんな2つの思いが心底からこみあげてくる。

「なんで。こんな思いがけなく。

「なんで、こんな唐突に。

コナンの体もどさつという音ともに、倒れこみ。

心臓を鷲掴みにするように思い切り、押さえつける。

今までないくらい、一番、苦しい。

とめどめなく、汗が、額から流れ落ちる。

気を失いそうで、失わない

失いたいのにな、失えない。

電話の向こうでの異変に服部は感づく。

だって2つの妙な物音がしたから。

「えっ工藤？おいどうした？ツ工藤！！??」

すると微かに聞こえた声

「…っしい…」

えっ？

「く…っ！！っしい」

クルシイ？

まさか、発作…！？

「工藤！？苦しいんか！？おい！！大丈夫か工藤！？」

家の中で平次の叫び声がこだます。

それに異常を感じた平次の母が駆け寄ってくる。

「平次どないしたん？そない大声出して」

「おっおかん！工藤が大変なんや！行ってくるわ！！！！」

「行くてどつどこにや！？」

「東京や！！」

そついうと、上着も羽織らず外へ飛び出た。

近くにじいさんやあの小っこい姉ちゃんはおらへんのか！

くそっ…こんなときに。

せや！この前爺さんの携帯番号教えてもらったはずや。

そう思いつくと、すでに切れていた電話に焦りを感じつつ、すぐ電話をかけた。

「もしもし？服部君…「じいさん大変や！！」

彼の言葉を待つてはいられず、遮り叫ぶ。

「なっどうしたんじゃ！？」

「いつ今工藤と電話しとったんやけどっあいつ、多分発作起きたん

やつ。いきなり電話切れよって」

「なっなんじゃと!?!」

「せやから早く戻ってくれや!!!俺も急いで、そっち向こうてるから!」

「なっ…分かった!」

電話が切れる。

試しにもう一度工藤をかけたが、つながらない。

「やっぱ発作起きたんか…!」

電話の向こうの工藤はすごい苦しそうで。

以前、工藤が倒れた時の映像がフラッシュバックする。

それを思い出すと、さらに焦りが増した。

いろんな人にぶつかったが、気にとめられなかった。

俺は、もう工藤のところへ行くことしか考えてなかった。

だって、だってこのまま。このまま、工藤が………死んだら。

俺はそんな別れ方嫌や。

絶対嫌や。

そんなの絶対許さへんぞ！工藤！！

絶対生きてるんや！絶対！絶対！絶対やぞ……！！

止まらない時間（後書き）

また倒れちゃいました。コナン。

またってゆつか。久しぶりに大きい発作をかいで、そろそろ。本格的に病院生活を送りざるをえない状況になってしまいかもしれません。

それとお詫び申し上げます。

私は、こんな未熟な小説をお読みくださっている皆様に感謝の気持ちを抑えきれません。

本当にありがとうございます。

しかし、私も受験生という立場であるために、もちろんこの小説を中途半端で投げ出すなどと馬鹿なことはありませんが、しばらく長期にあたり、投稿ができなくなるかもしれません。

今回のように開いてる時間、合間の時間に少しずつ投稿できるのが精一杯。

そのため、投稿間隔について、読者の方々に、不満を与えてしまうかもしれません。

ですが、それでも応援してくださる、という方。

必死に取り組んでいきますので、どうか、よろしくお願いいたします。

はじめな（前書き）

ちなみに今回の話は、JUJUのHELLO AGAIN を聞きながら書きました。おすすめです。ぜひ、読者の方も、これを聞きながらお読みください。

「めんな

「今回は、本当に危ない状況でした」

これが、集中治療室から出てきた医師の第一声。

あのあと。

俺より早く家にたどり着いた爺さんが、倒れているコナンを見て、すぐに救急車へ通報した。

そして、病院にたどり着くなり治療室へ。

そのあとに、俺は到着。

その集中治療室のランプがついていた時間は、俺にとっては、長くて、長くて。

ただ、絶対に工藤が生きることだけを願ってた。

医師からとりあえず助かったとの言葉を聞いて、どれだけ力が抜けたことか。

あの冷静な小っこい姉ちゃんですえも、安堵の表情を隠せなかった

ようだった。

工藤は、酸素マスクをつけて、横たわっていた。決して、イイとは言えない顔色で。

医師が言った「今回は本当に危ない状況……」

この言葉がどういうことを指すのかなんて、聞かなくても分かった。

病院生活になることを、受け入れなきゃいけないってこと。

それから、確実に病気が、進行してるってこと。

親友のこんな現実、認めたくないのが本音。

だって、ずっと推理争いして、たわいもない話をして、……とにかく色々、思い入れが深い大切だって思う大事な奴だったのに。

だけど、俺が、元気ないところを見せたら、工藤は、傷つくはずだ。

前に言ってた。

俺のことでお前がそんな気負う必要ないんだって。

その通りかもしれない。でも、そんなことできない。

だって、だってそれだけ、工藤は、俺にとって生きていてほしい存在だから。

だけど、あいつの目が覚めた時、最初にかけてやったらいい言葉はなんだろうか。

分からない。

あいつにとって、一番いい一言ってなんだろう。

？お前がそれくらい馬鹿みたいに笑ったりしててくれほうが、気に入ってるけどな？

ああ…そうか。

そうだったんや。

いつも通り。　これが工藤の望んでることやんな。

でも…ごめんな工藤。

俺には、やっぱこれくらいしかできへんねん。

大事な、親友のためにも。

でもきつと、お前のことだから、「それくらいで十分だ」とかなんとか言うんやろ……？

分かってるで？

お前のこと、切ないくらい、分かるんで？

だって。俺だって、お前に劣らへん人間なんやから。

それくらい、分かってるやろ？

だってお前、工藤やん。

だけど、コナンがこの日も、次の日も、目を覚ますことがなかった。ずっと、硬く目をつぶったまま。

医師によると、大きな発作を起こしたせいらしい。

目を覚ますまでは、目が離せない状況なのだと聞かされた。

医師から聞く、一つ一つの言葉が、工藤の病気の進行を示すような言葉ばかりで、正直耳を塞ぎたくなる。

これらを聞けば聞くほど、お前今どれだけ辛い？って聞きたくなる。

そうしたら、どう答えるのかな。あいつ。

それが、逆に聞き返してくるのかな。「どんだけだと思っ？」って。

そう言われたら、俺にはきつと答えられへんな。

だって、言える立場やないしな…。

なんてことをグダグダと考えながら、廊下を歩いて、コナンの病室に入った。

このときは、何より驚いた。

だって、あっけらかんとして、テレビ見てたから。

―工藤が。

驚いて、逆に口がパカッと開いてしまった。

啞然として、言葉が出ない。

「工藤…起きたん、か」

「あれ？―服部じゃん。よ。」

「自分…もう身体平気なんか？」

「おお。てゆうか、日眩しくね？カーテン閉めてよ服部。」

「朝から閉めるんか。普通浴びるで光」

「朝」？俺それしか寝てないの？昨日の夕方だろ、ここ来たの…」

「お前…頭こんがらがつとるんか？」

「えっ？」

「もう工藤が、ここに運ばれてきてから、3日経つとるんやけど」

「……………へ？」

「へ…って…やっぱり間隔変になつとるやん！」

「マジで？…？…？」

「嘘つかへんぞ、こんなとこで！マジやマジ、オオマジ！！」

「う、そおー…」

「大丈夫かいな。どうかイタないか？」

「それは別に…」

「さよかwならよかたで」

ニカツと笑う。

「うん」

「あ、そつや！先生呼び行ってくるわ」

「ああ、頼む」

服部が出ていったあと、思う。

灰原と博士はどこにいんだろ…。家か？

「あー！」

突然思いだし、大声を出してしまった。

そういえば、俺がここにいるっていうことは、倒れたってことで、
つてことは、また、あいつらにも迷惑かけた…？

なんか…結局俺って…

今回なんて、まじ驚かせちまったよなあ…

今だって、体重いし。

俺…これから、どうなんのかな。

予想はつくけど…やだな。

なんて考えてるうちに、服部が医師を連れてきた。

「おお、コナン君。どうだい調子は？」

「え？ああ、全然大丈夫です」

笑みをこぼしながら言う。

だが、医師にはそれが偽りに見えてしかたなかった。

だって、大丈夫なはずがないんだから。あんな発作を起こした後に。

「本当かい？」

「本当ですよ」

変わらない口調で答えるコナン。

「そうか…それで、君に伝えなきゃいけないことがあるんだが」

ああ。きつとそれって…

「これからの、生活のことですか」

「…そうだ」

服部が少し顔を暗くする。

「やっぱ、自分ん家じゃ、駄目なんですか」

もう自分が小学1年生の姿ということを忘れていた。

「…うん。そうなんだ。君の生活は、これから、病院で送ることになっちゃいかもしれない」

つまりは、俺の病気が、そんだけ進行してるってことだよな。

「どうしても、ですか」

「…ああ。君の体はもう、自分で思っている以上に、弱ってきてるんだ」

「そんなくらい分かってんだよ」

弱ってきてる、その言葉に、思っているより、自分の心は、えぐられた。

もう容姿とかすべて、気にしてる余裕なんて消えてた。

だから、本音が出たのかもしれない。

いきなり変わった口調に医師は驚いていた。

それもそうだろう。だって、声のトーンも、雰囲気も、すべて、7歳の子供のものじゃなかった。

服部は別に、戸惑ってなかった。ただ、俺の気持ちを共有しているように、顔をしかめていた。

「…なあ先生。俺、ずっと、この病院で暮らしていくのかよ。死ぬまで？」

「っ…それは…」

「もういい。俺が小学1年生なんてこと忘れていいから、はつきり、全部教える。もう…嫌なんだよ。俺のことで、誰かが、気遣ったりするの。もう、そんなの見たくない」

そついうコナンを見て、医師は意を決した。

「…わかった。…はつきり言おう」

その言葉に、コナンではなく、服部が身震いをする。

「君はもう…普通の子たちと同じ生活は送れない。心臓病で、体がむしばまれていく中、どんどん君の体は、終わりに近付いている。だから、病院での生活をしながら、治療をしていかなければ、これから、何度も発作を起こすし、発作の間隔も、短くなるし、それに、病院での生活でなら、なんとか引きのばすことができる命の灯火も、これ以上勝手な生活を送っていたら、明日にだって消えるかもしれない」

「じゃあ先生、俺、あと長くてどれくらい？」

もうコナンは、悔しさの涙を、こらえながら、問うていた。

「半年…あるか、ないか」

「は…んとし…？」

「どういうわけか…病気、進行が、すごく早いんだ。だから…手の施しようがない君は…」

「死ぬしかないって…ことだろ？死ぬしかないから、治療っていったって、命を少しの間でものばすための…なんだろ？」

目を伏せて、医師はつぶやく。

「ああ」

「…それと、君に、選択の余地は、もうないんだ」

は…？

それって。

「病院以外での生活以外許可できないってことかよ」

「そうだ。…今までっただけで、十分限界ギリギリまで、君の自由を優先してきたんだ。でも、もうこれ以上は無理だ。」

無理だ。

「そー…かよ。」

今はもう、夕方の光が差し込む静かな部屋に、俺と服部の二人がいるだけだ。

医師の言葉を聞いてから、何1つ口を利いていない。

いや、利けないのだ。

でも、そんな中、重たい口を開いたのは、コナンだった。

「ごめんな… - 服部」

ベッドに仰向けで寝ながら、左手を目の上にかぶせる。

そういうコナンを服部は目を見開きながら、見つめる。

「せめて… - おめえの、いないとこで聞いたらよかった…」

「な…工藤、何言つて…「だって…」

「だって、俺…またおめえに、余計な重荷背負わせて…。まさか、あと半年、なんて…おめえの前でまで言われると思わなくて… - あんなこと、おめえにまで聞かせて…ごめん…本当に、ごめん…」

服部は、言葉が出なかった。こんな時まで、人のために、謝るコナンに対して。

本当は、俺だって、泣きたかった。親友のあんな辛辣な事実突き付けられて、辛くないなんて。口が裂けたって言えない。

でも、工藤が泣かないから、泣けなかった。当の本人が、こらえているのに、親友の俺が、涙を流すことなんて、できるわけなかった。

けど、こらえるのが辛かったから

しゃがみ込み、ベットの策に手をかけ、俯く。

「なんで…なんで、お前が謝んねん…っそこ…謝るとこ、ちやうやろが…っどあほおっ」

嗚咽をこぼさないように、ただ、涙だけを、目から流して。

コナンも、抑えていた目から、頬を伝って、雫が、こぼれおちていた。

初めて、親友と、泣き合った日だった。

いめんな（後書き）

すごい長くなりました…！

疲れた…！！

でも、なんだか、書いていくとはまちやって。

服部君、涙初めて流します。

ちよつと、もう、書くの辛すぎ…。

前も言った気がしますが…。

でも2人の関係って深くいくと、こんな感じなのかなって…。
思いまして。

今後よろしくお願いします

明かすべき事実（前書き）

えっと、この回は、灰原とか博士とかいろいろな人が出てくると思います。

どうぞ。

明かすべき事実

「入院という形になったコナン。そのことは、灰原、博士、服部、和葉、有希子、優作、といろいろな人に伝わった。

少年探偵団を除いては……」。

「どうするの……？ 工藤君」

花を花瓶に生けながら、コナンに問いかける。

「どうするって……何が？」

「だから……、子供たちよ。まだあなたが入院してるってことも……それ以外のことも、何も知らないのよ」

「ああ……それは、分かってるよ。でも……言えるのか……？」

「は？」

「だって……あいつらまだ本当の小学1年生だぜ？……なのに、ずっと付き合ってたやつが、いきなりもう長く生きられないって聞いて……大丈夫なのかってことだよ」

「それは……彼らにとってあなたは……きつと大切な存在でしょうから……」

「……だったら尚更、だろ？ 俺……やっぱみんないろいろ言ってくれ

るけど、どうしても自分のことで、他人を、悩ませたりするの…駄目で…。あいつらには…なんとかごまかせねえのかな…って思う」

「工藤君…」

「それに、あいつらに俺の“最後”を見られたくない」

「…あなたって、馬鹿よねえ。本当」

「…かも、しれねえけど。これがわがままでも…やっぱり俺は「そうじゃないわ」

「？」

「そうじゃないわよ、工藤君。私があなたを馬鹿だと言ったのは、あなたが、こんな時期になって、それでもまだ、他の人のことを考えてるってこと。もっと、自分のこととか、そのことに関して贅沢とか、わがままとか、さらけ出すべきだと思うのに、それなのに…あなた、全然そういうところ見せないんだもの…」

「灰原…。おめえってさ、いつもツンツンしててかわいくねーけど、でも、優しーよな」

笑顔になりながら、灰原に向かって言う。

「かつ…かわいくないは余計ね」

「そーゆーとこだったの」

また苦笑を洩らしながら、突っ込んでくる。

でも哀は、コナンのこういうところが、好きで…。

こんな会話が、できなくなるんだなんて、信じたくもない。

でも…こんなことを私が思っているのに、彼は…強い。

何より、明るくて。

全然弱味見せないで、我慢して。

そのくせに、時折逆にこっちが励まされるような笑顔を見せて。

でも。

とんでもない闇を彼が抱え込んでいることには変わらない。

「工藤君…？」

「ん？」

「あの子たちのことだけど…」

「うん…」

「多分、ごまかすことなんてしないほうがいいと思うわ」

「…は？じゃあなんだよ。全部ばらして、あいつらに変な辛い記憶

を刻みつけるってのか」

「そうじゃないわ。」

「おめえが言ってるのはそういうことじゃねえか」

「違う…！…違うわよ。そうじゃなくて…彼ら、すごい勘付いてるの」

「え…？」

「あなた、最近良く学校休むし、前に学校に来たときだって、調子絶対良くなかったってみんな心配してるの。本当は…なんか重い病気なんじゃないかとか、また1人で片付けようとしてるんじゃないかつとか、抜け駆けは得意技ですからねつとか、あなたがいない間、あの子たち、あなたの話題し카しないのよ…？」

「…っ」

「あなたが隠して、それであの子たちを辛い思い出を作らせないためだけに、だましても…彼ら、そんなの絶対喜ばないわ」

「…だけど…」

「彼らの器は、そんなやわじゃない。あなたと一緒にの時を過ごして、いろんな困難乗り越えて、1つ1つ強くなってた。あなたが思ってるより、ずっとずっと強いわ。だから、受け入れられると思うの」

「っ…」

「ねえ、だから話しましょう？すべてを」

「……………わか…った」

そこで初めて灰原は微笑んだ。

「大丈夫よ、絶対」

「……………ああ」

――翌日

「……………え？」

立ち尽くす歩美、光彦、元太。

「もう…長く、生きられないの？」

今にも泣きそうな顔で歩美は言う。

「…ああ。今すぐってわけじゃないけど…もう、学校にはいけないかもしれない」

「嘘、だろ？コナン…」

「嘘じゃない」

「いつ、嫌だっ！そんなの認めたくないよっ」

ほらな。

やっぱり。こんなこと言っべきじゃ…！

「僕は…受け止めます」

そう発せられる声に驚きその声のほうを見ると

「光彦……」

「だっ…だつて。今コナン君は入院していて、学校も休んでる…だからっ、それは、事実なんでしょう…？」

涙をその瞳からポロポロと流す。

「嘘じゃっ…ひっく…ないんでしょう…っ！？」

そんな光彦が見て入れられなくて、目をそらす。

「……ああ」

気づけば、現実を受け入れたのか、歩美も元太も泣いていた。

「コッコナン！！！！」

「…うん？」

「俺たちっ、お前のお見舞い毎日来るぞっ！！」

「えっ…?」

「うんっ、絶対来る！毎日毎日！コナン君に会いに来るっ！」

「歩美…」

「だからっ、歩美たち頑張る！コナン君も頑張ってっ！歩美も光彦君も元太君もっ、応援するから！！だよね!？」

「おうっ！」

「はいっ！」

「おめえら…。」

コナンは嬉しかった。

もちろん自分のことでまた泣く人が増えてしまったことは悲しかったけど。

でも、ちゃんと歩美たちが受け止めてくれたこと、そのうえ励ましてくれたこと。

そして、自分たちも頑張るといつてくれたこと。

ああほんと、灰原の言っとおりだなって思った。

「ありがとな、まじで」

こいつらに対してはめったに言わない、心からのお礼。

でも今は。本当に、感謝していたから。

それからの日々は、本当に歩美たちは毎日欠かさずに来てくれた。

必ず、何かを持って。

「おいおめーら、わざわざ毎回何かと持ってきてくれていいぞ？」

「何言ってるんですかコナン君。これくらいしか僕たちにはできませんから、気にしないでください」

ほんと、ガキには思えない発言するよな、光彦って。

「そうそう！だから、気にしないでいいよ！」

「別に俺、おめえらが来てくれるだけで十分だけど」

「そーんな年寄りくさいこと言うなよコナン！」

年寄りくさいって何だよ…

ガラガラ

「あつ博士！」

「おう、君たち来とったのか！でももう遅いじゃろ。そろそろ帰らないさ」

「えーっ！歩美まだいたい！」

「僕もです」

「俺も！」

「じゃがのお」

「そんな心配なら博士が送ってってくださいよ」

そう来るか、と困った顔をする博士を見て、コナンは思わず苦笑してしまった。

こんな日々、ずっと続くって思ってたのになあ…。

やっぱ、終わっちまうんだよな。

歩美も、元太も、光彦も、博士も、灰原も…こういう和やかな子供たちとの会話ができる日も…

終わっちまうんだ。

いつかは、
きつと。

明かすべき事実（後書き）

さて2回にわたり更新しました。

多分1週間くらい投稿できなくなってしまうですが、ごめんなさい。
今週テストなので・・・（中間

それでは、またよろしく願います。

変わらないこと（前書き）

テスト終わったー！！！！
もう解放感あふれてます ミ

でもまあ、また期末とかいろいろあるんですけどね
それはともかく、今日は久々の投稿に熱を燃やします！

変わらないこと

コナンは朝早くから起きていた。

昨日、なんだかんだで結構遅くまでいた歩美たち。

そいつらを見送ってから、一人になる病室に入るとこみあげてくる寂寥の感。

どうも、静かで重たいんだ、そのときの空気は。

そんな状況でいつも思い出してしまう。

以前医師に言われた言葉。

「…今までっただけで、十分限界ギリギリまで、君の自由を優先してきたんだ。でも、もうこれ以上は無理だ。」

この言葉。

今までだって十分限界。

もうこれ以上は無理。

病気が進行してるのなんて、分かってる。

そんなの理屈じゃなくたって全身で感じる。

なのに。

否定したくなる気持ちがこみ上げてくる。

だけど…このままじゃ、俺は…余命宣告よりも、早く…。

受け止めているつもりで、受け止められてない。

覚悟できてるつもりで、できてない。

全部が？つもり？でしかない。

だとしたら、情けない。

俺は、その程度の人間。

きつと、昔の健康で何も失ってなかった俺と比べれば、今の俺は色々変わったと思う。

変わりすぎて、もう何がどう変わったかなんて、分からない。

…変わってないものなんて俺にあんのかな。

あんなかな。

朝の検査をし、朝食が運ばれてくる。

見ても、食べたいと思わない。

だから、少し、食べてあとは残す。

どうも、食欲がない。動いてないからかもしれないけど。
けど、何にしる受け付けないのだ。

そのことについて、担当医に問いかけられる。

「食欲ないのか？」

「…ああ、うん。」

あの日以来、この担当医とはよく話すようになった。

気にかけてくれている、というのが正しいか。

「毎日毎日、完食した日、ないだろう」

「…そうかもしれない」

「食える時は食うんだぞ。点滴で栄養はやってるけど、ちゃんと噛め」

「噛めって…そこ重要？」

「食ってる気がしんだろっが」

「食う気しないから食わないんだろっが」

「まったく…君ほど生意気な小僧もめずらしいよ」

「ほっとけ。てか。先生に言われたくねえ。」

「どういう意味だい」

「そのまんま。」

まるで友達のように話す、二人。

コナン自体、もう小学生ぶるのも疲れたので、偽らずそのまま話している。

そのことに対して医師も何も問うて来ない。だからありがたい。

君が好きなようにしたらいい、とでも思ってくれてるのか。

「そついえば…最近彼は来てないのかい？」

「彼？」

「ほら…あの関西弁の色黒の高校生くらいの」

「あああいつか」

「ずいぶん仲いいよな、君ら」

「うーん…そういうのか分からねえけど、でもまあ、1番話してて楽しいな」

「ほおー。そういう存在がいてくれるだけありがたいじゃないか」

「ああ。」

確かに、ありがたいよな。

医師のいるほうではなく、窓側に顔を向ける

「どうした？」

「…外」

「え？」

「外出てえなっと思って」

小学生なのに異様に整った顔立ちは、少し切なそうな表情になる。

普段眼鏡をしていたりしてなかったりだが、最近は、ずっとつけていない。

その目は本当に寂しそうで。

「じゃ。出るかい？」

そう発した声にコナンがバツとこちらを振り返る。

「出て…いいのか？」

「まあ、そんな病院外は無理だが、庭とか、広場とかここにはたくさんあるだろう。そこらへんの外出許可なら取れる」

「ほんとか!？」

「ああ。きっと今日もまた誰か来てくれるんだろう。その人たち同伴でなら許す」

「いよっしや!!--!!」

ガッツポーズを見せる彼は久々に幼さが窺えた。

そんな日に来るんだ。

「よお工藤ー」

「よお。久しぶりだな、なんか」

「せやなあ、まあ俺平日学校やからな」

「まあそつだよな…って今日も金曜日だしそつじゃねえの!？」

「ああー…今日はサボったったんや」

「ハあ???」

「なんやなあ?学校普通に行こつて思つてたんやけど、なんやこつち来たなつてな」

「なんちゅー…気まぐれな」

「まあそう言いなや工藤」

「つか、おめえ単位とか大丈夫なのかよ。探偵やつてるだけで結構学校休むだろ?それに加えてサボりつて。大丈夫か?あと親父さんとか怒らねえ?」

「…なんや工藤、めずらしいな。そない俺のこと心配すんなんで。嬉しいで あつせやけど、大丈夫や大丈夫。一応ちゃんと計算してサボったからな。親父は…別に大丈夫やろ！どうせ仕事忙しいてなかなか帰ってこないんやから」

「あ、そ。じゃあいいか。で、てゆうか、ちょっと頼まれる服部」

「頼まれる？って何をや？」

「一緒に外行つて」

「外！？え、許可取れとんか？」

「うん。取れてる。だから、な。いいだろ？」

「まあ、許可取れてるんならええか」

そういつて、車いすにコナンを乗せ、外へ出た。

「うわ／＼外。すつげ久しぶりだ」

「工藤にしたらせやな、どや？外の空気、久しぶりに吸って気持ちいやる？」

「ああ。やつぱあんな密室よりこっちのがいいな…解放感あつて、いろいろ忘れられる…」

「っ…さよか。そらええことやな。じゃあこっちの空氣ぎょーさん吸ったとき！吸い貯めや」

「買いだめみたいだな、それ。てか、風…気持ちいな」

「せやなあ。今日の風は特に気持ちいで」

「んぢや、俺ツイテルな。そんな日に外出れるんだから」

ははっと笑うコナンを見て、服部もつられ笑った。

一回り広場や庭を回って、陽だまりの温かい光が当たるベンチに座る。

「工藤大丈夫か？寒ないか？」

「ああ、大丈夫。日暖かいし」

「さよか、ならいいわ。寒なったら言うんやぞ」

「オツケ。」

2人の間に沈黙が続く。

「服部…」

「なんや？」

「ちょっと、聞きたいんだけど」

「おお。何でも言ってみい」

「…変わらないものって、俺にあんのかな。」

そういうコナンを服部はじっと見つめる。

そうして目をパチクリさせると

「そらあるやろ」

と一言。

「…たとえば…?」

「たとえばって…そんなん考えんかてもいくらでもあるやん」

「え?」

「まあホンマにいろいろあるけど…何より1番変わってないことは、これやな」

「?」

「お前んこと大切に思ってる人間がぎょーさんおること。これがやっぱ1番やろ」

「…っ おまえってさ」

「な、なんやねん」

「ほんとに…」

ほんとに、

「なんで…」

どうして、そんなに…

「いつも、俺がほしい言葉くれんの…?っ」

気づけばまた1筋の涙が頬を伝ってて。

「工藤…」

いきなり涙を流してしまう親友を前にどう対応してやればいいのかわからない。

けど、これだけは言える。

「そんなん、それが真実、やからやろ…?」

軽く俯き、顔が良く見えないけど、その瞳から落ちる雫は、工藤の

手の甲にぽたぽたと落ちていた。

工藤のほうは見ないで、手だけその小さい身体の頭に乗せ、ガサツだけれど、撫でてた。

多分、顔は軽く赤い。

そして、これが多分、工藤の頭を撫でた2回目のこと。

その涙が止まるまで服部はその手を動かし続けた。

変わらないこと（後書き）

なんか久しぶりだったんで話構成忘れちゃって大変でした。

それでは。

またご指導とか感想とかよろしくお願いいたします。

新たなる驚愕

あれから。

コナンは涙を止め、立ち上がる。

そして一言。

「おめえが髪触るからばさばさになった」

と手で直しながら、ぶっきらぼうな口調で言う。

「なっおま…その言い方は「でも！」」

ちよつと大きな声を出されたので服部は思わず口を紡ぐ。

「でも…ありがとな」

そついうと一度もこちらもみないまま、車いすに乗って、自分で操作しながらどこかへ行ってしまふ。

服部は瞬きをくりかえし、ニヤツと笑うと

「待ちいや工藤！」

といって、コナンのところへ走って行った。

「それからまたしばらく外を回った後、お昼になったので病室に戻った。」

するとそこには医師がいて。

「お、帰ってきたか。どうだった？久しぶりの外は」

「ああ。気持ちかった。これからもたびたび出ていいだろ？」

「俺の許可をとってからならな」

「えー、それめんどくせえ」

「そう言うな。じゃなきゃ出さない」

「…わあったよ。あ、服部サンキュ。もう大丈夫だから」

そういつて車いすから降りると、ベッドに上る

「ええと、確か君は服部君だったかな」

と医師は服部を見ながら言う。

「あ、そうやけど」

「ありがとね、コナン君を外に出してくれて」

「別にええわそんなん。いつまでもこんな密室にいたら肩こるやろ
うしなあ」

「そうか。まあコナン君は楽しめたみたいだしまた頼むよ」

「いくらでもやるで。だから工藤もなんでも言っんやぞ」

「ああ、サンキュ」

その光景をみて、医師は一瞬頬を緩めるが、すぐ真顔になる

「服部君」

「なんや？」

「あとでちょっと君に話がある。ついてきてくれるかい？」

「話って何だ？」

そう問うたのは服部ではなくコナンだ

「ああ別に大したことはないよ。そんな重い話じゃないさ」

にこつと笑いながら、軽口で言う。

「まあ服部君、君の都合のよいときに来てくれるか？いつでもいい」

「ん、まあええわ。じゃあとから行けばいいんやな」

「ああ」

病室を出た医師は重いため息を吐く。

さつきは、軽口で言った。懸命に、大したことをないことを装った。

コナンに深刻なことだということを悟られないために。

だから、話そうとしている内容とは裏腹に、柄でもない笑顔を見せたのだ。

これだけは、これだけは、本人に知らしちやいけない。

絶対に。

「にしても何なんだ話って…」

まだコナンは気になっているようでぶつぶつ言っている

「そない気にするこたないやろ。あんな調子で話してんもん」

本当は服部自身少し嫌な予感はしていたが、それは口には出さなかった。

「そうだけど…俺に言うならともかくお前だけってのがひっかかる。

ってゆうか気に入らない」

「気に入らないってなんやねん」

「だって。お前だけに抱え込ませるって…やだし。」

「工藤…おまえ、素直やないけど優しいやつचना、やっぱ」

「うっさい。…決めた」

「決めた？」

はて？と服部は首をかしげる

「聞いたら教える」

「え？教えるっ？」

「うんそう。医師から聞いたら俺に言っつてこと」

「あ、ああ、そういうこと。ならわかったで」

「よし、これでいいや」

なぜか1人で満足げな顔をしている。

ほんと人のことばっか考えるやつचना。

もうちょい自分のこと…考えるべきだと思うけど…。

「何そんな満足そう顔してんねん」

中の感情とは裏腹に笑顔で、突っ込む。

「うつせーな、ほっとけよ。てか、人の顔ばっかじろじろ見てんなつての、変態」

「んなつ！なんでそこで変態になんねん！そういうこと考えるおまえんほうが変態やるが！」

「ああ？！てめつ、俺に変態なんて言葉似合わねーだろーが！」

「さよかあ？？俺は結構似合ってると思うでえ」

顔をお互い額に青筋を立て顔をひきつらせながら口げんかをしている。

「あーまじ、おめえってム力つくときはほんとム力つく」

「工藤だつて同じやろおー？」

「おめえと同じにすんな！」

ガンッとショック音が響く。

「っほんまなんやねんもうっ。ええわええわっ俺はあの医師の話聞きにいつてくるわっ」

「なんだその言い方は。全く幼いつつかなんつか…」

「それ以上言いなやー！はっ、もっおとなしく寝とれや。帰ってきたらとことん聞かせてやるでえ？あの医師とお前の愚痴たつぷりかましてくるでなあ？」

そうなめくさったように言つと工藤は思い切り顔をしかめる。

「うわ、どむかつく。とつと行けっバーカ」

「その口の悪さ直せや」

「てめえに言われたくねえよ」

そんな工藤に「けっ」と言つて、病室の部屋から出る。

そして、1つ息をついた。

こんな雰囲気ではかった。

和やかだつたりどこかしんみりしていたら、きつと帰ってきたときに気まずい。

だから口喧嘩調子で、出てこれて…かえってよかった。

どんな内容でも、また同じように、からかうような雰囲気であればいい。

そうすれば大丈夫。大丈夫なはずだ。

ポケットに手を突っ込みながら、ロビーへの道を歩く。

そして、受付のナースにあの医師を呼ぼうと声をかける。

「はい、なんでしょう?」

ここでふと気がついた。

あの医師の名前なんてゆうんやつけ?

「どうしました?」

いつまでも話しかけない服部にナースは首をかしげながら問う。

「あっえっえっと…あの江戸川コナンっちゅー患者の担当をしている先生で…」

「ああ! 種田医師のことですね!」

「種田? 種田っちゅんか、あの人。」

「はい、呼びますか?」

すぐ種田医師と答えてくれたところを見ると、その先生も、そして工藤もこの病院内じゃ人気なんかなってなにげに思った。

「あ、はい。よろしゅう頼みます」

しばらくすると種田医師が出てきた。

「ああ、もう来たのかい。早かったな」

「おお…で、そのために聞ききたんやから。ちゃんと話してくれるんやろ？」

「そうだな。とりあえずここでは話せないから、診察室のほうへ一緒に来てくれ」

「おお、わかったわ。」

内心焦りはあったけれど、なるべく、平常心でいた。

じやなきや持たないって思ったから。

シンと静まり返った診察室の中に二人は入った。

ドすつと2人が椅子に座った音がやけに響いたような気がした。

「それで…早速なんだが。まずちょっと君に聞きたいことがある」

「聞きたいこと？」

「ああ。…彼の両親はどこだ」

「えっ？」

「コナン君の両親だよ。今彼はあんな状態だ。それなのにその親は

？責任があるだろう。なのに、なぜ顔を全くといっていいほど見せない。」

「それは…」

平次は少しためらった。コナン、いや、工藤の両親のことをどう説明すればいいのか。

とりあえず頭に浮かびあがった構想でまとめた。

「えっと…やな、く…コナン君の両親は今まで何度かあいつが病気になってからもちよくちよくコナンに会ってはいるんやけど…あいつの両親えらく仕事忙しい人らでな…なかなかこっちに本格的に入院してからはあんま顔を出せんでおるんや」

我ながらよく考えたと、心の中で思う。だけど、何度か顔を見せてるってのは事実だと思う。

「だが、普通担当医に自分の子供の病状を聞かないのか？俺が今まで話したことのあるのは君や、コナン君の知り合いにばかりだけだ。」

「だっだからそれは、その忙しいてなかなか会えんあいつの両親に俺らから伝えてんねん。でも、く、コナン君の両親は、別にあいつを心配してないとかそんなじゃないで、多分。てゆうか…絶対。やな」

それを聞き医師は少しきよんとしている

「なんでそんなこと言いきれる？絶対心配してるってこと」

「だって…あいつの両親、過保護やもん」

「えっ…とてもそうは思えないが…」

まあ何も知っていないこのおっさんには分からないだろうが。

工藤の両親。特に母親の息子への溺愛っぷりはすさまじいと思う。

ってゆうより。

「なあ、あんたが俺に言おう思ってたことはこんだけか？」

「……………」

「違うやろ…？他に本題…あるんとちゃうか？」

「…ああ」

「それを聞かせろや」

「…少し、妙なことを聞くんだが」

「？なんやねん」

「彼…この病気にかかる前。大病にかかったりしたことあるか？」

「いや、それはない思っけど」

「じゃあ、1度でも変な薬とか…飲んだことは？」

「え……?」

変な薬。変な薬?

そんなの決まってる。

【A P T X 4 8 6 9】

忘れかけていた名前。消えたはずのその組織。とんでもない毒物。それが…

「なんでや…?」

「彼の体に、あるはずのない悪性の物体がある」

「悪性の物体…?」

「それが…おかしいことに、毒物と化し…腫瘍と…なっている」

「な………んや、て?」

「場所は…心臓の付近…肋骨に食い込むような形で……」

「ちょ…は…?ま、てや。それ…要は癌…って、ことに……」

「ああ……そう、なんだが、それともっと恐ろしいことに、今まで特に検査で異常なかったのに、最近血液検査で…分かって。どういいうきさつか分からのだが…その毒物らしきものが、血液中に

流れている。それも、心臓に流れる血液に、だ」

は……ー？

は…？

は？

言われてることが理解できない。

全然できない。

毒物？

血液？流れている？

意味が……ワカラナイ

「なに…言ってんねん…自分」

「つまり…言ってしまうと、彼の寿命は…もう、本当に、もたないかもしれない」

「なっ…」

「高校生の君に…こんなことを告げるのはどうかと思う。だが…だが、これは君には、言っておかなくちゃならないんだ」

「…っ」

「聞いて、くれるな。俺だって…俺だって平気じゃない。こんなこと告げるのは辛くてたまらないんだ。だがね、一番辛いのは。これから辛くなっていくのは、俺でも君でもない。コナン君だ」

「それは…」

それは分かる。一番苦しまなくてはならなくなってしまつのは工藤だつてこと。

そんなもの聞かなくても、病気を抱えてるのは工藤自身だから。

「彼はね…、彼は。もうこれから、本当に頻繁に発作が起こることになるだろう。そして、体のたるさも、重さも、症状も徐々に徐々にだが、大きく、確実にひどくなっていく。今まで血液検査になかったものが、出てくるようになった。それは、かなり、危険な状況になることを…覚悟していてくれ」

「……なんでや。なんで…」

神様。

そんなもんがあるんやったら俺は、心底お前を恨むで。

もう十分やないか。

大切な人を失つて。余命1年と宣告されて。

さんざん辛い思いをさせとつたくせに。

まだ、まだ足りないちゅうんか。

なんでそない工藤を、苦しめるような真似すんねん。

なんでや…？

なんでやねん… -

新たな驚愕（後書き）

2度にわたったの編集。
申し訳ございません。

長い話になると、ついやってしまっんです。

でも今後もよろしく願います。

しっかりしいや！（前書き）

さて、えつと…テスト返ってきました。

見事にぐさつと胸にくるような点数でしたね。

まあ、それはおいといて、こちらで気分転換です。こっちも暗いんですけどね？

しっかりしいや！

服部は無気力な表情で廊下を歩いていた。

あのあと、医師は「コナン君の両親や他の人たちにも伝えておいてくれないか」と頼み、部屋を出て行った。
出る間に、「すまん」と言葉を残して。

すまん…か。それは、俺に言う言葉じゃないはずだ。

言うべきなのは工藤に対してだ。

まだ20歳にもならない工藤に、生きる希望を見せてあげられない、救えない、その工藤に、謝るべきはずだ。

でも謝っても工藤はきっと、不機嫌になるくらいだろうか。

あいつはそういうことを、1番嫌う。

―服部は新一の病室の階まで行き、足を止める。

そこで、気付く…。

戻れない。

こんな心境じゃとても、明るくなんて振る舞えない。

偽りだとしてもだ。

ひそかに足も手も、震えているのが分かる。

こんな状態で戻っても、工藤には勘付かれてしまうだろう。

そう判断した俺は、踵を翻し、階段をつかって1階まで下りていく。

そこから、入口を出て、外に出ると、携帯をポケットから取り出し、無造作にメールを打ち始める。

阿笠博士にメールしているのだ。

今、電話で言えはいいのかもしれないけど、とても落ち着いて物事を言える状態じゃない。

だから、メールで、俺の精神状態が落ち着いているときに、話すことのできるように、用途を伝えた。

ブーッブーッブーッ…

「あら、博士、携帯バイブ鳴ってるわよ」

ソファーに座りながら医学の本を読んでいた哀がその着信バイブに気づいて、博士に呼び掛ける。

「おおほんとじゃ。誰からじゃろ」

パタパタと小走りで駆け付けた博士は携帯を手に取り、ディスプレイを見る。

「メールじゃ」

「メール？誰から？」

「服部君じゃよ」

「え？…彼からなんて、珍しいわね」

「何何…？明日か明後日、話があるからあけといてくれ？工藤の両親もできれば家に呼んでおいてくれ、と書いてあるぞ」

「工藤君の両親も…？…ちょっと。嫌な予感するわね」

「ま、また哀君…縁起でもない」

「そ、そうよね…。けど、なんか報告でもあるのかしら。」

「そうじゃろて！…心配することなんか何もありゃせんよっ…」

しかし、2人の顔には動揺が現れて消えなかった。

「これで、ええやろ」

ぱたりと携帯を閉じる。

服部はこれ以上ないってくらい暗い顔をしている。

瞼が、すごく重く感じる。眠いわけではない。

現実が、辛くて目をあけてるのが、苦しいのだ。

そんなことを考えてるといきなり、手の中で携帯がバイブを鳴らす

メールの返事だと思ったのだが、異様にバイブの鳴動時間が長い。

なので携帯を開くと、その画面に表示されていたのは

【和葉】

和葉…？

ピツと押し、電話を耳につけると

「あんた今どこにおんねん！！？…？？」

ドでかい声で受話器から怒声が聞こえた。

本気で耳が潰れるかと思った。

だけど…いつものように罵声を返す余裕がない。

「うつさいわ…今、工藤のどこ」

「は。工藤くんのところ？なんで学校さぼったん！？」

「…なんとなくやけど」

「なんとなくう！？」

「そやけど…」

「……………平次？」

「……………なんや」

「…どうしたん？」

この声にグツと胸がつまる。

さっきまでと打って変わって、すごく優しい声だったから。

「別に。どうもせんで…」

「嘘や。平次がそんな元気の時、そんな話しかたありえへんもん…」

「和…「辛いことあったんなら話しいや」

その一言に涙腺が切れそうになる。

だけど、こいつの前でいくら電話越したろうと、泣くなんてできない。

プライドが邪魔するから。

「別にそんなない…」

「ならしつかりしいや…!!!!」

「っ!!」

その凜としたある意味優しさも含んだ声に驚く。

「平次が、そういうならそれでええよ？工藤君のことなん？…でもそれを、無理に話したって辛い時もあるやろし…でも平次っ、あんたがそういうなら、そんなないって言うんならなっ…あんたがし

「つかりしなあかんやろ…?」

「あんたがしつかりしな…」

和葉の言葉に胸が打たれる。

「せやんな…」

前に誓ったはずやん

俺がしつかりして、工藤を支えてやらなって…

俺がしつかりして、安心させてやらなって…

「そやった…な、そやったわ…。 - 和葉…おおきにな」

「そ、そない礼なんていらんわ…っ／＼とっとかく明るくてうるさいほづがっ平次らしいっちゅうことやからっ、覚えときいよっ」

そついうと電話はプツっ…と切れた。

このときもっ、服部の顔に暗い表情はなかった。

しっかりしいや！（後書き）

短めになっちゃいました。
多分次話は長くなります。

受け止めよう(前書き)

えっと前は和葉と服部書きました。

ええと、それではまあ今回は長くなりますでしょう…多分！

受け止めよう

すっかり遅なつてまいよつた。

工藤怒つてゐるやろか。

さっきの和葉からの電話で調子を取り戻せた服部は、小走りでコナンの病室に向かつていた。

部屋の前につき、笑顔で扉をあける

「スマン工藤ー長なつてしもつて…って寝とるんかい！」

食事前テーブルに突伏して、寝息を立てている。

「なんやねん…人が笑顔で入ってきたったうちゅんに。こらまあずいぶん無害な顔で寝とりますこと」

近づいてコナンの顔の位置まで自分の顔を下げる。

こいつ…口開けばそらまあむかつくようなことばっか言つとるけど…寝とるときはまあ素直な顔で。

「デコピンしたるか」

スースー寝息を立てるコナンの額に手をかざす。

そして親指に中指をひっかけて勢いをつけると

バシッ

額に命中

「いッ…」

結構利いてしまったらしい。

額を抑え、まあなんてゆうか寝起きのひでえ顔でこちらを見据える

「いてえよ」

「そらデコピンしたし痛いやろお？クックッ」

「ざけんなてめー。いきなりやんな。俺の睡眠時間を妨げるなよ」

「いんや別にーあまりにも工藤が気持ち良さに眠ってたもんやから、どうもやりたくなってなあ。俺の好奇心っちゆうやつやわ」

「迷惑な」

「ごしごしと目をこする

まだ視界がかすむ

「眠いんか？」

「ん、まあ。おめえのせいだけど」

「失礼なやつちな」

「おめえが言うか」

「は、と笑う」

「あ」

コナンが何か思い出したように声を上げる。

「なんやねん」

「話の内容聞かせろよ」

「えっ…ああ…しょーもなかったで」

「どんな話だよ」

「最初はまあ…お前のとこまた来たってくれて言われて、そのあ
とはお前の愚痴やなw」

「はあ？」

「口悪い生意気なやつちやとか話しとつたら時間経つてなあ。で、

帰ってきたらおまえ寝とったってわけや」

リアルに話を構成した。疑う余地を与えないために。

「あ、そ…なんだ。…って今何時？」

「え？4時20分前やけど」

「3時40分か」

「せや。なんでや？」

ポリポリ頭をかく

「そろそろ元太たち来る時間だから」

「子供達か」

「ああ。」

「さやか。じゃあ俺はそいつら来たら帰るで」

「え？なんでだよ」

「別に理由あらへんけど、子供たちの前でおまえんこと工藤何回も間違えていいそうやし」

「ああ…確かにそれは困るな」

「せやろ？だから、また来るかもしれへんけど」

「そっか。なんか…わざわざ気遣ってくれてサンキューな」

「…。べっつにお礼言われるもんでも…ないけど、やっぱり工藤のそういう素直に礼言ってくるの珍しいです。ありがたく頂いとくで」

「んだよそれ」

なんて話していると

ガラガラッ

「コーナン君っ！」

「よっ！」

「今日も来ましたよ！」

そういう三人をみてひとつ微笑み

「ああ」

そのときの笑顔になぜか服部は違和感を感じた。

その理由は分からなかったけど。

「…そんじゃまあ俺は帰るわ。」

「あ。おう」

「えー平次お兄さん帰っちゃうの？」

「ああ。お前らの邪魔したらあかんて思ってな」

「残念ですー」

「まあく、コナン君との時間楽しみみや」

「そうするぞー！」

「ほんじゃな、また来るで」

「おう」

「バイバイ平次お兄さん」

そついう子供たちに軽く手を振り、病室を出た。

コナンと子供たちの声を後ろに聞きながら、その病院を去った。

「とりあえず…阿笠のじいさんとこ行くか」

明日は大事な話を皆にしなければならぬ。

だから、こつちにいてもいいやろと思い、阿笠邸に向かった。

「もう工藤の両親呼んでくれはった？」

「ここは阿笠邸のリビング。

「ああ、呼んだぞ」

「おおきに。来れるて？」

「ああ。最近は新一のために仕事には休暇を入れてるそうじゃ」

「さやか。じゃあ日本におるんや？」

「日本に、というより隣におるぞ？」

「へ…？」

隣ってことは、工藤邸？

「新一から聞いておらんのか？」

「何も聞いてないで」

「そうじゃったのか。てつきり服部君には伝えてると思ったんじやが」

「なんやねん。工藤…全然言わへんかったんに。じゃあちよくちよく行ってるってことなんやな？」

「まあそうじやろ」

「ふうん」

ん？じゃちよつと待て。そんなちよくちよく行っているのに、種田医師とは1回も顔合わせてないっちゅうことか？

それは偶然か、それとも工藤の両親たちの意思？

…両親たちの意思か。

よくよく考えてみれば、工藤の両親ということは、工藤優作、工藤有希子ということになる。

そんなの世間一般からしたら有名人だし。

そんな堂々としているわけにもいかないだろうから。

ならば、別に明日でなくても…

「あ…じいさん、明日に話つて言つとったけど、今日でもええかな」

「え？ああそれは別にいいと思うぞ」

「それじゃあ…」

「服部君、顔見るの久しぶりねえ」

「あ、どうも。お久しぶりです」

心なしか。少し工藤の両親がやつれているように見える。

でも…そうなってしまうのも無理ないやろな…。

「で、話っているの、教えてくれない？」

ずいぶんストレートに本題に入ろうとする灰原。

「え？あ、ああ…。」

さすがに入りづらいものがある。

でもこれは…。

「話す前に、言つときたいことあるんやけど」

「言っておきたいこと？」

「なんだい？」

「これ聞いたら、ちゃんと受け止めてほしいんや」

「っ…」

その一言で内容がよいものではないことを全員悟った。

「どんなに辛くても、過酷でも、取り返しのつかないような話でも、ちゃんと。」

そう話す服部の真摯な言葉と瞳に皆がうなずいた。

そして服部がゆっくり口を開き、告げられた事実を一言一言話していく。

そのたびに、みんなの顔は、悲哀、驚愕に包まれていった。

中でも、その原因であろうA P T X 4 8 6 9を作った灰原は深くショックを受けていた。

「そんなの…それじゃあ…それはほぼ私のせいじゃない…！」

「哀、くん…」

「受け止める、って言ったやろ」

怒り、悲しみ、すべてひっくりくるめられたその声に、灰原は顔をあげる。

「自分のことを責めるのやめえ。だいたい作ってたていったて、服毒させてたのあんたんせいやないやろ？」

「でも…！」

「哀ちゃん」

有希子の声にビクツと灰原の肩が震える。

有希子は灰原の背丈の高さまで、しゃがみこむと灰原の頬に手を添える。

「そんなこと言うのやめて…？そんな真似したって新一喜ばないわ？」

そついう有希子の目からは雫がこぼれおちている。

「新ちゃんが…そうなっちゃたのは、私だって、悲しいわ…？でもね。哀ちゃんがそう思ってくれてるってことは、それだけ新ちゃんのこと、思ってくれてるってことでしょ…」？それだけで十分よ？」

その言葉に灰原の涙腺も切れ、涙が伝う。

「そつよね？優作？」

「ああ、その通りだ」

そう微笑む優作の目にも涙は溜まっていた。

「受け止めようや…」

その涙声を含んだ声に、その場にいた皆が、力強く頷いた。

受け止めよう(後書き)

ええと、ついに切羽詰るところまでやってきました。

最終話近づいてきます。

タイムリミット（前書き）

さて、そろそろ終着駅についてしまいそうな頃でしょうか…

読んでくださるみなさんがいてくれるからこそここまでやってこれています。

今度からもうどうぞよろしくお願いいたします。

タイムリミット

ドクッ ドクッ ドクッ ドクッ

「…っ…！」

小刻みに頻繁に起こる発作。

もうあの服部が来てくれた時から3週間だ。

1週間くらい前からだろうか。

発作も、症状も、体も苦しくなっていく。

ちよくちよく今までも発作は起こっていたけど、こんな頻繁じゃなかった。

だんだん、自分の終わりが……見えてくるような気がした。

常に出してある食事前テーブルに肘をつきながら、発作に耐える。

目はかすむ。

頭もくらくらするし、ひどい時は吐き気も襲う。

もう発作の回数も多すぎて、ろくに医者も呼ばない。

けど。発作の時とか、必ず襲われるものは、ひどい孤独感。

あれが俺の中では1番、怖い。

真っ暗な闇の中に1人、放り出されるみたいで。

両足で立ち続けるのが、ひどく辛い。

認めたくはないけど、．．．．．だけど。

そろそろ、覚悟は必要なのかもしれない。

そして、そろそろ、書いておくべきなのかもしれない。

人生のタイムリミットにそなえて。

……『遺書』という名の最後の手紙を……

こんな、早くに書くことになるなんて思ってた。

でも、運命は逃げられない。

だったら、受け止めて、しかと立ち向かおう。

逃げてばかりいたら、傍で支えてくれるみんなに悪い。

発作の余韻が残る中、伏せていた顔を上げ。

キッと目を据えた。

R R R R R R R R R R R R R R R R

受話器の表示を見ると、公衆電話とされいる

「？」

誰だろうと思いつつも受話器をとる。

「はいもしもし？」

「あ……灰原？」

「！工藤君？」

「うん。そう俺。灰原さ、今日こっち来る予定ある？」

「え？ああまあ、今日土曜日だし、行くうちは思ってるけど。」

「そうか。じゃあさ、わりいんだけど、こっちくるとき、便箋とペン買ってきてくんねえ？」

「便箋とペン……？」

「うん」

「別にいいけど……そんなもの何に使うの？」

「え。まあそれはお楽しみ…？」

「ハあ？」

余計訳わかないんだけど…と言われる。

「まあまあ、楽しみはあとに取っとくもんだろ？」

「…」

「んじゃ、そういうわけでよろしく」

ガチャ…

異様にハイテンションで一方的に電話を切られた灰原は眉間にしわをよせて、しばらく受話器を見つめていた。

―「とりあえずはこれでいいな…」

電話を切ったコナンは軽く息をつき、自分の病室へ歩を進める。

が、途中で、種田医師に呼び掛けられる。

「あ、コナン君！」

「あ？」

特に理由はないのだが、つい不機嫌な声で振りかえってしまう。

「丁度よかった!」

「何がだよ…」

主語がねえよ、と思いつつもジト目で返しておく。

「ちょっとここで待ってろ、いいもの持ってきてやる。動くなよ」

「一步も?」

「そうだ。ま、動くなよー」

そういうと、タカタカと駆け足で去っていく。

動くなって…ここ結構邪魔な位置だと思っただけだな…。

すると3分くらいすると、また駆け足で戻ってきた。

すっと手を出し

「ほらこれ」

その手の上に乗っていたものは…

「ボイスレコーダー?」

「そうだ。君の通ってる小学校から来てたぞ。確か…帝丹小学校だったか。速達で送られてきた。多分早く聞いてほしいってことじゃ

ないのかい」

「ん…じゃあ聞いてみる。病室に帰ってからでいいだろ」

「ああそうだね。そうだ、あとこれ…手紙か。君宛に1年B組より
つて書いてあるぞ」

「手紙つきで送ってくれたのか…」

「やはり君はいろんな人に愛されているね。うらやましいよ」

「ああ…みんなに、感謝しねえとな…」

ふつと微笑むコナンを見て、種田医師は頬を緩める。

「早く部屋に戻って聞いてみることだな」

「ああ、そうする…」

「気をつけて戻れよー」

軽く手を振り、また駆け足で去って行った。

あれでも忙しい人なのか…とその背中に呟いてみた。

ま…それはともかく。

―病室

「んじゃ、早速聞いてみるかね」

再生ボタンを押すと

『はい、コナン君ー？小林よおん』

相変わらずハイテンションな…。

『元気？江戸川君いないと、事件になかなか遭遇できなくて先生寂しいです！』

いやいやいや。遭遇できないほうがいいだろうが。

『でも寂しいのはそれだけじゃありません！早く江戸川君がこの教室に戻ってきてくれること、祈ってます！』

なんて語ってくれていたが途中で…

『先生ばっかしやべってずるいー！』

『みんなにしゃべらしてよーっ』

なんて聞こえてつい笑ってしまった。

『それじゃっ、みんなの要望もあるのです？みんな一人一人から江戸川君にメッセージを送ります』

そのあと

『早く元気になってね』
とか

『一緒にサッカー早くやりてー』

とか

『コナン君の顔早くみたーい』

とか

『1日も早く戻ってきてねー』

とか

『待つてるよー』

とか

『また事件解決したいですっ』

とか

『おまえがいないと決まらないぜっ』

とか

『やっぱコナン君いなきゃ嫌ーっ』

とか…

たくさんの声が聞こえた。

中には歩美たちの声も入ってて、あいつら、俺の寿命のこと知ってるはずなのに、それでも俺が戻れることとか少しでも、希望を持って期待してくれていること、すごく嬉しかった。

だけど、悲しくて、申し訳なかった。

それを、実現できないことが。

こんないいやつらが、たくさんの声を俺にくれた。

それにこたえられない俺は、情けない。でも、力にはすることができ。

たくさんの無邪気の声の中に、一人クールな灰原は、

『これだけイイ子たちがたくさんいるんだから、あなたも頑張りなさいよ』

って大人びた意見をくれてた。やっぱそっけなさは変わらないけど、俺には十分だった。

手紙には、

【このボイスレコーダーは、1年B組のみんなの思いと声が詰まった江戸川くんへの贈り物です。たいせつに、聞いてみてね】と記されていた。

ーガラガラ

便箋とペンを入れた袋を持った灰原と、博士が現れた。

「買ってきたわよ、頼まれたもの」

「おお、サンキュー」

灰原は俺の手にしていたボイスレコーダーが目にとまったのか、

「あら、それ届いたのね」

「おお、聞かせてもらった」

「よかったのお新一。」

「うん」

俺のためにこれだけのことを思ってくれる人。

そんな人たちに俺は、残された時間だけでも…

感謝と謝罪の意をこめて…

せめて俺がみんなにできる最後のことを、託して…

遺書に刻もう。

それで俺のタイムリミットを、迎えられるはずだから…」。

その決心とともに、俺の体は…もうすでに、病魔に食いつくされそうとしていた。

タイムリミット（後書き）

本当に終わりに近づいてまいりました。

またみなさん、感じたことなどありましたら感想等によりしく願います。

お前にだけは（前書き）

文化祭が…終わった。

頭痛いです…

でも少ない時間の中進行できるときは逃すわけにはいかないので”

お前にだけは

俺は、机の上でペンを走らせていた…。

でも。その手はすぐ止まってしまふ。

震えているのか…？

覚悟したのに、それなのに、こんなに手が震えてしまふのは、どこかで死を恐れているから？

やっぱり、一度書く決めていても。

そんな簡単に書けないのが現実か…。

それに、伝えたいことがうまく書けない。

どう書けば伝わるんだろうか。

俺の思いや、言葉が…。

でもこんな悩むってことは、俺もそれだけの人生を遅れてきたってことなんだよな。

…それを、そのまま書けばいいのか？

考えあぐねて、外を見るともう真っ暗な空。

明日は、誰か来るのかな。

また、ここに足を運んでくれる奴がいんのかな。

そんな奴らに、俺は…このあふれでるこの感謝の思いを…

何よりも、伝えなきゃいけないはずだ。

だから、それまで俺は……

気づけば、徐々に心臓が苦しくなるこの感じ。

また発作。

この発作も、もう慣れた。いや、慣れるものではないんだが、毎日

の習慣のようなものになってて。

そのたびに痛む心も…

何もかもすべて…

いつかは、終譜を迎えることになる。

いつか苦しんだ。その悪夢におびえた。何かで涙を流した。

それを支えたり、一緒にそばにいてくれたりしてくれたやつ。

それは俺の記憶にあって、その記憶は消えなくて、それがずっと、俺の中で生きてることに、生きる意味を知って。

それだけ価値のある人生を十分歩めてきた俺は、きっと…。

「…」

「さよなら」

それを心起きなく言うために俺は、ちゃんと思いを伝える必要がある。

だからそのために、もう少し生きさせてもらおう。

そう思えるきっかけで、何かの始まりとなった蘭。

ありがとう……。

俺は、お前にちゃんと、お前の分まで、生きる意味を、見つけられた。

ちゃんと胸を張って、生きる意味を見つけられたよ。

だから、もうちょっと見守っててくれないか。

誇りを持ってお前に会いに行くからさ。

俺に残された時間はもう……

もう、もうすぐだから……。

お前にだけは（後書き）

なんかコナンの一人称になってしまいました。おまけに短い…。

だけど、だらだら引きずるような形になってしまつようですが。

もうすぐ最終話です。

それでは。

笑顔（前書き）

前話読み返したんですけど、38話なんか読みにくいですね。

すみません。あとでちょっといじっておきます。

修正的な意味も兼ねて。

ではどうぞ。

笑顔

―もう、もうすぐだから。

あれからまた何日か経っていて…何日かしか経っていないのに、病状の悪化は早くて。

机に突伏していた状態から、今度はずっと寝たきり。

だいたい発作に耐えて、耐えて、苦しむ日々の繰り返し。

だけど、誰か来てくれた時は、必ず身体を起こす。

苦しくても、しんどくても、どんな状態でも。

変な同情をさせて、みんなを悩ましたくなかったから。

ほら、こうしてまた今も…寝たきりで息を軽く荒げていたのに。

扉を開けてきたのが、服部だったから。

重たい体を起こす。

「お前、よく最近来るな。前よりも頻繁じゃねえか」

「なんや。嫌やってゆうんかあ？」

「別に嫌じゃねえよ」

もしかしたら、服部も感じ取ってるのかもしれない。

何かを知ってるのかもしれない。

だけど俺は別にそこまで深く聞こうとは思わなかった。

あいつが隠し通して行こうと思うことならそれを否定するに値する俺の意見も別がない。

だったら、あいつの考えているようにしてもらったらいい。

それに、俺の体の調子のことなんか、自分が一番分かってる。

「工藤？」

「…あ？」

「いや、なんやえらく考えとる顔しとったから、どないしたんかなって…」

「え？俺そんな顔してたのか」

「ああ、自分でも気がつかないなんてなんやねん。…でも、身体の調子どや」

「別に、大した変化もねえよ」

「さよか」

…嘘やるが。

大した変化ないなんて、嘘やる？

苦しくないはずないやん。

あんな大病を抱えて、毎日が苦しくないわけ、ないやろ。

本当は工藤が無理してることだって十分くらい分かってる。

『無理すんなや』

それだけの言葉で収まるなら、すべてが上手く綺麗に片付くようなことなら、とうの昔に言ってる。

言ってるんや。ただ、言えないのは、工藤が、必死だから。

生きるために、周りに迷惑かけないために、心配掛けないために。

どんなに声をかけ、こちらが説得しても

どんなに自分が苦しい目にあっても

工藤の根っこは変わらなくて。

だから、ちょっとした気持ちや軽々した、気楽な、そんな意味だけ

で言葉なんて言えなかった。

「なあ服部」

「なんや？」

「あ、のさー。」

「？」

「俺、お前にまともに笑ったことあったっけ」

「え…？」

「だからあ…その、なんつーのかな。嘲笑いとかじゃなくて、まともに、普通に笑ったことってゆうか、…うまくいえねえ…」

「えっと…つまり、まともな笑顔を俺に見せたことあったかつちゆうことか？」

「あ。うん。そんな感じ」

「ん…んー、どうやら…誰かに笑いかけてることを何度か見たことは…。あ、でもあったような気がするで。」

「あー…なるほど。そっか」

「でもなんでや？」

「ん、別に意味はねえけど」

「なんやそれ」

「わり、でも…そういえば、おめえ最近事件とか解決しにいつてんの？」

「まあ、時折やけど行つとるで」

「ふうん、さすが、西の高校生探偵じゃん。時期に日本の名探偵とかわれんじゃねえか？」

「は、そんな簡単にいかへんやろ？でも俺、工藤には負けへんで」

「良く言つぜ。いつも俺より劣ってんじゃん。競ると」

「じゃあぁしい！今は違うで、絶対」

「ぶはっ…んな怒んなよ。別に侮辱してるわけじゃねえんだから」

「いや、軽くしとつたで」

「そおか―？」

「やっぱり工藤悪意ない分タチ悪いで」

「んなっ…タチ悪いとか言つなよなあ」

「ははっすまんすまん」

「ふ…。」

コナンが急に微笑むので服部はパチクリ目をさせて首を傾げる。

「なんやねん？」

「やっぱおめえと話してつと、すげえ楽しいわ」

そのとき。すつと自然にこぼれた、服部に向けられた笑顔。

服部は、その笑顔に驚いた。

そして思った。

こいつ、自然に笑うと、ごつつ良い顔してるって。

ちよつとこの笑顔は…

「初めて見たわ…」

思い出した。今まで見たことのある工藤の笑みは、冷やかな笑みと、嘲笑いと、あと優しい笑み。

こんな自然な笑顔は初めてだ。

それを見た服部はなんだか嬉しくなった。

「ん？何ニヤニヤしてんだよ？」

「いやだつて、お前のその自然な笑顔をはじめて見たんやもん」

「えっ…ああ、そうだった…???」

???とコナンの頭には浮かんでる。

「そつやで。ま、ええわ。なんか貴重なもの見させてもらたしな」

「貴重？」

「せや、貴重。。。んま、いいもん見れたで」

「ふうん…良くわかんねえけど。。。ま、おめえがそつ思つなら、
…別にいいか」

ふ、と今度は優しい笑みを漏らした。

なんや、なんや、工藤つて、案外良く笑顔になるやん。

もっと早く気付けばよかった。

こんなこと、こんなイイこと。

もっと早く知れていればずっと、今よりもたくさんこいつの笑顔に
気づけたかもしれない。

もったなかったな、って心底から思った。

なんとなく、工藤に近づいて工藤の髪をかき上げる。

「！？なんだよ」

「ん？まあええやん」

「てめ、ガキ扱いしてんのか？」

そう言つて工藤は俺の腕をつかみ引き離す。

「いや、別にしてへんで」

「んじゃああこの腕はなんなんだよっ」

「何って…なんとなく触つてみたくなつたから触っただけやん」

そついうと工藤のあがいていた動きが停止する。

そして口をあんぐりとあけている。

「おま…………それは…………変態だぞ」

「んなつなんやとお！？」

「いや、だって…おめ、そついう趣味だつて知らなかったから「ちやうわ……！」」

なんて馬鹿なこと言いながら、自然に笑いあえること、それだけでも、今はすごく、幸せだった。

でも、まさか。

まさかこれが。

服部とコナンの最後のふざけ合いになるなんて…

思ってもいなかった。

笑顔（後書き）

いよいよラストスパートです。

こんな話数になるなんて最初は思ってませんでした。が、いよいよここまで来ました。

最後の最後、よろしくお願いします。

突然の終り（前書き）

さて、この回は…

前話から、2、3週間たっている設定です

突然の終り

―悲劇は突然だった。

「工藤！しっかりせえ！！！！工藤！！！！」

「コナン君っコナン君！！！！」

「新一っしっかりするんじゃ！！！！」

「工藤君……！！！！」

事の始まりは、約2時間前にかかってきた一本の電話だった。

R R R R R R R R R R R R R R R R R R R R R R

阿笠邸で、電話が鳴り響く。

「はい、阿笠ですが……」

「米花総合病院です！阿笠さんですね！？」

「えっ……はいそうですがまさかっ……」

「至急いらしてください！コナン君の容態が悪化して、大変危険な状態です！」

「なっ…！わかりましたっ！」

そう言って博士は電話を切り、急いで哀と優作と有希子を呼び、車に乗り込む。

「博士本当なのそれっ…！」

車の中で哀は博士に聞いた

「ああっ米花総合病院から連絡があったんじゃっ…大変危険な状態じゃと」

「そんなっ…」

まさか、まさかこんな早く…

「急いでくれっ阿笠くんっ」

「分かっておるっ」

車内の誰しもの顔が真っ青だった

「新ちゃん…っ」

有希子はただただ祈っていた。

その1時間後程に、服部にも連絡が行っていたのか、思っていたよりも早く来た。

「工藤が危険な状態てっ」

和葉も一緒のようだった。

皆が急いで病室に駆け込むと、そこには主任の医師、たくさんの看護婦、そして、

たくさんの器具をつけた苦しそうにするコナンの姿。

そのあと、歩美、元太、光彦の姿も現れ…。

そして今に至る。

「コナン君っしっかりしてえっ」

「工藤っ工藤っ…生きろや!」

「工藤君！」

「新ちゃんっ、新ちゃんーっ!!」

もうみんな泣き叫んでいた。

ただ、コナンの命が終わってほしくなくて

もっと生きてほしくて

願って願って…

でもそんな願いだって、届かないときはあるのだ。

一人の看護師が心臓の脈拍を表すパルスオキシメータの数値を見て、さらに顔を青くして

「先生大変ですっ、心拍数っ下がっています!!」

「何っ…くそっ」

「低下したまま止まりませんっ」

その一言でさらに現場の雰囲気は焦りに変わる

それから心臓マッサージをしたり、心肺蘇生法を何度も試みた。

そのとき、うつすらと酸素マスクをつけたコナンの目が開く。

それに全員が驚く

「工藤っ！！」

「新ちゃんっ！」

コナンはゆっくり口を開き

「今…まで、…ありがとう？」

そして、最期に微笑んで、その目をゆっくりと、ゆっくりと、閉じた。

ピ

・
・
・
・
・
・

その音に

その、命の音を告げる音に

皆は絶望に、包まれた。

「く…どう…？」

「工藤、君…？」

「コナ…コナン君…！」

「いや…いやあああああ…！…！」

有希子は顔を手で抑え泣き叫び

歩美も元太も光彦も哀もひたすらコナンの名前を呼び涙を流し

博士と優作は何も言わずただ俯いて涙を流して

平次と和葉は

「なんでっ…なんで目え開けへんねんっおいっ！工藤っ」

「せやっ…工藤君あんたはっ蘭ちゃんのぶんまで生きなあかんかったやろっ」

「おい工藤っ工藤っ！工藤

っ！！

」

コナンのことを、誰がなんと呼ぼうと、もう誰もそんなこと気にかけてなかった。

『今までありがとう』

そんな言葉を残し… -

江戸川コナン、そして工藤新一は、たくさんの人と涙に包まれながら

この世を去った。

突然の終り（後書き）

いよいよ、亡くなってしまいました。

今回は2話連続投稿とさせていただきます。

故、よろしくお願いします。

最後の言葉―遺書―

コナンがいなくなってしまったこの世界に

絶望を味わうものは多くいた

いまだに、この世を去ってしまったコナンが横たわるベッドから、
離れるものは誰一人いなくて。

聞こえるのは、泣き声…彼の名前を呼ぶ声…ただそれだけだった。

数日後、コナンの通夜、そして御葬式が開かれた。

そこには、平次、和葉、平次の両親、和葉の両親、哀、博士、有希子、優作、歩美、元太、光彦、担当医の種田、帝丹小学校の生徒、小林先生、その関係者、高木刑事、佐藤刑事、目暮警部、白鳥警部、千葉刑事、その他の警察関係者、そして、小五郎、瑛理、園子…

多くの、たくさんの人が来ていた。

中には小五郎や、瑛理、園子、その他の刑事や警部、学校関係者は

コナンの病気のことを知らなかったものも多くいて。

その事情を聞いて、蘭の親友であつた園子でさえも、涙を流していた。

「コナン君はな、そんな病気の中でも蘭君の分まで必死に生きようとしてたんじゃないっ」

博士は泣き泣き、すべての理由も事情も話していた。

一方平次は、棺に眠るコナンの顔を見て…

堪え切れなくなった涙を、ただ流していた。

なんで、こんな早く逝つてしまったんや

まだ、お前に話したいことも

お前としたいことも

ぎょーさんあつたんで。

なのに…

「服部君」

その声に涙をふき顔をあげると

そこには種田医師がいた。

「なんや、あんた」

「すまなかった…彼を、救えなくて」

頭を下げる種田医師に対して服部は

「謝んなや、そないことしたって、何も変わらんやろが…それに、
工藤だつて精一杯生きてきたんやっ…それを頭下げることだけで片
付けんなやっ…!!」

怒りと悲しみが緋い交ぜになった、そんな叫びだった

「工藤はな、…すごい奴やつたんや…」

それに対して種田医師は顔をあげ

「そう…だな」

そういつて、懷から何かをとりだし、服部に差し出す

「…なんや、それ」

「彼の、最期の言葉だ」

「工藤の…てことは、それは…」

医師は頷き

「遺書、ということになる」

服部は一瞬目を見開いたが、すぐそれを受け取ると、強く握った

そして、それを持ってどこかへ走って行ってしまった。

その先は、阿笠のところだった

博士はその服部の姿をとらえると

「…服部君、どうしたんじゃ」

「これ…読んでくれへんか。みんなの前で」

「え？」

それを見ると

「これは新一の…遺書？」

「そう…みたいや、きつと工藤のことやから…みんなに向けて最後の言葉残したんやと思う。から、読んだってほしいんや。俺。読んでもええんやけど…標準語、うまくっしゃべれへんから」

「そう、か…」

「…ええか？」

「…ああ。新一の最期の思いが詰まってるんじゃないかな…」

そういつと寂しそうに、微笑んだ。

そうして2人して前に出る

「みなさん、聞いてほしいものがあります」

そう博士が少し大きな声を出すと場が静まる

「コナン君の最期の言葉があつたので、読みます」

それに皆の視線が一点に集中している

そして博士が封筒から紙を取り出す

しかしそこでふと、気付くものがあつた

封筒の中に封筒がある…？

その封筒の表には「服部へ」と書かれていた。

それを見て、博士は一瞬微笑み、服部に渡す

「え…これ」

「あとで読んであげてみてくれ」

「あ。おう…」

そして別にまた紙を2、3枚はあるだろうか。それを取りだす。

その紙を博士は意を決して読み始めた

「まず、最初に、みんなごめんなさい。俺のせいで、いろんな人たちを巻き込むことになって。

…蘭が死んでしまったてからは、俺は最初絶望みたいな闇に包まれてた。

でもそれを救ってくれた人がたくさんいた。だから、俺は立ち直れて。

でも、俺にはもう治らない心臓病があった。最初は、死ぬなんて、別に怖くないって。俺が死んだって大したことないだろうって思ってた。

でも、違った。服部や、歩美、光彦、元太、灰原、博士、1年B組の人たちが、くれた優しさが、俺にたくさんの光をくれた。

だから、生きたいって思うようになった。俺のことをかばって死んでしまった蘭にも、必死に生きていくからって誓った。

そう思わせてくれたのは、間違いなくみんなだから。

毎日見舞いに来てくれることや、来るたびに話をたくさんしてくれること、ボイスレコーダーでメッセージを伝えてくれたことが、俺にとってすごく、嬉しかった。

そうして、幸せを感じられる間でも、俺の病気の進行が止まってくれることはなかった。

でも、死ぬ時、後悔はしないだろうなって思えた。

後悔しないために生きる前に、どう生きたらいい？って考えたりすることもたびたびあったけれど、

その考えを出してくれたのは、俺自身じゃなくて、周りの人たちだった。

だから、感謝してた中でも感謝しきれなくて。

もつと身体が丈夫だったころと比べれば、たくさんのができなくなっただけ、たまに、死にたくないなって思うようにもなった。

でも、逆もあった。たくさんのができなくなっても、その引き換えにたくさんのご飯、得られるようになった。

母さんや父さんが忙しい中、近くにいてくれたこと本当は知ってたから、それもそれで、十分嬉しかった。

見えてなかったことが見えるようになって、俺自身の考え方も見方も少し成長できたような気がする。

自分の終わりを確実に分かっているながらも、やっぱ必ず思うことは変わらなかった。

俺が死んでも、みんなには、全力で生きてほしいってこと。

みんなが自由に一生懸命生きてくれることが、本当の俺の望みだから。

わがままにわがままを重ねてきてばっかだったかもしれないけど、これだけは叶えてください。

そして、最期に、いつも思ってたけどなかなか言えなかったこと

ありがとう。

みんなが幸せになることを祈ってます。」

いい終わった時には、誰もが涙を流していた。

最期まで、周りの人のことばかりを考えていたコナンは

たくさんの人に、愛されていたのだ。

その中、服部は自分宛に書かれた言葉を読み始めた。

「服部へ

お前にだけは、ちゃんと、個人的に言っておきたかったからこっちに書くな。

今まで、マジでありがとう。

お前とはふざけあったり、推理勝負したり、とかそんなばっかだったから、あんまいつもちゃんとした礼とか言えなくて、ごめんな。

それから、服部。俺、お前がいてくれてほんと良かった。

蘭が死んで、正直あるとき、もう絶望しなくて、救いようのなかった、情けなかった俺を闇から引きずりだしてくれたから、俺は、ちゃんと俺の意思を持っていられた。

きつと、服部がいてくれなきゃ、何もできなかったと思う。

それだけじゃない。俺の病気のせいで迷惑すごくかけてんのに、大阪から何度も何度も、元気で馬鹿みたいに来てくれることも、電話をかけたりにしてくれることも、本当は、すげえ嬉しかったんだ。

お前のこと馬鹿だっと思ってた。こんな俺に、優しい笑みとか、言葉とか、怒りとかたくさんくれてさ。

俺にとつちや、最高の薬でもあったような気がする。

生きたいって思えるようになったのも、蘭にちゃんと向かい合っていける気持ちを持ったのも、病氣と闘うように思えるようになった

のも、すべて、お前のおかげだ。

俺は、俺自身は、自分が無様だなんて思うこともよくあった。

けど、俺は、自分の限界をどこまでかを知るために生きてるわけじゃなかった。

そんなもの知るために、生きてたらお前に会わせる顔がなかったかな。

病気になってからは、よく泣いた、ような気がするけど……それと、お前も、泣いたことあったっけかな。

あのときは、見えなかったから。

俺が理由でそんな涙流さしちまったんなら、ごめんな。

謝ってばかりだけど、俺、そんな人生に後悔してない。

手を伸ばして、空に進んで風受けながらも生きてきたこと。

進める先には果てがあつたんだ。

俺はその果てに辿り着いたら、死ぬんだってことも分かるようになった。

こんな考え方、滅多にしなかったのに、死ぬこと分かってからしよっちゅうするようになった。

だからお前にはさ、このこと分かってほしかったんだ。

というより、お前には、果てなんていらぬい。

どこまでも、進めよ。

最高の人に、探偵に、お前ならなれるって俺は思っから。

だから、頑張れよ。

俺はもう二度とお前と話すことも何もできなくなるけど、でも俺はお前の記憶の中でならずと生きていけるから。

和葉ちゃんとも幸せになれよ。

結婚したら、知らせてくれよな。でも、あんま痴話喧嘩すんなよ？

本当に、お前といた日々、すげえ楽しかったよ。

最期に、自分の信じた道、歩いて行けよ。

ずっと、ずっと願って、見守ってるから。

新
「

その手紙にはところどころ涙が乾いた跡があった。

それをまた重ねるように、平次の涙がその言葉の上におち、滲んでいった。

最後の言葉―遺書―（後書き）

長くなってしまいましたが、いよいよ次がラストの話になるでしょう。

読んでくれたみなさん、本当にありがとうございました。

未来へ（前書き）

いよいよ完結に入りました！

どうぞ、物語的には最期になりますこの話を、どうぞよろしく願います。

未来へ

工藤の最期の言葉を読んだ日から、もう数カ月たった。

すっかり外は、暖かさを増し、緑が木々に目立つようになっていた。

でも、そんな季節の移り変わりも、服部にとって、どうでもよくなっていた。

何もかも、すべて、濁ってしか見えなかった。

大切な、大事な、最高の親友を亡くしたショックは、想像以上に大きかった。

俺の中の何かが抜け落ちたみたいで、どうしても、まるで中身の無い、そんな俺になっていた。

笑わない、怒らない…表情のない。まるで、人形のような…そんな人間になっていた。

工藤の最期に残してくれた言葉に書かれていた願いは、俺の中で消えかけてた。

それよりも、喪失感が大きすぎて、何もせず、気付けば幾多の日々が過ぎてた。

学校も、行ってもろくに授業に集中せず、部活も行かなくなってた。

本当にもう何もかも、自分の人生も、どうでもよくなってた。

まるで、毛利の姉ちゃんを失った時の工藤のように。

もう、あいつは戻ってこない。

戻ってこないから、何もできない。話せない。

もう二度と、あの笑顔も、怒った顔も、見られない。

もう二度と、あいつに会うことができない。

ああ、あいつ…工藤は、姉ちゃんを失ったとき、こんな気持ちだったのかな…。

そんなことを考えては、無駄に終わってしまう日々が、何日か続いていくところ…

その日は、俺の思考とはまるで正反対の晴天の空だった。

縁側にただ、無気力に座っている俺に、ある人物…和葉が、話しかけてきたのだ。

でもその顔は、悲しみにあふれてた。

久しぶりに、こいつの顔を見た。

ここ最近、全然見てなかったような気がする。でもそんなこと、気にする余裕ない。

けど、和葉は俺の前まで歩き、そこに立ちはだかった。

そして、口を開くと

「あんた、いつまでそうしてるつもりなん？」

怒りと悲しみが混ざったような声で俺に問いかけてくる。

「なあ、平次…いつまでそうしてるつもりなん!？」

そう言って、胸倉を掴んできた。

「なにす…ほんと、情けないな、あんた」

「は…?」

「何やの、その目。濁りきつとるやん。昔のあんたそんな目してなかったやろ?」

そんなのは…工藤が死んだから…

「言い訳すんやないで。あんた最低やんつ…何やの?あんた、本当に分かっとんの!?工藤君が、なんであんな言葉残したか分かてんの!?!?」

その言葉に服部の目が見開かれる。

「あんたみたいにならへんためやないの!?そうやろ!?工藤君がつ、ずっと世話なつたつて思ってたあんたに、ちゃんと前向いて進んでほしかったから、あんな言葉残してくれたんちゃうの!?!」

和葉の目からは涙がこぼれおちてる。

「工藤君言つたやんつ…!全力で生きてつ!みんなが自由に一生懸命生きることが望みやつて!忘れたん!?!?なのにつ、あんたの今の生活もつ、その目も、それを裏切つてんで!?あかんやろ!?大切な親友やつたんやろつ!?そんな工藤君を裏切つていいと思つてるん!?!?」

「かず…は…」

和葉の力強い言葉で、平次の脳はどんどん、覚醒していく。

「あんたはっ、あんたがやることはっ、そんな工藤君の分も、必死に生きてくことちゃうの!？」

そうや。

そうやん。

工藤はそのために俺にあれだけの言葉を残したんや。

俺に、まっとうな道を歩いてもらうために。

全力で生きていくことを願ってるから、だから。

それに工藤言ってた。

お前の記憶の中で俺は生き続けくからって…。

もう、直接会うことはできないけど、だけど、俺の中で工藤が消えることなんて決してない。

だったら、いいじゃないか。

そんな工藤に向かい合いながら、俺は信じた道を歩いていこう。

俺がそう思えるように工藤は、この人生に悔いはないことを示して

くれた。

そして、あいつは俺に、『お前に果てはいらない』って言った。

だったら、見てろよ、工藤。

お前が思ってるよりも、ずっと、ずっと、最高に誇れる人生歩んでやるで。

だから、見てるんやで。

「和葉、ありがとうな。よお、分かったわ」

そうして再び俺は目にも光を取り戻すと、空を仰いだ。

―10年後

『さて、先日また日本の救世主である名探偵、服部平次さんが都内で起こった事件を解決しました！彼が、行くところでの事件で、解決せぬことはありません！』

そう活気よく話しているのは、街中のテレビの中のリポーターだ。

「あ。服部さんまた出てますよ」

「本当だー。すごいよねえ」

「俺たちも負けてないだろ！なっ、そう思うだろ？ー灰原！」

「そうね」

そうほほえましく笑い合うのは、帝丹高校の制服を着た歩美、光彦、元太、哀だった。

「あたしたちもこれくらい有名になろうね！ね！みんな！」

「ですねっ。」

「負けねえって！俺たちならよっ！」

「ふふ、頑張りましょ。」

「あ、ねえ哀ちゃん、そういえば明日だよね」

「ああ、そうね。？彼？の…」

「有希子」

「なあに、優作」

「服部君も、立派になったもんだなあ」

ソファーに座り、テレビを見ながら微笑ましく言う。

「ホントよね。今じゃもう、本当に全国的な有名人になったものね」

「ああ…そうだな、阿笠君もそう思うじゃろ？」

だいぶ老けはしたが、まだまだ健在の博士に話しかける。

今は、たまたま博士が遊びに来ているのだ。

「そうじゃな…。きつと？彼？も天国でそれを見て喜んでるじゃろ」

「そうよね……。明日、だものね」

「そうだな」

―翌日

「ほら、平次ー、支度できたあ？」

そう言っているのは正装をしている和葉だ。

家の中で声がこだます。そう、2人は結婚をして、同棲しているのだ。

「ああ？ちよお待てや、もうすぐ……」

「遅いてっ、早く行かな遅なってまうやろー？」

「わかってるて！ほら、もう行けるしええやろ」

ポケットに手をつっこんだまま、さらに成長した背丈、顔つきで、家を出た。

「にしても、早いなあ……」

「せやな…もう今日で、？10回忌？や」

「あたしらも、そんだけ成長したってことやて」

「そつやな……」

「？あいつ？もあつちで、…幸せにやってるやろか」

「心配せんでも、やってるて！な！」

そついうと和葉は、平次の手をとり、東京へと向かった。

「あ。誰かいるで？」

「ん、ホンマや。…あれは……」

「あら！服部君じゃない！」

「あ、ども、こんにちわ」

有希子だ。

「今年も来てくれたのね、ありがとう」

「いえ、毎年のことなんで」

「きつとあいつも喜んでるよ」

そう言い出てきたのは優作だ。

「あつ、服部さんいますよ！」

「あつ、ほんとだ！もうあんなにいる！みんな早いなあ」

「ほら、博士、急いでくれない？」

「ま、待ってくれ哀君、わしも年なんじゃからっ」

「十分元気だから大丈夫よ」

冷たく笑う哀は軽く怖い。

みな揃ったところで、ある人物の墓の前に立ち揃う。

そして、服部は買ってきた花をそつとそえる。

「久しぶりやなー、工藤」

そう言い、ふと笑う。

「な、工藤、またみんな成長したやる。それに俺も…。お前言うてたとおり、今じゃしつかり探偵やつとるで。見とるか？俺の活躍」

「活躍で…自意識過剰やて、平次」

はああ、と呆れ顔でため息をつき、突っ込みをいれる和葉。

「うっさいわ和葉っ」

その夫婦漫才に、周りのみんなは笑う。

「あたしたちも高校生になったけど、探偵団は健在だよ！」

「そうだぜ！結構学校内では有名なんだぞ！」

「服部さんにだって負けてませんよ！ねっ灰原さん」

「ええ、私もそう思うわ。みんな…こんな成長したわよ？工藤君」

「それぞれみんな立派に生きているぞ、新一」

「お前の望みは叶えられているからな」

「そうよ新ちゃん。だから、安心しなさい？」

それぞれ一言一言新一、コナンの墓に向かって話していく。

「なあ工藤…もうあれから10年やで…。ほんま早いよな…。時間過ぎんのは。お前、向こうで元気にやっとなるか？…元気だったらええけどな。 - お前はずっと俺ん中でおるけど、やっぱそれでも時々…会いたくなるんやで。お前に負けん思つて、全力で生きとるから…心配すんなや？俺も、みんなも、ちゃんと、自分の信じた道、歩いとるから…。だから、お前はこれからはずっと、ずっとそんな俺ら、見守っててな」

そう言つて、にかつと最高の笑顔をその墓…いや、工藤新一、江戸川コナンに見せた。

未来へ（後書き）

いよいよ、完結しました。

次回はあとがきです。

今までのお礼とつ書きたいと思うので、どうぞ最期までよろしくお
願いたします。

ありがとうございました。

後書き

ついにこのお話も完結を迎えることができました。

今まで応援してくださった皆様本当にありがとうございます。

この小説は、コナンが愛する人の死で不良になってしまい、それを救っていく人との描写、そこからまた希望をもち始めるコナン。

そして、自分に下された時の死の宣告を受けたコナン。

そんな状況からいかに変わり、いかに成長し、そして、たくさんの人に愛され亡くなるコナンは、どのような存在であったのか。

そのようなことが書けたらいいなって思い、書き始めたものだったのですが、想像以上にたくさんの感想などいただけたので、涙が出るほど嬉しかったです。

書いてる最中、辛くなってしまいうこともありましたが、無事終われて良かったです。

また、何か機会があれば書くことをしたいと思いますので、そのときは、何卒よろしく願います。

後書き

ついにこのお話も完結を迎えることができました。

今まで応援してくださった皆様本当にありがとうございます。

この小説は、コナンが愛する人の死で不良になってしまい、それを救っていく人との描写、そこからまた希望をもち始めるコナン。

そして、自分に下された時の死の宣告を受けたコナン。

そんな状況からいかに変わり、いかに成長し、そして、たくさんの人に愛され亡くなるコナンは、どのような存在であったのか。

そのようなことが書けたらいいなって思い、書き始めたものだったのですが、想像以上にたくさんの感想などいただけたので、涙が出るほど嬉しかったです。

書いてる最中、辛くなってしまいうこともありましたが、無事終われて良かったです。

また、何か機会があれば書くことをしたいと思いますので、そのときは、何卒よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2741m/>

愛する人の死・・・そして不良へ

2011年5月11日20時56分発行